演藝畫報

六月号 第拾輯

昭和二年五月三十日印刷
昭和二年六月一日發行

婦女

六月號 七十錢

シベリア横斷記（無限の平野の情景が人見氏のこの紀行文によつて窺はれます…）人見絹枝
二月堂……下村海南
ロスアンゼルスの思ひ出……石井滿
雪さん（現代日本諷刺小説）……堀口九萬一

亭主操縦法
夏の日の或る朝…小寺菊子
亭主に縋る…岡田初代
夫に操縦される…岡村文子
こんな二人…長谷川時雨

夫の生活機
婦危
危期救助法（結婚生活に於て何人も一度は必ずこの苦い經驗を嘗めねばなりません。そして往々にしてその結果が悲劇を生み勝ちです。かゝる場合に如何にしてこれを切り拔けるか。井上、岡田、谷崎三氏の一文は、これが解決救助法を最もよく語つてゐます。實際問題として愛讀者諸姉の必讀を希望します。）……井上康文
危期を救ふ……岡田三郎
無智から誘因……谷崎精二

女流聲樂家總まくり（代表的な十七氏を擧げて最も嚴正公平に批判したる記事）XYZ

東京放送局裏面史（伏魔殿の如き東京放送局に最初のメスが加へられた萬天下數百萬の視聽を集？）長田幹彦

創作
戯曲 霧の中（得意のサナトリアムものである新鮮な力學的な會話の建築が霧に包まれてたつてゐる……）横光利一
小説 冬子よ何處（冬子と呼ぶ從妹を救はんが爲め主人公は如何に複雜な苦惱と悲哀とをなめたか新人生派の名作）戸川貞雄
小説 五位鷺（人々はこのグロテスクな等物語の各々に觸覺を有する言葉の運動を見出すであらう……）内田百間
小説 田舍の父（娘の結婚に對して冷酷な父それ故に惱む娘の苦惱若き未婚の女性は先づこの作を一讀せよ……）瀧井孝作
至妙な氣持を與へる鷹野つぎ子供と嘘三宅やす子
子供と嘘のたね蒔く母親に井上美代
親に罪あり山田邦子
日本の女子スポーツ界（これ實に日本女子運動界の縮圖とも言はるべきもの得難き好記事）運動記者

新會面の社判
社會記事を讀む心持生田花世
讀者の興味を重んじる…中河幹子
エグザクトに…櫻田ふさ

東京市丸ノ内ビルヂング四階
婦女社ノ
大阪市東區野村ビルヂング六階
婦女社ノ

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

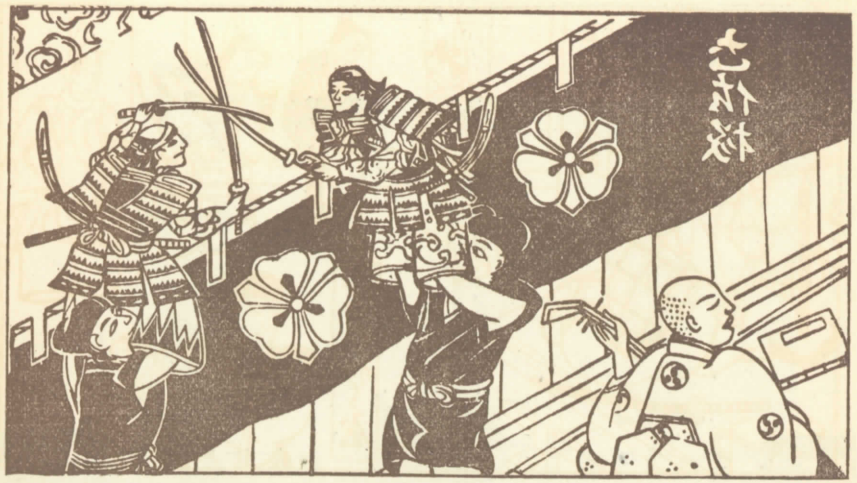
昭和二年六月一日發行　　第十輯・六月號

道頓堀

口絵　◇中座の六月「龍門黨異聞」伊井の講釋師南龍と河合の女房お玉◇「戀の受難」伊井の井上和吉と村田の月子◇「都島原」河合の仲居德野と河村のお葉◇浪花座の新國劇「桃中軒雲右衛門」澤田の雲右衛門と久松のお妻◇澤田の國定忠次◇辨天座の「生寫朝顔話」と角座の淡海劇「諸襟二人組」◇道頓堀の五月、辨天座の文樂と角座の淡海劇◇中座の「鹽原多助」と切「廿四孝」◇浪花座の井上一座◇第四回川柳座主催の故片岡愛之助追悼句會

寫眞

新派・劍劇・喜劇・淨瑠璃　白井松次郎　二
人形淨瑠璃の危機　高安月郊　四
「朝顔」の話　木谷蓬吟　六
朝顔日記考說　高谷伸　八
大井川の雨（淨瑠璃物語）　素木宗一　三
文樂漫筆　高原慶三　一六
文樂雜詠（川柳）　日比繁二　一九
文樂私議　富田泰彦　二〇
榮三と文五郎　京極利行　二三
鳴呼如柳　四海波濱太郎　二六
文樂雜話　並山拜石　二八
幕內外一品料理　鳥江銕也　三〇
龍門黨異聞の內容　油屋久二　三二
中座の「戀の受難」について　平野止夫　三六



御挨拶　伊井蓉峯　三八
新派に對する感想　河合武雄　四〇
「龍門黨異聞」に就て　小酒井不木　四二
ほんの小さな感想　楠田敏郎　四五
彼等の求むる戲曲　鈴木善太郎　四八
苦悶する澤田　額田六福　五〇
涙花座から涙花座まで　十菱愛彥　五二
道頓堀の灯に微笑む追憶　澤田正二郎　五四
「桃中軒雲右衛門」私見　津村京村　五六
戲曲「桃中軒雲右衛門」評　安間確郎　五八
眞山氏の「桃中軒雲右衛門」その他　綿貫六助　六一
澤田に就いての感想　林鷗南　六六
澤田の努力　淸水三重三　六七
劇壇漫語　姥谷久一　六八
桃中軒雲右衛門（芝居物語）　山上貞一　八四
喫煙室　高橋蓼雨　九六
澤田正二郎に對する印象・感想・希望　諸名家七十餘氏　七〇
□第四回川柳座（如柳追悼句會）　□讀者倶樂部
□編輯後記　姥谷生　□表紙　大塚克三

七　龍門黨異聞　小酒井不木作

伊井蓉峰の講釋師南龍と河合武雄の妻お玉

中座の六月

風味の群集

マルキン醤油

さぬき小豆島
丸金醤油株式會社

眞山青果脚色　都　鳥　原　七　場

河合武雄の仲居德野と河村菊江のお葉

中座の六月

平野止夫作　戀の受難　二　幕

伊井蓉峰の井上和吉と村田嘉久子の明石月子

中座の六月

幕二　國定忠次　作風李友行

澤田正二郎の國定忠次

浪花座の新國劇

幕四　桃中軒雲右衛門　作果青山眞

澤田正二郎の雲右衛門と久松喜世子のお妻

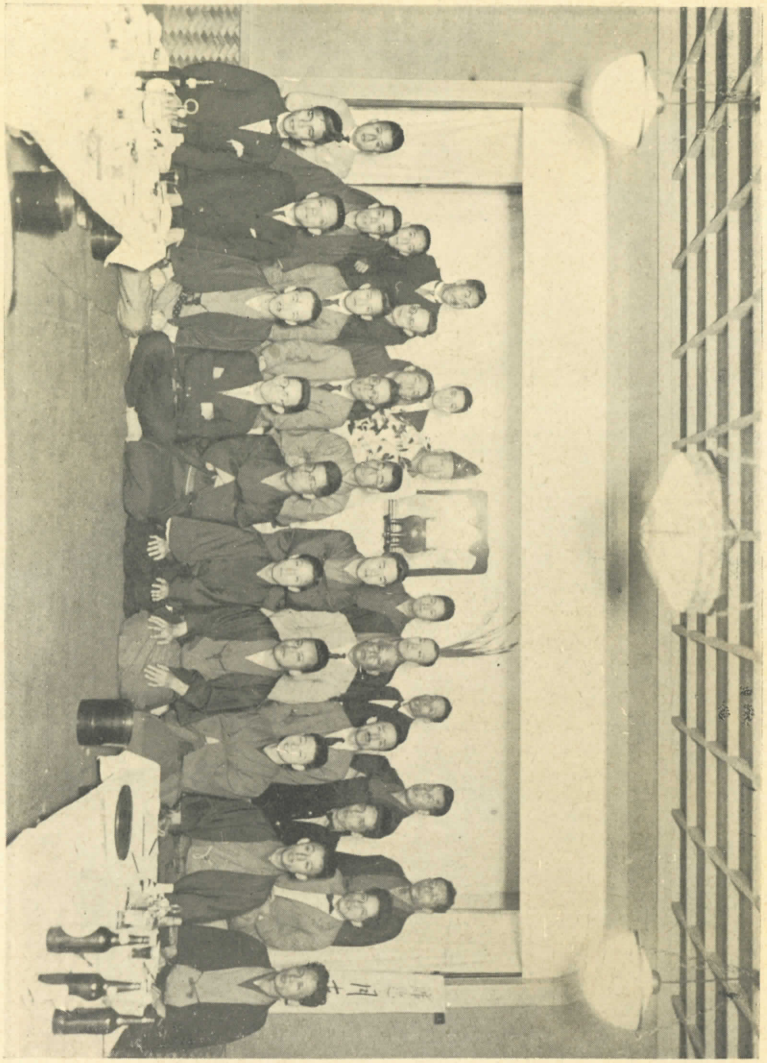
浪花座の新國劇

辨天座の六月興行と
『生寫朝顔話』

角座の淡海劇お名殘
『詰襟二人組』淡海の盜人一平と綾子のかの子夫人

道頓堀の五月

辨天座の文樂（イ）寺子屋（ロ）文五郎のお園（ハ）桑三の忠兵衛（ニ）車曳
角座の淡海劇（ホ）「重い提灯」淡海の小使仁平



第四回川柳座故片岡愛之助追悼句會

前列（右より）克三、扇、魁童、蹄二、一白、成太郎、舟人、竹人、文錢、文久
中列 久二、花坊、種二、水府、萍水、蛟象、春歩、木午、愛松、燈雨、遺影、三巴、夢路、南北、波郎、義矢、滿、繁二、順三、鉄
後列 也、大平、蝶二（記事參照）

劇とキネマ欄を新開拓したフワンの見逃がす事の出來ぬ

大阪新聞

休無中年

一ケ月 五十錢

特色

水曜日に……内外キネマ界の事が洩れなく全紙面を埋める「大阪キネマ附錄」（本紙二頁大）と土曜日に……家庭の御婦人達が必ず一讀を要する流行記事を集めた土曜附錄（本紙二頁大）を添附

本社 大阪市西區土佐堀船町壹七ノ壹
電話土佐堀 六三〇〇番・六三四〇番・六三四一番

東京支局 東京市京橋區丸屋町五番地

神戸支局 神戸市下山手六丁目電停前

新緑！爽やかな候

すつかりいゝ氣持になつたお芝居氣分に
ピタツと適つた自慢の献立……ぜひ御會食を。

お芝居の
幕間と
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

梅園

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

新緑の候 潑溂たる
お姿を……中座三階の
電光寫眞……にて
印象深き一葉に
あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

粋と趣味……
きつとあなたの御氣に召す
芝居好みの
人形玩具
中座賣店の
利久堂

銀行會社等の經濟記事は精細を極め
演藝映畫其他の趣味讀み物は豊富
四面滿載の市場商況殊に
米界の報道は日本一の誇り！

本紙夕刊四頁
本紙定價 一部 金二錢
一夕月 五十錢 郵稅共 六十五錢
廣告料 十五字詰一行金一円二十錢
特別 一行金一円五十錢

スキナ脂取紙（あぶら）

若葉風薫る初夏の候

肌は汗ばみ顔に脂の浮く時

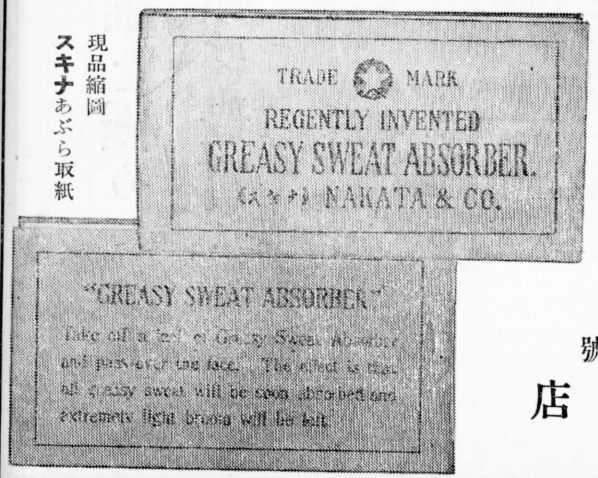
お手ばなしの出來ぬあぶら取紙！

今人氣の集中せる『スキナ』

あなたのスキナあぶら取紙は

道頓堀各座の賣店及化粧品店にあり

御愛用を願ひます



現品縮圖
スキナあぶら取紙

本舗
スキナ屋號
中田商店
大阪

アフリカの曠原に
原始時代を繼承せるロッグハウス
そのまゝの趣味と感じを出せる
モカのコーヒの和やかな
愛のまどひの

モカで有名な
喫茶店
ロッグハウス
—洋酒其他の飲物完備—
高津郵便局東——
電話 南四二四四番

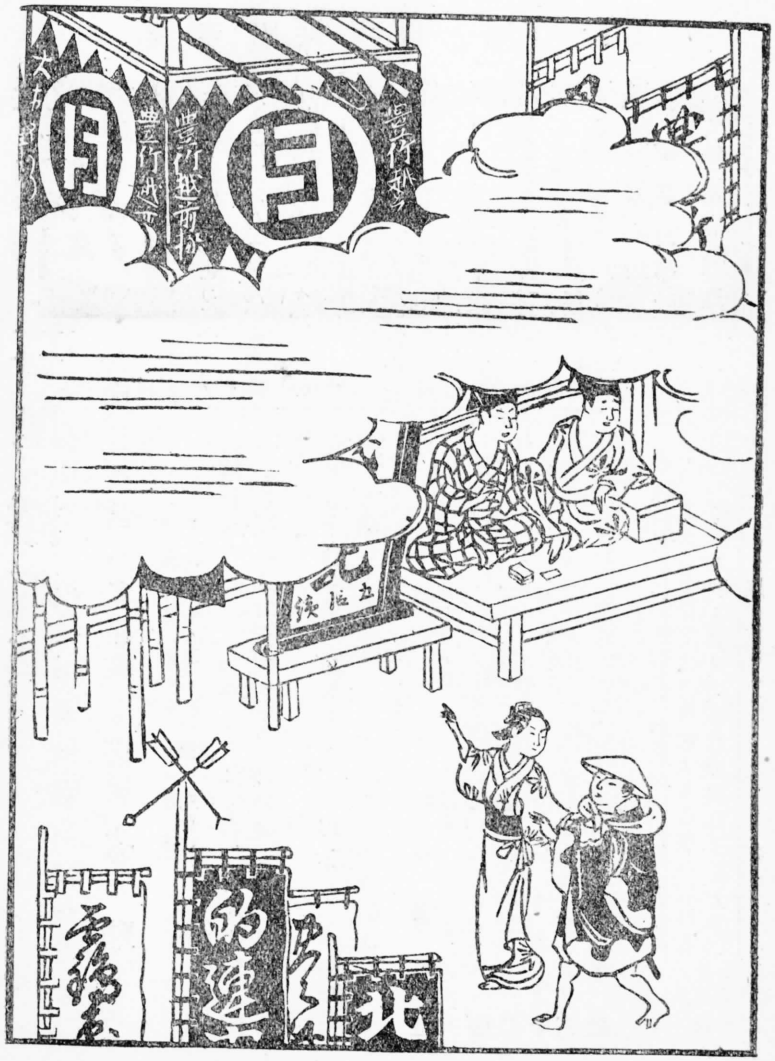
山崎寫眞館

優秀の技術と迅速が當館の有
つ唯一の誇りです。
御散索の折にぜひ御立寄りを。

月刊・演劇研究・雜誌

道頓堀

六月號・第十輯



「豐竹故事」中の卷より（南木芳太郎氏所藏）

るれか好ちつい

折紙附の御贈答品は

優美。體裁。利用と揃つたる

松竹通覽切手

この切手一枚で全國何處へ往つても松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

お手頃の種類

十一圓・二圓・三圓・五圓・十五圓・廿圓・五十圓の八種

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品本家茶屋直營の案内所等一切の御支拂に通用致します

様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です

お手近の發賣所

大阪南區久左衛門町八
松竹合名社（電南一二四〇・六六八五）

大阪道頓堀
角座（電南六九五六）

大阪東區高麗橋心齋橋筋
プレイガイド（電本三三〇九・三九九五）

京都市河原町蛸藥師上ル
松竹合名社（電中二三五二）

其他各座にては三日前より場席の取れる指定番號入前賣切符も發賣してゐます

新派・劍劇・喜劇・淨瑠璃

白井松次郎

財界の不安も漸次一掃されて世はほんとうにすが〳〵しい初夏となりました。この間、春のをどりを終つたかと思ふと。もう夏の陣立をせねばなりません、劇界程あわたゞしいものはありません。私共は六月が來ればもう七月、七月が來れば八月と、次から次へ前々から先の腹案を立てゝ行かねばならないので、氣持の上では時候より先へ走つてゐる譯です。さてこの月の劇界ですが、御承知の如く浪花座に新國劇澤田正二郎一座、中座の東京大新派劇、角座の淡海の喜劇、辨天座の人形淨瑠璃と、いづれも清新な出し物を揃へました。

×

そして、こゝに一言したいことは、昨今、劇界で兎角に論評されつゝあります新派劇についてでありますが、新派不振は餘程以前からの現象で今に初まつた事ではありません。大阪——道頓堀に於ける新派の盛衰のあとを檢しますのに、ずつと昔の高田實在世當時は何と云つても新派は全劇壇を壓倒した樣です。鴈治郎がザンギリ物をやつたとか、仁左が『乳姉妹』の君江に扮したといふ嘘の樣な話題も、また歌舞伎畑の人で流行の家庭小說の劇化をさかんに試みたといふ事實は、いづれも黃金時代の新派に押されて同じ流行を追ふた現象とも云へるでせう。しかし新派劇はそれから色々の形式を踏んでやられて來てゐます。大正八九年頃迄はまだ〳〵あれでも人氣は保持されてゐたと思ひます、それがどうでせう、悲しむべし、こゝ四、五年の間といふものは全く新派劇の前途が危惧され通しです、だからと云つて今日招いた新派不振の原因の依て來つた所を究め樣といふのではありません。私共は現下の新派劇を背負つて立つてゐる人々に大いに期待したいと思つてゐます。今度中座に久々振りで河合武雄、伊井蓉峯の兩巨頭が帝劇女優を合同させて探偵小說劇や社會喜劇、それに一種の情緒劇とも云へる悲劇風のものを取揃へて倦土重來の勢ひで關演されるに當り、必らずや何ものか期する所のあることを强く信じて止まない次第です。もう現今では『新派劇』はほろびました。河合、伊井等は自ら自由俳優として新しいものを新しい世に問はんとしてゐます、吾等は『超新派』の出現をのぞんでゐます。

×

井上正夫といふ人の熱心さにいつも感心させられてゐます。此間の『平將門』を見ても全く驚きました。井上は『明日の演劇の人』だとさう思ひました。その井上を思ふ時、いつも對立的に忘れられないのは澤田正二郎です。今度の浪花座の『桃中軒雲右衞門』を出すについて、その名題を聞いたゞけでも既に世間の興味を惹くに充分だと思ひました。澤田は拔目がない、それにきつと的を外さない。澤田は今日の演劇の人』だと思ひます。と同時に澤田の劍劇も今日では劍劇の領域を立派に突破してゐます、雲右衞門が單なる祭文語りや浮れ節屋でなかつたやうに、澤田もチヤンバラ本位の劍劇俳優でなく、ずつと超越した領域をシツカリ握つてゐると思ひました。

×

淡海の喜劇は角座に二ヶ月越しの打越しです。こゝは輕快な初夏にふさわしい出し物を並べてゐるソーダーフアンテンです、むぎわらのくだから清新なのみものを吸つて、のどの渴をいやして下さい。辨天座の文樂人形淨瑠璃も六月限り當分のお名殘りで、盆替りまでは休みます、前は『朝顏日記』の通し、土佐太夫の宿屋、中は『壇浦嫩軍記』で陣屋は津太夫、いづれも得意の語り場です。尙切は『伊勢音頭』を出します。

人形淨瑠璃の危機

高安月郊

この程東京音樂學校で編纂した近世邦樂年表の義太夫節の部は精細に斯道の變遷を示した好著で、それで見ても創業者竹本筑後掾の節をつけた物で今に殘つてゐるのは傾城反魂香それも吃又の一段が歌舞伎に傳はつて、其道では改作の方、冥途の飛脚、夕霧阿波鳴渡、それも改作、嫗山姥の一節位である。其沒後の物では國性爺合戰の一段、博多小女郎浪枕、心中天網島を近年復活したが、また改作に戻り、宵庚申も改作、それでは近松の筆も甚だ稀薄になつた。創業者の努力を傳へぬとは祖先に不忠實極まる譯で、然も後繼者より優る事萬々であるからは、出來る丈復活するのが義務で、また斯道の衰頽を振はす一法である。それも時代物より世話物で、それは歌舞伎でやるより、其儘で濟むから易い筈、唯節附が肝要、それも別に新手を要せぬ、古い所を詮議するにもおよばぬ。文句相當であれば好い。人形の衣裳こそ創作當時のにしたら目先も變つて面白からう。道具は出來る丈單純にした方が昔へ戻つて又最新の傾向にも合ふ。最も忌むべきは寫實である。

次の時期元文以後の物で殘つたのは稍多く、出雲、宗輔、松洛、文耕堂　千四等、是も合作の習慣がついたのは、それ丈獨創の才の缺乏を證明する、然し一場としては豐富になつたので、斷片になつても情力はある、がまた世詰より時代に應じて、人情を犧牲にする封建時代の道德、虚僞を承知の機關、歌舞伎に接近して、聞くより見た目の興ばかりを、にした技巧が段々現代に合はなくなつた。それに此方は未に其儘

で全部出すが、それは嚴しく選擇して一段づゝにした方が却つて生命を與へる譯である。到底自然や歴史を問ふ丈無駄であるからは、繪模樣と樂調で幾分か快感を與へたら足る。本文からして歌ふより言葉の方が多くなり、名句とすべき所は甚だ少なくなり、從つて節附も極つたと思はれる、歌舞伎との差別は先づそこにあるからは、勉めて臺詞より節に重きを置かねばならぬ。

其次の期明和以後は同じ樣のくりかへし、それも銀練より改作が多くなつたのは衰頽である。江戸で新淨瑠璃が出來かけたのは文化東遷の一端で、上方とは違つた色が出たかと見ると、それほどでも無く、矢口渡に關東言葉を使つたと云ふが矢張關西式、材料で白石噺、昔八丈、加々見山、先代萩など土地の物を取つた丈違ふ。多く女主人公で、それも戀より敵打、武士道が本意であるのも尙武の地の氣風をあらはしてゐる。然も大に展びなかつたのは、その節が大阪の民性の底から出たもので、江戸のとは根本的に違ふからである、されば他の江戸音曲ほど續出せず、暫して新作は絶え、歌舞伎の床に殘つたのも當然、文句丈他の節に貸して、道行などに傳はつたが、土地も江戸に變へねばならぬほど、到底他流では原文其儘の情調は出なかつた。

嘉永以後作者は無くなり、明治になつては作曲は團平が能くしたが、好作物を得ず、僅に壺阪を留めたばかり二代目は櫻時雨に節つけた位、太夫には春太夫、住太夫、津太夫、攝津大掾、大隅太夫など前代の政太夫　麓太夫、土佐太夫などには劣らなかつたであらうが、同じ頃の歌舞伎役者ほども一歩を進めようとしなかつた。然し創作が出なくなつてはどの道も畢りである。淨瑠璃に手を着ける人が無くなつたのは形式が極り過ぎたからで、義太夫節其物も亦其範圍一杯に展び盡したのであらう。大阪の民性から出ても、一面德川時代の影を受けたからは、時代が變つては其儘で伴はれぬ。さりとて現代相當にしようとすれば別の節にならう。されば義太夫としてはあの儘で出來る丈標本作を選拔するより外は無い。人形の方が新しい象徴的戯曲に用ゐられよう、然しそれには新しい頭と手のある人形つかひを要する、第一役者より人形の方が演出に適する戯曲が出ねばならぬ。それは容易な事で無い。道頓堀へ戻つて却つて、好況とは喜ばしいにつけてはいたら徒に惰力を引く丈では危ない。内部に於ても更に過去を顧み、現在の空氣にも接觸して、もつと研究的態度を取るのが肝要である。

朝顔の話

木谷蓬吟

今度文樂座にかゝる藝題『朝顔』に就て、かゞの生えた古いところを、記憶から喚び還へして見る。

朝顔の狂言と歌舞伎との關係は、そも〳〵芝居芝叟の長話『蕣』から話さねばならぬが、それは餘りに知れ渡つたこだから、こゝには專ら義太夫節との交渉についてのみ、述べる事とする。

朝顔の狂言は歌舞伎から出て義太夫節に移入したものには間違ひないが、そして、その始めて義太夫本となつた山田案山子作の『朝顔』が、現在芝居や淨瑠璃に傳はるものであることも確かだが、たゞこれの上場年代を嘉永三年正月と各書に載せられたのは、誤りである。

この嘉永三年正月といふのは、山田案山子の舊作遺稿を翠松園主人が校補して、始めて出版發行した時を指したもので初興行の年代ではない。

初めての院本上演は、天保三年正月二日初日、御靈芝居で竹本重太夫（明石船別れの場と島田宿屋から大井川の場）等によつて發表されたのが本當らしい。これより先き、文政の頃、作者山田案山子は『生寫朝顔日記』の院本を書いたが、當時無類の美音で鳴らしてゐた三代竹本重太夫の藝格に當て嵌め、特に筆を執つたのだと云はれてゐる。重太夫は此新作上演に成功し、一層その名を高めた。

重太夫は、後に五代政太夫を襲ひだ、俗に重政太夫と呼ばれた人で、大阪阿波座に生れ新町に住み、後、鹽町四丁目の家で、天保十一年六月廿三日に年六十一歳で歿してゐる。墓

は下寺町遊行寺にある、通稱堺屋清七、法名釋良西……こう詳しく紹介するのも、朝顔の宿屋から大井川を始めて語つた太夫だからである。

ついでに作者の紹介も致して置かう。山田案山子は、重太夫と同じ阿波座の生れで、殊に親交があつたらしい。淨瑠璃作者としてはこの他に、花魁菩八房（八犬傳）の長編や、契情小倉色紙（春の家有齊と合作）など著名である。文才の上に書道にも一家を成し、狂歌もやれば種々の戯作も試みた野亭、意齊、好礼堂など別號がある。弘化三年十一月廿四日順慶町の住宅で永眠した、年五十九。この人などが義太夫節新作者として、或は掉尾の一人であつたかも知れぬ。

案山子は知友重太夫の爲に、この淨瑠璃を大井川まで書いて擱筆した。それを後に、前記の翠松園が、重太夫の遺子鶴澤才二や儀左衞門等、囑によつて增補し、大詰などを附け加へたものであるが、所謂蛇足であり、屋下屋を架するに過ぎないものである。

大井川の段切の文章を見るがよい。

……はや明け渡る鳥の聲、山田の惠み彌增さり、重（しげ）れる朝顔物語、末の世までもいちじるし。

山田案山子と重太夫を匂はせて、全編を遺憾なく結束してゐる、これだけで澤山である翠松園が補足した。大詰の駒澤屋敷の段末の文、『語り傳へし物語、文才靑き翠松かわらぬ色の若枝を云々』など、いかさま靑き文才に間違ひない。

義太夫の再來と似がれた名人長門太夫は、聲量も腹力も、人間放れのした强さを持つた人である。それで好んで長く語る傾きが見へた、どんな長い丁場でも一字一句も洩らさずに語つた、時には新作增補してまでも、長く語らうとしたのである。先代萩の御殿も左樣であるが、この朝顔の大井川なども、關助に腹を切らせ（本文では德右衞門が切腹する）、長々しい物語を附け加へてゐる。

この長門太夫の增補大井川（凡て自作である、長門は文藻に富み長松軒の號で數種の淨瑠璃作もある）を初演したのは安政二年七月西横堀淸水町濱の文樂軒芝居で、初めて櫓下となつた。其九月の第二次興行の時であつた。

兎に角、古名人は、こんな風に樣々の努力を吝まなかつたものである。そこに充ちた力があり、新しい味が漲つてゐたのである。

人生は、露の干ぬ間の朝顔である、つれない日影の照らさぬうちに、藝術の花を咲かせたいものである。文樂座の人たちの眼病平癒を、朝顔の人形に祈つて置かう。

朝顔日記考說

――歌舞伎と操りとの關係――

高谷　伸

歌舞伎と操りとは、そのはじめは別々の途を進んだものであつたが、中頃から持ちより搦みあつて發達して行つた。そして終には人間の持つ實感から來る强味が、人形のおもしろさを壓倒してしまつたが、はじめの程は人形淨瑠璃の持つ數數の名作者の威力が人間の演る歌舞伎を支配することが多かつた。從つて、操りから歌舞伎へ移入された戯曲が歌舞伎劇に一大分野を持つまで多いのに較べて、歌舞伎から義太夫に移入されたものは、極めて小數であつた。朝顔日記はこの小數の一つである。

朝顔日記が生れた經緯は西澤一鳳の傳奇作書殘編中の卷に出てゐるのでそれを抄錄すると共に愚考を加へて行くことゝする。

前集芝屋司叟が傳に說。長話數種ある內此彡は自得の話にて其頃の歌舞伎に取立璃寛に宮城阿曾次郎をさせ度旨にて近松德叟に談じ狂言あら方書上たれども深雪をすべき女形なくて四五年を經にけり。

芝屋司叟は通稱勝助と稱し、前集卽ち傳奇作書初篇中卷には飭りなき畸人として一鳳が略傳を書いてゐる。それによれば母は長崎圓山の遊女父は支那人といふ生ひ立ちからして國姓爺めいて面白い。常に長話として好き者を集め創作講談を聞かせたもので、それが皆一字題で、油、首、櫛、瘤、などそれぞれ面白いもので『彡』もその一つで佳くできたものであつた。近松德叟は半二の門から出た歌舞伎作者で浪華伏見阪町の娼家大桝屋の出、伊勢音頭戀根朸などの作があり。文化七年八月廿三日沒した人である。璃寛は二代目嵐吉三郎で當時女形では嵐珉子などもゐたが琴の堪能なる人といふ條件があるので四五年のびてゐたものである。

其內柳浪（馬田と云醫師也）に諾し（話し？）て畫を交へ小說稗史前編五卷後編五卷に出版したり。又四五年を經るうちに司叟德叟共に沒して彡日記の小說のみ擴まりて文化九年頃堀江市の側芝居にて『生寫彡日記』と外題して市川團三郎に駒澤をさせけり。評よくてもさまで歡もせざりしが、文化十一年甲戌年東都より若女形澤村田之助七年目に浪華へ歸る。俳名曙山とて器量よく琴三弦に達したれば、彡の深雪は是に限るべしとて芝叟德叟の遺稿を出して奈河淸助潤色して、則外題を「けいせい筑紫禁」と賦したり。

市の側の芝居は中芝居で作者は出來島千助で作の如何より興行法によつてあまり評判にならなかつたらしい。それから見ると役者の人氣は大したもので田之助は當時二代目で、三代目宗十郎の三男で源之助の弟だつた。晴助は京都の產、京道場因幡藥師の芝居の作者であつたのを西澤一風が大阪へ招いて嵐吉三郎附の作者としたものである。

けいせい筑紫禁は文化十一年一月十一日初日中の芝居で上演せられ菊池大友兩家の爭ひを骨子とし田熊大學といふのが國づくしの大惡黨で玉川の香爐の紛失といふ事件がはたらいてゐる。宿屋の朝顔は大體今の筋であるが駒澤が去つてから金を盜んだ疑のかゝるだけ複雜になつてゐる。大川井は闘助のたてはあるが德右衞門の自殺や朝顔の眼のあく所はなく眼は大詰に名劍の威德で開くことになつてゐる。田之助は深雪と春雨姫の二役、吉三郎は駒澤で共に好評であつたことは次の章句で知ることができる。

曙山瞥女となり脊負ひ出る手琴を朝顔琴と唱へ璃寛には扇子に彡の唱歌を書せ持はやらせけるが故櫛簪團扇扇子縫模樣染模樣朝顔ならずと云事なし（中略）何事も朝顔々々と唱へ芝居は今古稀成大入しけり。芝叟存命ならば嘸かし歡ぶべしとて璃寛追善の摺物を出せり。

それ程好評だつたので曙山は江戸へ歸るとまもなく出し物にこの朝顔を出したのである。

それは中村座で文化十三年五月五日初日、外題は「時鳥貞婦噺」と改め御堂前の敵討、「敵討御末刻太鼓」と絢ひまぜて朝顔は島川太兵衞に殺される磯貝實右衞門の娘で曙山が勤め、駒澤は永木の三津五郎太兵衞は幸四郎で、その頃チョボを用ゐなかつた江戸狂言にこの明石の船の場では特に當時評

判の政子太夫と生駒太夫とを掛け合で出演させてこれ亦好評であつたが、これらが朝顔日記が語り物となる前提となつたらしい。この狂言では太兵衛が深雪に戀慕の上思ひを晴らさうと呑ました妙藥で目が開くことになつてゐる。

それからまた傳奇作書に戻る。

（中略）然るに弘化四未年予は東都に行て五月頃にやあらん。澤田氏の誂にて筑紫藜と江戸狂言「復讐合法街」（故鶴屋南北が作）是を混じて一日の傳奇に脚色を望まれ暑中をいとはず江州多賀家の世界と定め著述にかゝり日ならずして全部八册草稿成る頃舊友花笠文京來つてさる書林より葬日記の合卷を賴まれたり。兼て狂言出來ときけば其狂言の筋書を合卷に出し來春賣弘めし上にて此狂言を出す時は近くは戯場の報條となりて見的に其筋を能知らしめ其圓に乘つて書林も幸を得んこと一事兩益ならんと勸るに澤田氏も其事を思へばよかるべしと云。早速筋を認め文京に送る。

この脚本こそ翌嘉毎元年八月廿日から市村座に上演せられた「繪入稗史　葬物語」で執筆後一年ばかり經つてゐる。朝顔と孫七女房およねがしゝゝ、駒澤と太平次と早枝大學之助が八代目團十郎、岩代と多賀の太守が小團次といふ役割であつた。これが評判よく又大當りとあつて、嘉永三年九月には河原崎座で合法衢、嘉永四年六月には朝顔日記の再演があり朝顔はしゝゝか、駒澤は吉三郎であつた。

嘉永三年正月には「生寫朝顔話」として淨瑠璃が完成されこれと前後して「譚柄瑠璃　葬」の草双紙が出版されるなど朝顔日記が各方面に流行を見たが、葬物語の脚色者西澤一鳳のみは内心面白からぬものがあつた事も傳奇作書に見えてゐる。

其後文京來つて書林何某朝顔を刻したがるは近頃淨瑠璃に葬の宿屋の段を作りて語るに評よければ全部せし所を梓に彫んとの心にて外題を卽「かたり草瑠璃の朝顔」と號最早願ひも相濟書畫とも彫刻にかゝりしと云。是を聞てこは以の外なることなり。其宿屋場の一段は浪花山田野亭と云へる者阿古屋琴責と袖萩の祭文を混じ前後の筋も辯へず捧へし場也。予も一兩度聞て片腹痛く覺えしに思ひきや予が著作の外題に淨瑠璃を題とせられんは好ましからずと悔め共願ひ濟しと聞し力に及ばず獨つぶやき思ひ捨たり。

このやうに一鳳に無斷で改題するのみか、合法の條は紙數の都合と稱し削り、賣名を避け綺語堂作と書いた名は、劇場でさへ作者名を差控へた西澤一鳳の名が麗々しく載るといふ風に、書肆の都合本位で改竄をするといふ次第で、出來たことは仕方がないといふ一鳳も中に立つた文京に

露も見ぬまに朝顔をほらす書屋のつれなきに哀れ一枚外なりと花笠の見せかしといふ戯歌を送つた程である。

一鳳がかく憤慨しても劇作家協會の無かつた昔では上演禁止も著作權侵害も無く、結局思ひ捨てる外はなかつたのであつたが、一方その淨瑠璃は操りから生えぬきの淨瑠璃より以上の流行を見せ、明治大正を經て昭和二年六月の文樂座の人形淨瑠璃にまで出ることになつたが、この山田野亭が山田案山子で文政の頃、竹本重太夫のため脚色されたまゝ埋れてゐたのを、翠松園主人が重太夫の忰、鶴澤才二のために補綴して、藥王樹の紛失を發端に、宿屋や大井川を中心にする今の朝顔日記を完成したのである。

結局今では歌舞伎が淨瑠璃の朝顔を逆輸入するやうになつて、我童が演てもこの翠松園主人の淨瑠璃により、文樂座でも歌舞伎の方を見かへして堂々と招牌を掲げてゐるが、地下の一鳳にこの皮肉な現象を見せたら何んと言ふであらうか。

これも要するに、歌舞伎では、御堂前の敵討と結び合法街と合せて、これといふ定本のないうちに、淨瑠璃では、確かな根本が定められたのと、節付の巧さが、知らず知らず民衆に泌みこんだ結果と見るべきであらうと思ふ。

辨天座文樂淨瑠璃太夫割一覽

前『生寫朝顔話』大序「大内多々羅之助舘の段」（淀路太夫、糸稻丸其他）「多々羅ヶ濱の段」（源福太夫、糸友作其他）宇治川の段（長子太夫、糸友造、廣太郎）「眞葛ヶ原の段」和泉太夫、糸友之助、八助「秋月弓之助閑居の段」中（越穗太夫、糸可太郎）切（文字太夫、糸勝平）「明石舟別の段」（越名太夫、相生太夫、糸團六、歌助）琴（福太郎小庄、友駒、新之助）「濱松小家の段」口（鏡太夫、島太夫、糸友平、友若、綱右衛門、友右衛門）切（駒太夫、糸才治）「嶋田驛」中（富太夫、糸猿太郎、寛市）「宿屋の段」次（鏡太夫、新左衛門）切（土佐太夫、糸吉兵衛、琴兵市）中『一の谷嫩軍記』「陣門の段」（つばめ太夫、糸勝市）「組打の段」（大隅太夫、糸道八）「熊谷陣屋の段」中（賞鳳太夫、糸猿糸芳之助）切（津太夫、糸叶）切『伊勢音頭戀寢刄』屋の段」中（源路太夫、糸淺造、清二郎）切（源太夫糸仙糸）「奥庭の段」（綾太夫、糸猿二郎）

朝顔日記淨瑠璃譚

大井川の雨

素木宗一

『ハテ、心得ぬ』

駒澤治郎左衛門は首を傾げずに居られなかつた。

曇がちの夜に泌々と旅愁を抱きながら旅の宿、わが部屋へ戻つてくると、今まで氣注かなかつた片隅の衝立、襖の隙洩る風にゆらぐ燈火にわびしくも照る張交ぜの、扇の地紙の歌！

――つゆのひぬまの朝顔や、てらす日かげのつれなきに、哀れ、ひと村雨はら〳〵とふれかし――

『はら〳〵と降れかし？……――』自分の眼を疑つて讀返したが幾度繰返しても歌の句にまちがひはない。この歌は先年宇治の螢狩で秋月の娘深雪に、治郎左衛門が又逢ふまでの筐にと書いて遣つた『朝顔』の歌だ。それが恁んな邊鄙な宿屋の衝立に張交ぜになつて居る。歌は深雪がその後琴に合して節付したこともあるとすれば、誰かゞ歌ひつたへて東海道の宿場まで流れて來たのであろうか？――いづれにしても、ふしぎ！因縁！と言つたふうの考へが頭へこみ上げて來る。いきほひ首をひねられずに居られなかつたのである。

頻に考込んでゐると、亭主德右衛門が挨拶に這入つて來たので、默つて居るつもりがいつの間にか口を洩れてしまつた。

『えゝ、それで御座りまするか？その歌については……あゝ！哀れな話。もとは中國の歴としたる家の娘ぢやそうなが、誰やら尋ねる人があるとて家出して、それからは國々を流浪果は到頭悲しさに眼を泣つぶし、その歌を唄うて袖乞をして歩いて居りまするが、何はさて、盲目でこそあれ縹緻は好し聲は美し、見れば覩るほどにいぢらしく、朝顔々々と言うて其の歌知らぬ者は御座りませぬ』

それで德右衛門も哀れに思ひこの宿屋に足を留めさせてお客の愛想をさせてゐるやうな譯、と語る話は朝顔の花！そのまゝのしほらしい弱〳〵しい一篇の哀譚だつた。

治郎左衛門は『もしや！』と胸をトキめかせた――自分の妻でなかろうか？それで、旅の侘しさを紛らはすために、その女を呼んで呉れまいかと頼むのである。が、ガサツに這入つて來る相役の岩代多喜多は佛頂面を含らせて是に反對した。治郎左衛門は笑つて受けつけぬ。

『さほど御所望ならば兎も角も……しかし座敷へは叶はぬ。庭へ呼出し、琴なと、三味なと、彈かし召されて早くこの場をポツ歸されよ』

恁んな些細な小競合を始めるまもなく、朝顔の聲がする。治郎左衛門はその盲女の顔を一と眼見るなりハツとした。矢張さうだ！現在わが妻深雪のゝ、ゝのはてではないか……

『コリヤ女。その朝顔の歌とやら、さゝ、早う聞かせい』

横風に構へて呟叫けるものゝ心の中では切なさに涙がいつぱい泌んでゐる。

深雪も、聲こそすれわが尋ね飽ぐむ夫が眼の前に居るとは、悲しやな、眺めるよすがもないから只涙に曇る聲顫はせて手さぐりに琴の音を調べるのだつた。

――つゆのひぬまの朝顔や、てらす日かげのつれなきに、あはれ、ひと村雨はら〳〵とふれかし

――その夫を慕ふ音律は十三絃の糸に炎と燃えて切ない魂が寵もつてゐるやうに聞えた治郎左衛門もおもひは同じ！岩代に氣注かれぬやう顔を叛けて人知れぬ頬の露を拭ふのだつた。岩代は始めに意地悪く反對して居たのに、これを聞いてから、朝顔の美しい横顔を眺めてから、もう先刻のことも忘れて膝を乗出して來る。一切夢中なのだ。小氣味惡く北叟笑んで猫撫聲になる、岩代の相恰は崩れてしまつて居る。

『コリヤ女、そちも腹からの非人でもあるまい。身上話も亦一興。話して聞かせ、さゝ、どうだ』

『ハイ、よう尋ねて下さりました……おことばに甘へてお話申すも恥しながら……』朝顔は嬉しさうに琴の爪を外しながら、一寸、恥しさに惑つたやうだつたが、例令、座興の尋ねにせよ恁うした言葉は情と身に泌みて見えぬ眼を二人に向けながら切なげに語るのを聞けば……女は中國の生れと言ふ！それが宇治の螢狩で戀ひそめた情人と語らふひまもなく短かい夏の夜。別れば國から迎ひのために親に連れられて船出した。その泣暮す船の中、明石の風待にふたゝび情人と會ひは會ひながら、これも語らふによしない船と船でそのまゝまわかれ別れになつて國へ歸ると夫定めの話である。女は一旦男に立てた誓ひは破られぬと、屋敷を拔けて都路へ來てみれば、その人は東の旅に登つたと言ふ。その跡したうて宿場宿場尋ねさまよう内に戀しさ悲しさに眼を泣潰して、恁うした姿には成り果てた……と物語は朝顔のしのび泣きと共に哀れの深さを覺えさせるのだつた。

身上話を聞いてゐる内も治郎左衛門は耐えられない思ひがした。けれども相役と同席の手前、この哀れな深雪にどうして誠を打明けられやう！心の中では悶々と身もだへしてこの話に眼をとぢてゐたのである。歸り仕度の朝顔もこの座敷は妙に心惹かされて、後髪を引かれる思ひがする。ふしぎな名殘を惜しみ飛石を杖の先にまさぐりながら泣く泣く歸つて行つた。

その夜が更けてから治郎左衛門は德右衛門を呼んで、先刻の女をも一度呼んで呉れと、改めて頼んだけれど外の座敷へ出て居ると聞いて思ひ止まり、女への謝禮にこれを渡して置けとの品々。時は七ツ、もう出立つの時間になつた。駒澤治郎左衛門は斯うして岩代多喜多とこの家を立去つた。

「それはさうと、朝顔に今夜の禮にはそぐはぬ下され物……ハテ、何ぞ仔細のありさうな』

と、德右衛門が駒澤から預かつた金子、女子扇、大明國秘法の目藥、と言ふ品々を持て餘して首を捻つてゐると、庭の切戸が明いて、〳〵と白い顔を氣がかりさうに浮ばせる

のは朝顔である。

『おゝ、遅かつた。も少し早う歸つてくれればよいに……』

と、自分のことの樣に嬉しがつて預かつてゐた品を握らせた。

『申し……旦那さま。この扇に何ぞ書いては御座りませぬか』

手さぐりで朝顔は不審顔である。扇をひらいて見ると『朝顔の歌』裏地を返すと『宮城阿曾次郎事、駒澤治郎左衛門！』――そんなら現在尋ね飽ぐむ夫であつたのか！

『えゝ！』知らなんだ、知らなんだ。道理でよう似た聲と思うたが、そんなら、やつぱり阿曾次郎さまであつたのか』

『わが身は又お馴染か？』

『えゝ！なじみどころか、年月尋ねる夫でござんすわいな』

もう眤として居られぬ、心が急ぐ。跡を追つかうと行かけたが、盲目の身ひとりが雨の降出す闇の夜に突出すのは、このまゝ見殺しにするも同然と德右衛門は狼狽てゝ引留めたが、『たとへ、死ぬとも！』凄い女の念力の一言、大の男を刎退けて朝顔は狂氣のやうに飛び出した。

降りかけた。雨の足は、次第に烈しくなつて行く――

大井川の川岸は小石を堀返して恐ろしい雨水音は唸つてゐた。濡れそぼつた深雪は、途で盲目杖を折つたのか、彼方で轉び、此方で倒れ、息も絶え絶え髮振みだして漸く川の傍まで辿り着いた。

『のう、川越たち。駒澤治郎左衛門と言うお侍。もう川をお越なされたか？きかして！聞かして』と棒示杭に捕まつて聲をかぎりに叫ぶが、雨と風の物凄い音にそれさへ兎もすれば吹き消されがちである。少時すると向うから川越達の返辭が漸く途切れて聞えて來たけれども、駒澤はもう川を越してしまひ、俱の大水で川は留まつた、と喚くばかりである。

『なに？川、川が留まつた！？』

張詰めてゐた力がドッと一氣に拔けた。朝顔は正體なく其場に崩折れてしまふ。もう絶體絶命だと思うと、今さら空が憎かつた。

『大道さまも聞えませぬ！歲月の辛苦もどうぞ、まいちど其人に逢はしてたべと祈らぬ間とてなかつたものを、今日に限つてこの大雨、川留とは、川留とは、えゝ、なにごとぞい』

身を顫はせ女ながら拳を握つてきぢがひのやうに泣亂れる。けれども雨は相變らず朝顔の白い身體を遠慮もなく濡鼠にぬらせるばかりである。朝顔は血をも吐けよと泣叫んだが、雨はいつかな晴れる氣配もない。到底も添れぬ身の業因、川水が增したのか所詮死ねとの事であるまいか？不圖、そんな絶望が取亂してゐる胸に一とゃれ、いゝ、浮び上ると直ぐに死を覺悟してしまつた。朝顔はさうすることが何となく樂しかつたのである散らばつた小石の數を拾ひあつめ、袂や袖に落して身體の手纏ひを搾て、念佛の一聲もろ共に双手合せて川の中へ……

『やれ、お待ちなされ深雪さま！』と、朝顔の名を呼んで抱留めたのは關助と、宿屋の德右衛門だつた。

が、氣ちがひのやうになつてしまつてゐる朝顔には、その聲も耳にとゞかない。どうでも死なねば！と拖締めの手を搖拶るばかりに

もがく。

『下郎めでござりやす。まあ、氣をお鎭めなされませ』

女の手が虛空へ白蛇のやうにノタ打ち廻るのを、無理に押へて手に取る關助は逆上せきつてゐる朝顔の耳元へ聲は渦らして叫びつける。

『さう言う聲は關助か？えゝ！おそかつた、遲かつた』

尋ね飽ぐんだ阿曾次郎に折角逢ふては居ながらに、盲目の悲しさ、後で聞けば矢張りそれと知つて跡を追うて川まで來てみれば、大井川は篠突く豪雨に川留されてゐる。朝顔がその切なさ、情けなさを搔口說けば關助も、深雪の行方を尋ね廻る內、フト、夢に淺香が現はれて深雪の在家を島田の宿戎屋德右衛門の家と告げられて、ふしぎな夢に尋ねて來た。危い所であつた。と、漸く胸を撫で下ろしたそして、その淺香は駒澤の供にして坂東順禮の姿となり、東海道へ尋ねて來た筈だから、もう深雪とは會つたであらう？と聞くと、濱松で巡り合ひはしたけれどその夜惡者に殺され、死ぬる間際にその親が中山に古部三郎兵衛と名乘つて居るゆえ、守刀を證據に尋ねて行つて秋月弓之助の娘と言つて逢へと聞かされたけれども……と、朝顔は淺香の死を悼んだ。

この朝顔と關助の物語の始終を聞いてゐた德右衛門は

『む、そんならお前は弓之助樣の御息女、又、淺香とはわが娘であつたのか』

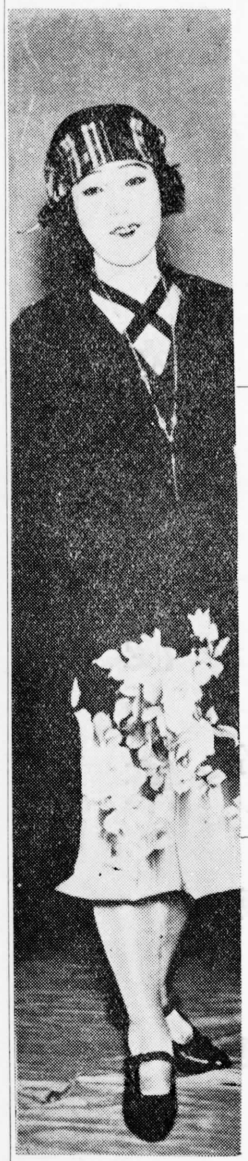
意外な叫びが洩れた。德右衛門こそ其の古部三郎兵衛その人であつたからである。

『この上は深雪樣へ三郎兵エがお土產』と言ひなり逆逆く守刀を拔放しざま腹へグサと突立てたので、二人は顏色を變へる。德右衛門の女房も驚いたが、

『最前駒澤さまの物語。唐土傳來の眼藥は、甲子の歲の男子の生血を以て服するには、如何なる眼病も卽座に平癒との事。卽ち、それがしは甲子の生れなればわが血潮もて件の藥に調合し、早くあなたへお進め申せ』

と、とぎれがちの息を喘ぐのである。關助はその血を水呑に受けて、深雪の懷中してゐる妙藥と合して飲ませた。

かうして、朝顔の美しい眼は忽ちにひらいた。それは朝露をうけた朝顔の花！けざやかに、ひらくことができたと言ふ……。（華）



戀の受難

河村菊江

文樂漫筆

高原慶三

京、大阪通りがかりの文士や、大阪に一寸しばらくでも籍を置いた文學者諸君は、必ず『大阪の鄕土藝術文樂を尊重せよ。』と、われ等大阪人にとつては涙のこぼれる程有難いお言葉を戴く。

と、云つてむつきの間から文樂の人形に馴染み、淨瑠璃を子守唄同樣に聞かされたわれ等にとつては甚だ尻こそばゆい次第で、他山の石、さて量見を入れかへて眞心だけでも文樂を尊重しやう……。とその度毎に志まことに新なるものかあるのだが、實を申すと、『現在の文樂』では少々二の足をふまざるを得ない。

立物と云はれる三人の太夫さんが揃ひも揃つて大阪遠い九州、四國、或はお江戸の出身だけに、どこやら大阪離れした語音が一段の淨瑠璃の内に一二箇所、耳を掩はうとすれども何の因果か宿命的に聽神經をそゝらずにはおかない。何と文樂未世の感まことに深いものがあるではないか。

◇

その次に文樂の外題を御覽ぜよ。

『菅原』と『忠臣藏』が毎年、或は隔年に必ず出されるものとして、その他は曰く

酒屋、天綱島、妹脊山、千本櫻、加賀見山、兜軍記、三代記、伊賀越、嫗軍記、太功記、廿四孝、壺阪、合邦、三十三間堂、河原達引。

と、紋切型である。心理學にも『繰りかへしは倦怠を招く』が如く所詮、通りがかりのお客樣には珍重されても、常顧客には『又』かである。

實際　小生が中學四五年頃、『大阪人たる僕、文樂を愛すべし。』と、生意氣なニキビ文學的自覺から貳拾錢を奮發して、藝ウラの二階棧敷のお客樣となつて、通ひつめたを凡そ二年で文樂學をすつかり卒業してしまつたのであつた。現在の文樂なら一年間替り目毎に通つたら卒業出來ることを請合つておく。蓋し小生等の望む文樂はそんな一年間で卒業出來る簡易な速成養成所であつてはならないことだ。二年間位大阪に在住して引揚げる時分には立派な『文樂學興亡論』を立論出來るやうな底の淺いものでありたくない。究めても究めても奥深い殿堂であつて欲しいのだ。

◇

小生幼時には越路當時の摂津大椽で『伊勢物語』の春日村や『苅萱』のいもり酒といふものを一度聞いたことがある。

現在の文樂ではかうした金ピカの大物がたえて出ない。これは語る太夫さんが何を苦むでか！この種の一般向のしない皮肉物を語るより『壺阪』や『尼ケ崎でモッチャリと大向ふの手をたゝかせるだけでお金になるのだから…自然と易きに就くことなり、お仕打の方も、耳なれぬ外題よりもむしろドウスル連に『待つてました』といはせる方を歡迎するものだから、文樂がだん〳〵大阪離れして來て、田舍臭くなる。

一つ今に、あの莊重典雅な趣が忘られない『新薄雪』の團九郎住家の段とか、人形でおどかすなら『西遊記』の孫悟空の宙つりのやうな『大江山』の金時の人形で活躍させるとかとにかく太夫の名や首の入れ替へばかりでなく、外題で目さきを變へて新しいお客さまを呼ぶことをおすゝめする。

◇

どうも近頃の淨瑠璃に一の傾向があるやうだ。

藝、イクオール、力

淨瑠璃イクオール熱

これは澤正一派の劍劇思潮が多少とも淨瑠璃道に影響はしてゐないだらうか。

向鉢巻で汗みづくで大看板を楷書で書くやうに、一字一句簡化、略筆なしに牛の涎のやうな淨瑠璃が當今歡迎されてゐるやうだ。淨瑠璃通語でいふ『足が長い』といふ言葉がそれにあてはまる。露骨にいふとどうもモチャついた淨瑠璃だ。

たつた一つ『淡路町』だけしか聞かないが、新しい貴鳳太夫の淨瑠璃にはこの文樂的傾向を多少脫化して新空氣は注入した點は大によい。

若し、故人大隅太夫が現存してゐるものとして、あの鱸のあ

らいのやうなサラ〳〵した、ムダな箇所は素讀のやうに足を早めて、實に片づいた洗垢ぬけのした淨瑠璃はおそらく今の文樂では一寸通用しにくからう。ほんとうに大阪根性で淨瑠璃といふ感じが今にしてまざ〳〵思ひ出されるのだ。

餘談にわたるが、この間偶然竹本錦太夫を聞いて大隅の片影を見出した。

『足の早いこと、聲のキーつくとこ、すつかり故人大隅ですな。』

と、小生は先輩木谷蓬吟先生に感歎久しふして語るのであつた。

『ところが、あのキーつくところが、今の文樂の連中にかかると、素人淨瑠璃なんていはれるのですよ。』

と、蓬吟先生はいふのであつた。

◇

聲曲家で名人といはれる人に不思義に調子の外れる人がある。

故人林中がそれだ、現存では延壽太夫の『かさね』などは二音階ほども高はづれしてゐる。

晩年の掘津大椽がそれだ。つゝほ聲といふのか妙に調子がはづれてゐた。ところがそのはづれたところに言ふべからざる寂びが味はれた。

今の土佐太夫が近年、耳立て調子がはづれてきた。幸ひ掘津の先輩がある。今やわが土佐太夫にして名人の域に到ると期待するもの、豈夫れ小生一人のみならんやである。

中村鴈治郎一座の六月

『鹽原』の通し狂言や『廿四孝』の新趣向で連日大入滿員の盛況裡にあつた中座五月興行關西大歌舞伎は先月廿六日限り打上げ六月は巡業に出る。東京より市川中車と共の一門を迎へ東西合同大歌舞伎として、六月一日より神戸八千代座に地方巡業首途の蓋を開ける、本極り狂言一番目『東山物語』では福助の法純、魁車の鳥民部、吉三郎の露の五良兵衛、霞仙の遊女八千代に市藏の伊井直滋等で活躍、中幕『先代萩』伊達家奥御殿より同「刃傷」迄は福助の淺岡に鴈治郎は片倉小十郎と細川勝元の二役で活躍、「床下」の男之助は市藏が扮し中車は特意の仁木彈正で力演、清元梅吉社中出語りの舞踊劇『牡丹燈籠』は長三郎の萩原新三郎に成太郎のお露の靈、當之助のお米の靈の三人切の舞臺、二番目『心中紙屋治兵衛』北新地河庄の場は鴈治郎の治兵衛に中車の孫右衛門、鰕十郎の太兵衛に魁車の小春に福助の女房お庄等大顔揃ひの大舞臺である、尚切『勢獅子』神田明神祭禮の場は魁車長三郎始め一座の若手花形大勢で、常磐津連中出語りの華やかな舞臺である。

柳川

文樂雜詠

日比繁二

ほめられておやま人形は背を見せ
胴ぐるみ人形笑ふて見せるなり
たよりない一人遣ひはならんで出
人形部屋冷たくなつてぶらさがり
居眠つたやうに文樂聽いてゐる
太い聲棧敷へ藝妓現はれる
まつ先に親爺サワリへ共鳴し

文樂私議

富田泰彦

井上正夫君は、『明日の演劇』の爲めに、我劇壇に新旗幟を翻へさうとしてゐる。其處には幾多の荊棘の道が横はつてゐるには、ゐるが、彼は恰も殉教者の如き強い信念に燃えて、血ぬらしつゝも一歩々々明るい足下を踏みしめ、凝視めてゐる眼には微笑さへ上つてゐるではないか――それは明かに『明日の演劇』への案内者としての滿足があるからなのだ。この前途に、その荊棘の道の果には、光輝ある曠野が、手を擴げて待つて居る。

然らば『明日の演劇』に對して、文樂は『昨日の戯曲』の餘命を握つてゐるやうなものだと云へる。そのそこはかな餘喘を、いついつまでも保ち得るものと妄信しきつてゐる者は、現今の文樂の當事者達なのだ。

現今の太夫なり、三味線彈きなり若しくは手摺りの人々のうちで本當に『文樂の將來』と云つたことに就て、苦慮してゐる者は幾人あるだらう？、遺憾ながら、さうした生々しい問題に向つて眞劍に、ぶッつからうと云ふ意力さへ、既に消耗して終つてゐるではないか、實際由緒ある我樂劇――若しくは國劇と云つて可い竹本劇の危機に立つて居ることには彼等とても氣付かない筈はあるまい。

文樂の興廢、元よりいろ〳〵な理由があらう、一世に傑出せる藝術家のないと云ふことも、勿論最大原因には違ひない。延享寛延の爛熟興隆期――竹本座に政太夫、此太夫、三味線に竹澤權右衛門、鶴澤友二郎、豐竹座に若太夫、駒太夫、新太夫などの古きは兎に角近世の三世長門太夫――降つて明治

時代でも多士濟々だつた時代と、比較しても、思ひ半にすぎぬものがあらう。しかし、一面に此の缺陷を補足し得るには、自とその方法はあらうと思ふ。

私をして忌憚なく云はしむればその狂言の建方などは餘りに無爲無策なマンネリズムに墮しすぎて居る結果、今日の如き衰退を來たしたのであるまいかと――、假初にも文運盛なる現代に、一つの時代思潮に順應した新作の出ざるは何故ぞや……なぞと開き直つても見たい。

『昨日の戯曲』は所詮『昨日の戯曲』である。サムライズムを高唱し、單なる義理人情の經緯の餘りに類型的な『昨日の戯曲』たる所以の淨瑠璃のテーマに、尠しは近代人の思想に共鳴し得るものがあつても可いと思ふ。

今日の歌舞伎ですら既に傳統的な藝術の雰圍氣を認めようとはしずに、單に脚本そのものゝ價値論に依つて、俳優の技藝にまで品等を下さうと云ふ傾向にある。亂暴と云へば亂暴には違ひない、しかし大勢の赴く處は、すでに斯うした點に『觀劇の照準』が置かれて居るのだから止むを得ない。

鹽原多助の馬が泣いては不可ない時代となつた『先代萩』の床下で仁木の花道の引ッ込みが、もどかしいと云ふ觀客である。荒獅子男之助が幕切れの見得を何う切つて可いか本當に判つてゐない俳優である。

それも、是れも時代である。大勢である。

文樂を聞きに行つて、藝術的感動を求めに行く人は常連であるが、この常連の多くは、その藝術を觀賞する前に、先づ自己の皮肉な耳に自ら陶醉して居ると云ふのである。さうした人々は『昨日の戯曲』に對す『昨日の觀客』である。さうした人々を恃んで如何なる勢力が得られようか、文樂の將來に生くる道は、たゞ新しい生なファンを求める手段にある。

『讀む戯曲』にすら十萬二十萬の讀書子が集つたと云ふではないか『聽く戯曲』の而も藝術化された淨瑠璃が、何うして生存し得ない理由があらうか、――だがそれは繰返して云ふが月並な淨瑠璃では駄目である。

私は、曩きに豐澤猿二郎の山本有三氏作の『海彦山彦』を聽いた。此の間東京の豐竹巖太夫が岡本綺堂氏作の『阿蘭陀船』の一齣を淨曲化したものをラヂオで聞いて非常に興味が牽かれた。若し此種の新作淨瑠璃を文樂の中幕とか、或は別な形式の下に一齣でも差し加へて行けば、必らず局面が一轉さる機緣にならないとも限らないと思つた。藝術的にも興行價値の上にも、相當な効果が酬はれるとも思つた。

木谷蓬吟氏の主宰する近松名作實演會なども、單に近松の

作品にのみ、拘泥されずに、斯うした現代作家の戯曲、若しくは小説からでも、淨曲となし得る條件の備へたものを實演さるゝと云ふことは、滿更無駄でもなさ相に思はれる。

さうして木谷氏の如き名家の監督の下に、作曲された新作淨瑠璃を、文樂に提供し上演に對する指導をもされると云ふ途が開ければ同氏の仕事も、更に一層有意義なものとなり、また、行詰つた文樂の局面を打開さす唯一の方法となるであらう。

近松の時代あり、出雲の時代あり、海音、半二、笛躬、等、等、更に歌舞伎の全盛期に入つて、櫻田治輔、並木五瓶、四世鶴屋南北河竹默阿彌と各時代を劃してゐる處に、その創意や特長と云つたものがハツキリ作品に現はれてゐるさうして興行上の一面に必らずその全盛を物語つてゐるのでも判かる獨り竹本劇のみは、明治、大正の兩時代を通じて如何なるその時代思潮を表現した狂言が殘つて居るか、豈夫三つ違ひの兄さんと　ふて暮してゐる『壺坂』だけでは誇れまい。然らば新作『乃木將軍』の失敗を繰り返せと云ふの謂ひではないたゞ『戯曲』の内容にある。出て來る人物は鎧武者でもその精神に、我々近代人の感情の流れを受け容れてゐるものであつてさへあれば可い譯だ。古き革嚢に新しき酒を盛る――即ちそれなのである。

その意氣で、半ば昏倒しかゝつてゐる文樂に活を入れられぬものだらうかと、私は敢て斯道の當事者達に御相談する。

實際將來の爲めに、文樂は是非新活路を、見出さねばならない秋にあたつて、斯うした道傍の言でも、一應は耳に入れて置いて貰ひたい。

たとへ私は『東西々々』と云ふ制止の聲や斯道の識者の嘲笑に葬られるものとしても、思ひ出したまゝのことは云ふだけは云ふ。（二、五、二四）

澤田への希望

齋藤龍太郎

澤田の「桃中軒雲右衛門」を觀て感心しました。恐らく本年度劇壇で良いものゝ一つに數へられるだらうと思ひます。「雲右衛門」のやうな作品を上演したことは、澤田自身にとつても藝術精進への飛躍として、推賞し、また喜びたく思ひます。

今度は是非同じ作者の「江戸城總攻」を澤田で演つてもらひ度い。現在でこの作を演りこなせるのは、澤田以外にはない。左團次のは全然失敗でした。

榮三と文五郎

京極利行

榮三と文五郎、斯う書きはじめたからとて、何にもこの人形遣二人の優劣論をこれから書かうとするのではない、この二人ともに玉藏（三代目玉藏）が昨夏急死してから後の文樂座にとつては、いづれをいづれとも云へぬ兩頭目であることは誰しもが知つて居ることなのだから、たゞ僕は、僕が感じて居る儘の兩人雜感を少しばかり書いてみたく思つてこの筆を進めるのに過ぎない。重ねて斷つておくが、この一文をもつてたゞちに榮三、文五郎兩君の優劣論と速斷して貰ひたくない。

○

年齡から云へば文五郎君の方が榮三君よりたしかに年輩の筈である。然し文五郎君が文樂座が松島八千代座に籠つて居た頃に、そこでこの道に足を踏み入れた、云はゞ文樂座で斯道修行のスタートを切つたのに比較して、榮三君の方はスタートは文樂系以外の小屋（後年彦六座なる名稱で一團體を組織した一派）で切つて居る。それなのにこの兩君の中年頃からの斯道に於ける生ひ立ちは、面白いことには、前記のスタート時代とは正反對を、行つて居るやうだ。即ち、文五郎君は、このスタート時代をのぞけば近年同君が女形遣ひの名手として再び文樂座に加入するまでの長年月＝殆んど三十年以上にもならう、決つして文樂座の人形役割番附にその名を見せて居らず、多くの場合は、文樂座とは對抗的立ち場にあつた彦六座系の一座にあつて其處の花形として活躍して居る。

一方、榮三君はと云へば、同君は前記スタート時代から間もなく、文樂座に加入して居ることが同座人形役割番附に見へて居り、その時を機會に同君は今日まで、榮三の名をその儘に名乘り通して文樂座で修行を續け初、二、三各代の玉造、初代紋十郎、初代玉助（二代玉助は二代玉造と同一人）これ

等の各名手間に伍して、この人々の薫陶を受けながらに今日までに育てられて來て居るのだ。

○

斯うした、經歴が主な原因となつて、現今の番附面のやうに榮三君は座頭の格に据へられ、文五郎君は、榮三君よりも年輩の身でありながら、座頭の地位を榮三君にゆづるの態度に出たものではあるまいか、そして僕は、この間のイキサツに津太夫が紋下に据り、津よりも年輩の土佐太夫が元老格で別庵に納つて居る現狀と非常によく似たものがあるやうに思はれてならない。(津は土佐よりも年齢は下でも文樂で生へ抜きに育つた人、土佐は年輩ではあるが多くの場合は誰もが知る如くに彦六座系に活躍した人であるのだ。)と同時に現今の文五郎君の番附面の位置、これは書き出しの場所で、本來は若手の花形が据る所のやうにも思ふが、この文五郎君の場合は、實際は若手花形が捧つた時よりは幾分重いものになつて居て、津太夫の紋下に對する土佐太夫の別庵待遇と同樣の、榮三君の座頭に對する文五郎君の元老格待遇と云つた意味が含められて居るのではないだらうか。(勿論、この兩君の藝風から考へても、現今のやうな位置に兩君を振り分けざるを得ざるのが至當のやうに思はれぬでもない。)

○

榮三君の藝を評價する場合に、その評價のモノサシに文五郎君の藝風をもつてする者があつたら、それこそ根本的に大間違ひの仕事である。同じく文五郎君の評價に榮三君のそれをもつてするのも前の場合同樣の大間違ひと云はねばならない。と僕が云ふのはこの兩君の藝風は本質的にすつかり行き方をことにして居るものとしか僕には考へられないからだ。人間所詮は、各自の馬鹿、悧巧を別として、その人の持つて生れたものや、生れてからの育ちとによつて終ひに一生を人の手足となつてでなくては、その人の持ち分一つぱいに目覺しく働けぬ人と、人の頭に立つた場合にだけパット光つて來る人間とが多數のやうだ。舞臺上の藝の方でもそれに似た事が言へるやうで、所詮は、持つて生れた天分と、生れてから後の舞臺上での育ちとの間に、(上手、下手は別として)座頭になれる藝と、花形で一生を終るべき、又ワキ役でヂミに老年になつて行くべき藝と、それぞれの藝風が修行中に徐々に傾向づけられて行つて、しかくして相當の名を揚げた頃には既にその傾向からぬきさし出來ぬ破目になつて居るのが多くの場合のやうだ。そしてこの好例が榮三君、文五郎君の藝の内にも幾分うかゞへると思つて居る。

これはどちらが上手、どちらが下手と云ふのではないが、文五郎君の藝はどうしても花形に相應しいものだ。この人の人形の遣ひ振りを見て居ると何にがなしに萬年花形と云つた感じがしてならない、如何にもはなやかだ、艶つぽい、どうしても觀客がワツト云はずにはおられない所がある。そしてこの點がいつまでもこの人の人形を花形らしい人氣の中心におかずには居らない原因の第一のやうだ。榮三君だと、さうした花形らしい感じが彼の遣ふ人形からはそれ程にたやすく受け取れない、從つて文五郎君の人形は客を呼ぶ賣物になれても=又其處に花形の眞價があるのだが=榮三君の人形はチヨツトそうはならない、賣物で客を呼ぶべくは少々、こうと過ぎる。然し、こうとなだけに澁いだけに、花形の花形らしい藝を前にしてもそれをヂツト受けてやれるだけの重味と云ふか、貫目と云ふか、とにかくそれに似た位がある。其處に榮三君は花形になりたくてもなり切れぬ惱みと、座頭に据らざるを得ざる身に着いた運命とを持たされて居たのではあるまいか。

○

重ねて又云ふが、この稿は決つして榮三、文五郎兩君の優劣比較論ではない心算で書いたのだ。そしてこれで終つて居るのではない僕は機會があつたらこの稿の如き雜感をまだまだこの兩人に就いて續けてみたい希望を持つて居る。

澤田の印象と希望

土田杏村

積極的で明るい感じがします。新らしい劇の世界を民衆へ普及せしめた點で大きな貢獻をしたと思ひます。併しニユアンスと詩とに乏しいと感じます。

×

藤森成吉

個人的には少しも知りませんが、男性的な元氣と意氣を持つた、よき俳優のやうに思ひます。その元氣と意氣を以て、更に新しき道に進まれん事を望みます。

×

須藤鐘一

所謂壹劇は澤田正二郎丈によつて今日の隆盛を見るに至つた劍劇は何と云つても同優の專賣であり、從つて他の追隨をゆるさぬ妙味をもつてゐる。最近は劍劇以外にもその天才的妙技を發揮してあるのを愉快に思ふ。私は同優に、どつしりした社會劇をやつてもらひたい希望をもつてゐる。

嗚呼如柳

四海波濱太郎

けたゝましく電話の鈴が鳴る、それは、昭和二年五月十七日午前零時三十分のこと。シーちやんが出て、

『愛之助はんが死にやはりましてん』と寢むさうな聲。

『阿呆らしい』僕は大欠伸と具に背延びした。よつちやんが代つて出た。

『矢つ張り、さうだすと』

飛び起きて受話器を耳へあてた。

正しく、一時間前、即ち、十六日午後十一時三十分に、下關阿彌陀寺町料亭魚七の旅宿で、鉛毒性心臟痲痺で客死した、と本宅村田氏の聲。僕はハッと胸を衝いた、が、それでも尙且我耳を疑はざるを得なかつた、だつて新戎橋の北詰で逢うた時、

『明日、巡業へ往きまつさ、六月も又旅かいな、?』

と眼を圓くして別れ、まだ旬日を出でぬのに……

萬一、誤報でなくば、六月は勿論の事、七、八、九、否千年も萬年も未來永刼大阪の道頓堀へは出勤能きず、十萬億土といふ遠方まで旅行せねばならぬ、と不安な豫感を抱いて南堀江から程近い久左衛門町の『鏡山大五郎』と表札のある小意氣な宅へ飛び込むだ。

妻女おきみさんは危篤の報によりいんま自動車で梅田へ走つた、と應へる下女の頰にはチラリと一滴光つて居た。

佛壇には今立てたばかりの生華、線香の煙がゆらいで渦を卷いて居る。

僕は此時初めて片岡愛之助が不歸の客となつた事を信じた。

下關から同家へ電話がかゝる、僕が出た、それで樣子が一切判かつた。

六月十六日、下關辨天座の初日に安達三の八幡太郎、對面の大磯の虎、さくら時雨の小刀銀治の三役を濟まして魚七へ歸り自分にあてゝある階上の部屋へは入つて浴衣と着替へ、疲れ休めの煎茶を啜つて入浴した。

『肩が凝る』

奴を呼むで湯漕の中で按摩をさせた、

『什うも風呂へは入つて身體をこはしたらしい』

洗はないで直ぐ湯漕から出た。

『あッ、苦しいッ、山本を呼べッ……』

聲は悲壯であつた。

勇衆の山本が湯殿へ來た時にはバッタり昏倒れてモウ呂律が廻はらなんだ藤井、神代の兩醫師が馳せつけて應急の手當を施し、更に木下博士を聘らして最後の手段を執つたが其効無く、まだ、塗つた白粉が頸筋へ着いたまゝ永久に歸らぬ人となつたのである。

愛之助は四十九年の昔、西區新町の揚屋で生まれた、幼き時我子同樣に愛してくれた相撲取鏡山大五郎の名を繼いだ如柳、それは彼れの俳名である。五歲の時京都で布引瀧の太郎吉を勸めたのが初舞臺、それから中村駒藏の一座に加はり中村駒一と名乘つて旅へ出た、明治三十五年の春徵兵檢査の爲め大阪へ歸へり先代中村霞仙の許へ入門して霞香と名乘り恩師病歿後、四代目松廣家を襲名して片岡仁左衛門の門に入つて今日に至つた。

日高川の淸姫、梅ヶ枝の手水鉢、紙治の小春、そういふ役もせぬではないが得意とするものは壺坂のお里、紙治のおさん、鰻谷のお妻等の眉毛無しの世話女房であつて、孰つちかといへば立役は彼れの柄には嵌まらなかつた。

自家の宗旨は法華經なれど金光敎、伏見のお稻荷さんをも神仰して居た。脂濃き物が好きでお酒はあまりいけぬ方眞面目な話と政談と鼠は大嫌い、酒落は實に巧まかつた。

道樂は相撲と川柳。常の花と隱退せし横綱大錦とは水魚の仲。川柳は、南北、繁二、蚊象、諦二、水府等の諸氏と夜を徹する事もあつた、三府の川柳家へは片岡愛之助といふよりは寧ろ、如柳の方が通りがいゝ。

嘗て、南地の藝妓若久と熱くなつて居た頃、京の木屋町の旅館で加茂川のせゝらぎと語りつゝ五日間ちん〳〵鴨の差し向ひ、今更大阪へ歸へるに歸へれぬ羽目となつて淮連谷まつた、如柳即吟

此二人近松なれば殺してる

改名は、圓鏡院如柳日順居士

今頃は三途の川で己れの改名を題として川柳をやつて居るかも知れぬ。

今締切といふ刹那に姥谷氏に賴まれて、ほんのちよつぴり、片岡愛之助の略歷荒々依而如件。(二、五、二五日夜)

『文樂』雜話

並山拜石

御靈の文樂座が燒失したと云ふことは、本當に寢耳に水だつた。寢耳に水――それは勿論、あの由緒ある、大阪の誇り、否日本の誇りである人形淨瑠璃の座が突然燒失したと云ふ驚きを現はしたことになるのだが、私にとつては、その突然の驚きには、別の意味があつた。それは、今迄閑却してゐた『文樂』、引いて淨曲――人形淨瑠璃が私に蘇つて來たと云ふことだ。それほど私は、すべてを『閑却』してゐたのである。

×

事實私は『文樂』に親しまなかつた。最後に『文樂』の見物席に居た私を記憶に喚び起しても、朦朧として――と云ひたいが、全く記憶に無い位、それほど久しく親しまなかつたのである。それはある動機から萠した習慣の惰性が、さうさせたのではあるが、さう云ふことがなくても、多分同じ道を踏んで來たことゝ思ふ。私が此處に云ふ『ある動機など、説明すべき事ではないから云はないが、これと別の意味に於て、私の交友諸氏の誰彼に聞いても――私だけの狹い交友の範圍では、矢張り私と同じ道を踏んでゐる人が多かつた。これを以て『文樂』の入り不入りを卜することは出來ないが、否決して入り不入りを卜するやうな僭越な考は特つてゐないが、少なくとも私等と同嗜好を有し、同時代に生きてゐる人達の對文樂感を卜し得られる、ぢやあるまいか、況んや若き人達のそれらを、と云ひたい。

×

『松竹』の機關誌と見られるこの誌上で『文樂は今危機に瀕してゐる』と云つたら方々からお叱りを蒙るだらうか？だが私にはさう思はれるんだから仕方がない。若しさうでなかつたら失言を取消す。

時代を超越した特殊藝術、――それを死守することはなか〳〵困難であらうが、それを死守するところに尊さがある覺悟がなければならない。若しそれが不可能の場合、それを度外視して、『時代』の故と片付けて、顧みないのは、あまりに非禮である。『文樂』の生きるのも死ぬのも、その死守と覺悟とにあるではなからうか？。衰退も興隆も其處に端を發する。『危機に瀕してゐる』とは、この間の消息を云ふのである。『文樂』が辨天座に根城を据えてから、其の死守と覺悟とが目に見えて明かになつた。その興行法、太夫の撰擇などを見てもよくそれが覘はれる。それは非常に結構なことである。だが、内容から見てどうだらう？――其處まで立ち入ることは、こゝでは私には出來ない。

×

古曲藝術。能はもう一般大衆のものでなくなつた。大衆の共有藝術である歌舞伎の衰興が今盛んに論ぜられてゐる。『文樂』も安閑としてをられないのぢやなからうか？唯いたづらに東京人に禮讃されて喜んでゐる時でもあるまい。笑顔には嘲罵の苦い舌がひそむ。

×

佛敎も老翁、老婆ばかり相手では亡ぶ。文樂も同樣である。若き人達へ！　その若き人達は活動寫眞へ走る。落語席に萬歲が跋扈する時代である。

――二、五、二七――

幕内外一品料理（その一）

鳥江銕也

淋しいかほ

『私が先年京都で『酒中日記』を出した時、こつぴどい不入を取りました、しかし、私はあの芝居を毎日感激にひたり乍らいゝ氣持で演じました、あれ程努力をし、自分でもよく出來たと思ふ芝居が來ないのに私は淋しい氣になりました、が、今に見ろ！きつとこの芝居に客の來る時があるのだ、まだ〳〵この芝居は早いのだとあきらめて、その次の替りには『生さぬ仲』を出しました、これなら文句なしに客は來るだろう、とわれ乍ら恥しい位大芝居をやつてのけました、毎日何だかいやな氣持で、少しも氣乘りがせずにやつてゐました、がその興行も不入でした、その時程、私の氣持は前より一層淋しいものを感じました。前の時は今に見ろ！といふ希望もあり、まだこの芝居は早いのだといふなぐさみもありました、が後のには希望も、また自分の心をなぐさめる言葉もなかつたのです』

井上正夫は或夜そんな思ひ出話を泌々とした……。

モダーン

五郎の喜劇中に市電のバスが七錢と云つてる箇所のあるのを指摘し、そんなことですらもう時代におくれてゐると論難されてゐた新聞紙を前にして、樂屋の淡海と話がはづんだ

私は、

『喜劇にもつと近代式の色をぬらねばならぬ』

といふと、淡海は手を打つた、

『さうだす、わてもさう思ふてる、これからの喜劇は今迄の樣に人情一點張りではあかんね』

闘髪の洋裝の女でも舞臺へ出す樣にせにや若い客は呼べまへん』

そして、また淡海は言葉をつゞけた。

『一ぺん、ダンスホールへでも行つて研究しまんねやな、モダン、ガアルを……』

私は、だまつて、しかしそれでもうなづいて見せた。

いろ

私が去年書いたある五幕の脚本を或劍劇一派が京都で上演する事になつた。そしてその道具帳を書いたのが私の友人である、彼の名を永尾といふ、大阪の松原三五郎塾に通つて未來は一かどの洋畫家を夢見た時もあつたが好きな芝居道へいつの間にか足を踏み入れてしまつた、そして今ではその劍劇一派の舞臺裝置をしてゐる。

彼は友人の私のために、可なりに凝つたデザインをしてくれた、そして一座の頭取の前にそれを出したので　る。

『君、これは道具帳ぢやないね、これは繪だね』

『さうです』

『さうですぢやないよ、道具帳と繪とはちがふ、こんなに澤山色を使つてどうするのだ、昔は色を使ふと芝居が來ないと云つて、墨で道具帳を引いたもんだよ』

『しかし……』

彼は云はうとした、けれど默つてしまつたがそのまゝ何にも云はないのは實に癪だつたそこで彼は

『ぼくは狂言方ぢやない、美術家だ、道具帳を描いたんぢやないよ、繪畫的なポーズによる舞臺裝置をして見たんですよ』

御苦勞、そんな議論までしなければならぬ芝居でもないのにと私は、思はず、この話を聞いて苦笑を洩らした。

き、つ、ち、り、

幕内に『き、つ、ち、り』といふ言葉がある、謂はキッチリといふ葉言を一つ宛云ふにすぎないのだが、これほど融通の利かないことをハッキリ表現した言葉はないと、いつも感心してゐる。

これは松竹以外のある興行部での話である西大阪の大劇場××座の五月興行はその座主の先代追善興行とかでめづらしい顔ぶれで蓋をあけた。

そんな風に、云はゞその興行部としては大掛りな興行だつたので初日前の舞臺稽古を衣裳づけといふことにした。

『よろしいか、舞臺稽古の日は衣裳づけですから用意をしておいて下さい』

頭取はかう命ぜられた。

當日、サアこれから舞臺稽古といふことになり、舞臺の道具も出來た、俳優の部屋へ衣裳も運ばれた、鏡臺に向つて俳優連は化粧を始め、衣裳をつけ初めて驚いた、小裂類が一つも來てゐない、まだそれだけではなかつた。髮の用意もしてなかつた。俳優連は赤くなつて頭取を呼びつけた。

『衣裳づけだといふのに何も揃つてゐないぢやないか』

『いゝえ、チャンと揃えてあるぢやありませんか』

『どこにだ！』

『どこにッて、もう貴方方が着てるぢやありませんか』

『エッ？』

『今日は枝裳づけでせう、ですから衣裳だけ用意しておきましたが……』

『小裂と髮はどうした』

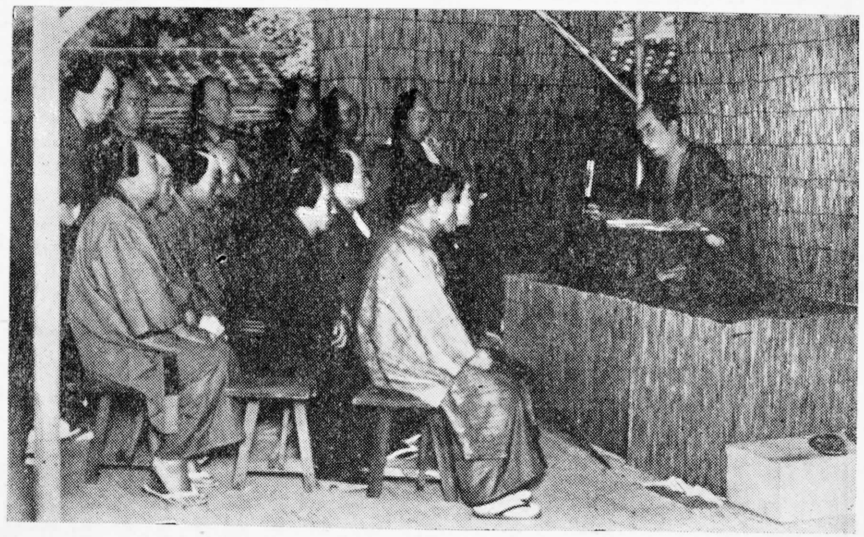
『それは何も聞いておりませんでした』

頭取は何十年からこの興行部に働いてゐる人である、この人の衣裳づけとは衣裳だけをつけることで、顔だけは女でも頭は丸坊主のお姫樣が新例衣裳づけの稽古をしなければならないのも、別に大した不思議とは思はなかつた。き、つ、ち、りした頭取である。

澤田正二郎君の印象

佐藤綠葉

演技者としての澤田君は、松井須磨子の相手役だつた頃のことより、外知りませんが、其後の劇壇に於ける彼の奮闘、殊に門閥や因習のやかましい世界に獨自の境地を閉拓して來た苦心と努力とには、平生敬服して居ります。彼に對しては、吾々が何か希望して見るよりも、彼の思ふまゝにいろ〳〵なことをやらして見たい氣がします。



小酒井不木作

『龍門黨異聞』の内容

油屋久二

事件の概念

勤王討幕の頃。將軍は高貴の御方を酬偶者としたのであるが、これに做つて諸大名や旗本は公卿の娘を連れて來ては、人質としたり無理に結婚したりした。

この時に勤王の志士九名は『龍門黨』と稱する一團を組織して江戸に來り、常に神出鬼沒な活動をつゞけて、嘆いてゐる公卿の娘をぬすみ返した。

その活動振りに探偵趣味を加へたものがこのお芝居の骨子となつてゐる。

主要人物と性格

これは作者の描かうと思つた主要人物の性格である。

講釋師南龍　とぼけてゐるやうな摑みどころのない男。滑稽なやうな眞面目なやうな、それで機敏であつて大きいところのあると言つた性格である。所謂、偉人英雄でもなく、たゞ普通な人間に見えて、しかも偉い男。——伊井蓉峰

女房お玉　江戸で育ちながら荒けづりな女。言葉は卑しいが生一本、龍門黨首を引きつけたる强者である。矢場の女であつたが、操かたく義理のためには水火を辭せぬ意氣のある美人。——河合武雄

弟子東狸　意志の弱い男。近代人らしい性格の持主である。そして惡人でないことである。——元安豐

水野兵庫　他人のために扮裝されやすいやうな特徴をもつた顔の持主である。內心險惡女にはとても甘い男。陰謀などを企てたがる惡人肌の男。決して好々爺にあらず。——大矢市次郎

娘雪枝　箱入ではなく、單なる傀儡であつてもいけない。しかし何となく膺揚なところがある娘。——瀨戸日出夫

乳母お淺　忠義一轍の女。多少のユーモアを持つてゐる者。——石川新水

その概

第一場　淺草觀音境內。なんとなく人の心も落つかぬ幕末の頃。しかし春も麗かな淺草境內に席を持つてゐる講釋師南龍は、今日も客の望みに任かせて得意の『龍門黨の活躍』を辯じ立てゝゐたのである。　龍門黨とは……その當時諸侯が政略的に公卿の姫に婚姻を迫り、或ひは掠奪などの所業に憤激して、この不運な姫たちを奪ひかへしてゐた。しかし何人にもその正體は知られてゐなかつた……

花見時の晝火事は珍らしくもないが、氣の早い江戸ッ子は『火事だ』と聞いて、南龍の話も其處のけに駈せ散つて行つた。

やがて南龍も續いて立ち去らうとするときほどから聽衆に交つて彼の噺を聞いてゐた乳母のお淺は南龍を呼びとめて、龍門黨は本當にあるものかと訊く。そして自分の奉公してゐた京の吳服屋の娘雪枝が井上壹岐守の邸に見習に出たところ壹岐守が側女に所望し、尙その上に家老の水野兵庫も娘に想をかけ、殿は意に從はぬを怒つて監禁したので、今の世に名高い龍門黨に賴んで娘を奪つて貰ひたいと眞心こめて彼に話をする。

これを聞いて南龍は決心し、何事かを乳母に囁いて紙包を渡して立ち去る。見送るお淺の横に水野兵庫が立つてゐる。彼はお淺に、雪枝を自分の意に從うやうに言つて吳れゝば娘を龍門黨が奪去つたやうに見せかけて邸から連れ出さうと言ふ。乳母は兵庫の言葉を承知する。

第二場　稻荷町南龍宅。講釋師の家には獨樂廻しや香具師等の大道藝人が大平樂をならべてゐる。みな一癖のありさうな人間である。彼等は南龍の女房お玉に酒をつがせて、彼女の酌で飲みながら龍門黨の頭の話をしてゐる時、南龍が戻つて來た。

お玉が席を外すのを待つて南龍は『待乳山九ッ』と怪しい合圖をすると、一同は承知顏に頷いて出て行く。

それから南龍はお玉に『もし俺が遠い處に行くとしたら、一緒に行つて吳れるか』と尋ねる。お玉は不審さうに酒をすゝめる。やがて南龍は夜の席にとお玉の止めるを振りきつて出かける。

その後にお玉に心をよせてゐる弟子の東狸がやつて來る。彼は口說きながら、師匠が毎晩家を明けるのは何故か知つてゐるかと言ふお玉は驚いて『今夜九ッ』と思はず口走る。

第三場　待乳山龍門黨會合。九ッの鐘の鳴つた時、待乳山の鬱蒼たる森の中にはいろいろに變裝し顏を包んだ怪しい男が車座になつてゐる。その中央に南龍が腰を下して、彼等と黑門町井上壹岐守の邸に監禁せられてゐる

娘雪枝を奪ひ返すべく密議を凝してゐる。言ふまでもなく講釈師南龍は龍門黨の首領であつたのである。

彼等は翌晩娘を救ひ出すと同時に上方へ向けて歸る約束になつて、その一黨は今宵を名殘りと街へ下りて行く。

南龍が立去らうとする時、逢曳してゐると一心に思ひつめたお玉が跡を追つて來たのである。只お玉は自分のほかに女と逢つたものと思ひこんでゐる。しかし南龍にはそれ以上の大仕事がある。

第四場　井上壹岐守邸の一室。監禁せられてゐる娘雪枝は乳母のお淺が南龍から授けられて來た策略のとほりに、壹岐守の意に從ふと見せて見張りの眼をゆるめさせて乳母に抱かれて眠についた。

仲間を伴れた水野兵庫が庭から這入つて來たのでお淺は少なからず驚かされたが、その顏は悅びに變つて行つた。意外にも兵庫は偽兵庫であつたのである。仲間は庭にゐる他の者共に合圖をした。

第五場　同邸仲間部屋。仄暗い仲間部屋の柱にお玉は繩で縛りつけられてゐる。その前に東狸が立つて、自分の意に從へと口說き、南龍を誘き出すおとりに摑へたのだ自分の意に從ふならば……といふ處へ水野兵庫が縛上げた南龍の繩尻をもつて這入つて來る。東狸は氣まりわるく出て行く。

兵庫は聲を荒げて、雪枝をかくしたところを言はねばお玉を拷問にかけると脅す。南龍は何うしたものか素直に、二人を縛つた儘で連れて行くならば隱した所に案内せうと答へる。

兵庫がその用意に近侍を呼びに行つた間、お玉は南龍にその不甲斐なさを詰る、しかし縛られて來たのも魂膽あつてのことだと安心させるところに、兵庫は東狸に何物か盜まれたと見えて慌しく出て來る。二人を責めるが

伊井蓉峰の（講釈師南龍）と石川の（乳母お淺）

南龍は東狸のことは知らぬ。『いざ御案内』とお玉を促して立ち上る。

第六場　仙冲には一船の大船がもやつてある。夜も更けて舷近く二人の男が海原を眺めてゐると、十四五人を乘せた傳馬船が漕寄せられた。二人の男の口から用意は出來てゐると言ふやうな聲が小さく洩れる。

傳馬船の舳先には水野兵庫が突立つて、つづいて侍に繩尻をとられた南龍とお玉が見られる。南龍の合圖で梯子が渡された。この船こそ龍門黨の持船で雪枝も此處に連れて來られてゐるのである。

船に上つた兵庫は南龍夫婦を帆柱に縛りつけさせた上、雪枝を連れさせて來る。運び出されたものは白木の寢棺である。雪枝は眠り藥のために覺めるまでは風にあてぬやうにとその中に入れられてゐるのである。兵庫はこの美しい姿を見て悅んで蓋を閉ぢ運ばふとする。乳母のお淺が止めるのでこれも縛りつけて失はれる。

勝ち誇つた兵庫が黨員に手傳はせて棺を傳馬に移さうとする時、棺は手をすべつて海中に落ちた、が、また黨員の手でふたゝび拾ひあげられて傳馬船で陸地の方に漕ぎ去られて行つた。

悲しんでゐたお淺は突然に舷から身を投げやうとする。お玉は申譯がないと南龍を責める。『その申譯はかうするのだ』と着物をはねのけて身を躍らし海へ飛込んだ。船中の者たちは呆氣にとられてゐる。

一度思ひつめた事は、どんな難儀を切拔けても仕遂げるといふ龍門黨の首領は何故海中に身を投じたのであらうか、果して申譯のためであつたらうか。

第七場　海岸。仙冲を望む海岸に水野一味と棺を乘せた傳馬船は漕ぎ寄せられた。やがて棺は船から下された。そして蓋が開けられた時、兵庫始め一同の口からアッと驚きの叫びが上げられたのである。その笹中に入れられてゐた者は雪枝ではなく、人もあらうに東狸であつた。

（完）

『原島都』の座中

河合武雄の仲居野德

中座の『戀の受難』について

平野止夫

拙作『戀の受難』(二幕三場)が、今度中座において、東京と同じ座組の伊井、河合合同一座で上演される。大阪では今一枚喜多村も入るといふことだから、面白い芝居になるだらうと思ふ。

『戀の受難』は目下名古屋新聞に連載中のもので、去五月八日から矢張伊井、河合一座で名古屋の新守座において初演したものである。その時伊井は井上技師、河合は女優明石月子、そして石川が高田家令孃の純子に扮してゐた。

帝國劇場では二十一日から月末まで打つたが、こちらでは帝劇專屬の女優村田嘉久子、河村菊江の二人が加入して、月子を嘉久子、純子を菊江が演つた。

名古屋の方は病氣のため觀ることができなかつたが、帝劇ではなんと云つても女優だから味が本當のものが出てゐた。もと〳〵俳優にはめて脚色したものであるから、河合は勿論、石川の役にしてもそれ〴〵柄にはまつてゐたらうと想像される。第二幕の如きは、嘉久子のそれよりも、河合の方が男優だけに線が太く、そして強く出たらうと思はれる。が、本質的に見て、所謂『女らしさ』といふものはどうであつたらうか?

大體、かうした現代劇に在來の女形を使ふことの不自然さは、最早議論の餘地はない。『戀の受難』劇でもヒロヰンの純子は素より、月子にしても、お芳にしても、みんな女優が扮すべきである。名古屋では仕方がないとしても、帝劇となつて、河合なり、石川なりがその持役を各々女優に讓つたのは(外にも理由があるとしても)頗る賢明なことだ。中座では喜多村が加入するさうだが、喜多村が月子をやり、純子をまたもとの石川がやる?(河合は出ないで)それとも河合の月子で、喜多村が純子に扮するか、何れかであらうと思ふが、どちらにしても女優を使はないとすれば、從來のとほり全部新派で押し通すことになる。かうなると、また新守座や帝劇とは異つた芝居の味が出ることであらう。新派三頭目の顔合せであるから、中座は案外面白い芝居が見られるかもしれない。原作者として私もそいつを一度觀たいとも思つてゐる。

元來『戀の受難』は新聞で百八十五回(約八百枚)の長篇であるから、これを僅々二幕三場に縮めた(勿論全篇をではない)については、どうしてもそこに大なる無理(卽ち不自然)が生じなければならない。脚色『戀の受難』は正しくそのとほりで、僅か八十回しか進んでゐないところで脚色したものだから、隨分原作とは遠いものになつてしまつてゐる。筋や人物の違ひは仕方がないとして肝心の性格が芝居と原作とでは、まるで反對になつて表現されてゐるのは、原作者として實に殘念である。脚色者があれを二幕三場に兎も角纏め上げた努力は、原作者と雖も大いに多とするのであるが、たゞ人物の描寫なり、性格の表現が、原作と反對に出てゐるので、私はどうにもあのまゝ頂戴ができかねるのだ(このことは東京の二三新聞雜誌に書いたので、こゝには重複を避けよう。脚色者は私のその一文を讀んで、或ひは怒つたかもしれないが、僞らぬ作者の氣持を告白したのだから、どうも仕方がない。)

新聞の八十回あたりで脚色したといふのだから、全く無理のない話ではあるが要するにあれでは『戀の受難』と題した私の題意なり、作意なりが、どうも徹底しない。原作者としてはそれが非常に殘念なのである。

とは云ふものゝ一般の見物はみんな喜んで觀てくれてゐた。大受けだつた。原作者はそれを見て、大いにくすぐつたかつた。が、『龍門黨異聞』と『都島原』と、これと三つの狂言のうちでは、大衆はやつぱり『戀の受難』を面白いと言つてゐた。私がそれとなく廊下とんびをして歩きながら、耳を傾けてゐると、若い人も、老人も、紳士淑女も、大方そんな風な評判をしてゐた。それを聞いて、私は『まだ〳〵、大衆にはやつぱりかういふものがいゝのだな。吾々作家が考へてゐることゝは、まだ大分遠い。』と、さう思つたのだつた。

勿論、原作の詮議立をよして、あれはあれだけのものとして見れば、ちよつとハイカラで面白いところがある。伊井の井上技師が頗る輕妙に演活してゐるので見た目にはなか〳〵面白い。難を云へば世界があまりに脫線氣味に墮したことだ。詰らない悲喜劇になつてしまつたことだ。原作者はそれを遺憾に思つてゐるまあ喜多村が一枚入れば、どんな風になるか、きつと見直すかもしれない。それを心に期待しながら、遠く浪花の地に希望をかけておく

東京及京都で許可された同狂言は當地で不許可になりました。作者及び脚色者にお氣の毒であり、俳優及當事者の迷惑は言ふまでもありません。惡しからず御諒承を希ひます。

御挨拶

伊井蓉峯

純文學の藝術上から至指されましたことは別といたしまして、舞臺藝術を獨立したものとして考へますと、あらゆる上から綜合して美化しなければならないといふことは申すまでもないことでございます。まして劇場で、一般の觀衆を待つといふ約束のあります以上、この觀衆の耳目から心にある感應を起さしめるといふことは勿論で、俳優はこの綜合藝術の中に立つて自己の藝を存在發揮すると同時に、一元に融和をはからなければなりません。その標準は舞臺脚本。——舞臺脚本の精神がもとでございます。由來、俳優は自我を捨てねばなりませんが、自己の藝術そのものまで捨てゝかゝるといふことは、前申し上げました演劇藝術を獨立した見地から申しますと、全然捨てる譯にはまゐりません。

×

六月、三田の劇研究會で創刊されました『舞臺新聲』といふ雜誌で久保田万太郎氏が、新派劇（中略）呼吸です。團體の力はありません。丁度、澤田の新國劇や、五郎の曾我廼家と全くうらはらな姿です。——と申されましたことは實に至言だと痛感いたしました。昔の言葉で申しますと、呼吸を合せ呼吸が合ふ、それが芝居の面白味。——そこに渾然として舞臺藝術が表現されるのでございます。それにはその藝術の流儀。——言葉をかへて申しますと、その派、その一團が訓練されてゐなければなりません。經營者の都合で、今日集り明日散じ、或は名前だけ羅列した主旨のない烏合の衆團では、綜合藝術の構成されることは全然不可能でございます。

×

昔の諺に、兩頭の蛇は何とやら申します。これが三頭、四頭となりましたらどういふ結果になりますでせうか。たとへて申しますれば政黨で、もし主義、政策の異なる人が、その總務に連つて居りましたら、その政黨は果してどうなりますでせう。茲に舊派の演劇は傳統的な型がございます。ですから俳優は、その型、約束を辿つてまゐります。ところがわたくしどもの演ります科白劇は、新作そのものに依つて間と呼吸をこしらへて、そこで始めて舞臺藝術が構成されるのでございますから、自我を捨てろと申すのではございませんが、その大志眼に準じて、はじめて自己を捨てゝ自己を生かす。——場合に依れば綜合藝術のために犧牲の覺悟を持たなければならない場合がございます。それが自分を捨て自分をなくなすといふことになるのでその藝術を全く捨てろと申すのではございませんが、そこにいふざる書けざるの妙があるのでございます。俳優は、各自これに準じて一致すれば立派な綜合藝術が構成されるのではないかと存じます。わたくしどもは、ます〳〵その道に精進しなければなりません。何れそのうち改めて自分の理想を皆樣の前に披瀝いたしますのを樂しみにこの稿を結びます。

新派に對する感想

河合武雄

今、新派に就いて自分の感想を述べて見ますと、自分達の教養のない亦創造力にも乏しい且貴重な傳統など持たない所から出發して曲りなりにも多少形を爲し芝居の一部分として存在して來たのは民衆の力に因た事は勿論の事ですが、亦新派の人達も自然に團結されてゐて一つの國が出來てをり、互に研究練磨して文筆大方の指導を受けて變化の多い現社會の心理に迎合して行けたからだと考へてをります。

それが、いつか知らず知らずの間に離散して殊に震災を境界として此塊の力が頓に失はれて終た事が今振はない最大の原因であると思ひます。新派凋落々々と隨分聽いて來ましたが私達は新派の開拓者の後を受けて出來るだけの仕事はして來て無論完成はしませぬが、或る彼岸には到達したのですから後は今の新派の若い人達が引受けて、曾て得た名聲を保て行けるだけの腕を持て欲しいと思います。餘り今の人達が敏感にして理智に優れてゐる爲めに野心に傾き過ぎ早くから多少なりとも經驗のある者と離れ共に共に研究する事を避けてゐます。或時には平凡も必要です人には平凡に見えても自分で平凡にしなければ、わけです。未だ充分滋養を吸收しない内に自ら之れを斷つから頗る永續性のない微温的のものとなつて終ふのでせう。乳なくして育くまれる兒はありません我れ我れも先輩の乳を吸つたのですからよし吸つても或る時期迄充分吸はなければ丈夫な人は出來て來ないわけです。無論私達は昔咲いた花ですから古るくて色も褪せてゐる。然し若い人達が眞に古るいと知たなら其處に新しい道を開く事が出來るわけです。

然し、それは感應神經で感じただけで自分の腦裡にある事でこれを表現して人の眼に映じさせるのに實に絶大の相互練磨の力が要るのです　それにはやはり若い人達が少しでも經驗の餘計にあるものと專ら精進して行かなければ不可能の事と思ひます。

殊に綜合藝術と云ふ演劇に於ては各々の特色を表はし乍ら、互に他の缺點を補て行て初めて完全に行くものなのでしやうから…夫に新派の如き何等の固い基礎貴い傳統に據らずに出て來たものが今日の樣に散在してゐては價値あるものが出來る筈はありません。未だ未だ共に磨く時代です。確りした後繼者のない時は國でも家でも滅るではありませんか

兎に角舊劇と異た芝居をどうにか現出さしたのは亡くなられた新派の諸星及び先輩伊井氏喜多村氏等が過去に於て今の人達の體驗しない程な火の出る樣な事をして來て何等規範のなかつた所へ或る一つの規範を作り藝道に眞向に精進しましたからこれでも人が買てくれたのです。唯野心のみで藝以外の手段を多分に取り入れて早く名を現したい爲めに少數で進むような事はしなかつたわけです。若い有爲の人達の虚心な熟慮を望みます。低い細い笛を吹いたつて大衆は踊りますまい。多勢の精魂から出る太い呼吸からの音でなくては駄目でしやう、然し決して振はない今日を若い人達に耳歸すると云ふわけではありませんが、一面に上述の樣な理もあるんだと云ふわけです。

我れ我れは足りないながらも今でも自分達の出來るだけの事はしてゐます。若し全然我れ我れのしてゐる藝が未熟たりとも、今の劇壇に不用老廢物であつたなら、こうして生きては行かれない事と思つてゐます。

もう今日は新派舊派と云ふ名前から脱して。俳優として完全なものになりたいと思ふ心で一杯になつてゐます。

「龍門黨異聞」について

小酒井不木

姥谷さんから、拙作『龍門黨異聞』についての、感想をとのことに、厚顔しくも、貴重な紙面を拝借して、あの作の出來上つた事情その他について述べさせてもらふことにした。

『龍門黨異聞』は、三幕七場の髷物劇で、河合武雄氏の依囑によつて書きおろしたものである。

この一月、河合氏一座が名古屋の新守座に來られたとき、三の替りの出し物の一つとして、やはり髷物劇なる『紅蜘蛛奇譚』を書きおろした。これは、濱松、靜岡、神戸で上演されたが、劇の性質上、大阪では上演を許可されないであらうといふ豫想のもとに、同一座が二月の浪花座に出すものとして、別の脚本を書くやう、河合氏から依囑されたのである。

何しろ、二月の五日迄には是非共書き上げねばならぬといふことであつたので、まつたく倉皇のうちに執筆し、構想のきまつたのが一月三十一日であつたから、約五日間、殆んど徹夜して、とにも角にも豫定通りに出來上つたのである。

ところが、いよ／＼稽古に取りかゝらうとすると、意外にも、念のためにかねて、出願してあつた『紅蜘蛛奇譚』が上演の許可を得るので、それではといつて、浪花座の二月狂言には、『紅蜘蛛奇譚』が上演されたのである。

その後、その當時の河合氏一座の人々は分れて、河合氏は三月、四月を、東京の松竹座で舊派にきじつて活動を續けられたが、五月になつて、伊井氏一座と合同することになり、木内興行部の手で、はじめて『龍門黨異聞』が、名古屋の新守座で上演され、次で、五月二十一日から、帝劇で上演されることになつたのである。

『紅蜘蛛奇譚』も『龍門黨異聞』も、探偵小説の持つ味を、劇に移さうと試みたものである。從來の探偵劇は、所謂捕物式のものであつたから、捕物式をはなれた探偵劇を書いて見たいといふのが私のかねての希望であつた。かやうな探偵劇が、衰へつゝある新派劇を復活せしめ得るか否かの問題は別として、面白い探偵小説劇（探偵劇といはずに、探偵小説劇といふ變な名をつけたのは、探偵小説の味をそのまゝ劇に移したものといふ意味である）ならば、きつと大衆に喜ばれるにちがひないと思つたのである。

さて、『紅蜘蛛奇譚』がいよ／＼上演されて見ると、作者の用ひたトリックよりも、やはり役者の藝そのものが目立つて私のねらつたところとはむしろ別の味が出てしまつた。そこで私は、第二の作に於て、主として筋によつて見物を引きつけるものを書かうと企て、それによつて出來上つたのが卽ち『龍門黨異聞』である。

『紅蜘蛛奇譚』に於ては、女賊お辰を主人公とし、河合氏がその主役を勤めたのであるが、『龍門黨異聞』に於ては、河合氏の役は外見上主役とはなり得なかつた。然し、私の考では、この劇は、筋そのものに重きが置かれてあるから、あの中に出て來る總ての人物を平等の地位に置くつもりであつたのである。みんなして、一つの節を運び、だん／＼見物を引張つて、最後にあッといはせるといふ風にしたいと思つたのである。これが所謂探偵小説のコツであつて、これを劇であらはして見たかつたのである。

ことに、河合氏の勤める『お玉』の役は、比較的動きの少ないものであつて、私自身も、河合氏にとつてお氣の毒だと思つたが、然し、私としては、いよ／＼芝居になつたのを見て非常に滿足した。この『龍門黨異聞』は、近く、マキノで映畫化されることになり、大詰の場は、芝居よりも實感がよくあらはれるのであらうが、お玉の役は、映畫では到底あの味は出ぬであらうと思ふ。こんなことは言ふ迄もないことであるけれど、河合氏の苦心の並大抵でなかつたことを思つて感謝の意を表する次第である。

『龍門黨異聞』は雜誌『大衆文藝』の四月號に發表されたが探偵小説劇なるものは、どちらかといふと、雜誌などで發表しない方がよいかも知れない。芝居を見ぬ先に筋がわかつて居ては、却つて興味を少なくする恐れがあるからである。先般上映された探偵映畫『バット』には、その最後に、見物に向つて『まだこの映畫を見ない人には、犯人の名を決して語

して下さらぬやう。』といふ注文がしてあつた。それと同じく『龍門黨異聞』でも、それを見た人に向つて、決して最後の解決を他人にお話し下さらぬやう』と私は言ひたいくらゐである。雜誌に發表して置いて、今更こんなことを言ふのは、甚だ當を得て居ないが、むしろ雜誌を御覽下さらないで芝居を見て頂いた方が、きつと興味が多いと思ふ。

それ故、私は、こゝでは『龍門黨異聞』の筋書きは述べない。で、名古屋で上演されたときの印象を述べると、伊井氏の講釋師南龍、河合氏のお玉に申し分なく、石川氏の乳母お淺、武安氏の東猛、大矢氏の水野兵庫、瀬戸氏の娘雪枝、いづれもその役にはまつて居た。その他、龍門黨員や隱居に扮する人々は、それ〴〵十分な持ち味を出してくれた。新派の人々は何をやつても器用である。だから、今後劇作家がよい脚本さへ提供すれば、決して、新派は衰亡しないといふ感じを深くした。

次に劇そのものゝ感想であるが、作者としては、色々のアラが見えて、不滿なところも尠くない。『待乳山會合の場』など、よほど短くしたつもりだつたが、まだ少し長過ぎる樣な氣がした。

作者が一番心配したのは、佃沖の船上の場面である。寢棺を水中に落すところが、うまく行くかどうかと、内心大に危ぶんで居たが、幸ひにそれは杞憂に終つた。然し、何といつても、この點は、映畫の方がより多く、劇的効果を收めるにちがひない。

なほ色々細かい批評を書きたいと思ふけれど、作者自身が書くのもおかしいから、これは皆さんに見て頂いて、皆さんの判斷にまかせ度いと思ふ。

たゞ私として、本當に知りたいと思ふことは、かやうな探偵小說劇が、大衆にどの程度の感興を與へるかといふことである。勿論一度や二度失敗したとて、それで手を引くのは間違つて居るけれど、今後私は機がある毎にこの種の脚本を發表して行きたいと思ふから、この點について、皆さんの率直な感想をきかせて頂きたいと思ふ。

何しろ、脚本には、まつたくの素人の私であるから、科白や人物の出し入れなどには、隨分、とんちんかんなものがあるにちがひない。かういふ點は、今後大に勉强して改良して行きたいと思ふ。

はんの小さな感想

——伊井、河合夫婦劇と新派の路——

楠田敏郎

伊井、河合の夫婦劇が、久しぶりに帝劇で上演される。そして、友達の作品が臺本にされてゐるので、日頃、新派劇の惡口ばかり云つて居る手前、果して伊井、河合兩氏によつて代表されるところの新派劇が、現代、どこのところに居るかをも見るために、是非見物したいと考へて居る。で、この稿は、それを見てからにすると都合が好いが、それでは締切に間に合はないらしいから、思ひついたことで責を果さして貰ふ。

◇

この前『井上正夫と新派劇』をかいて、島渡、新派に對する考へを述べたから、なるべく重複を避けたくおもふが、伊井、河合兩氏が、すがれ切つた新派劇壇に踏み止まつて、何うあつても再び新派全盛への運動をやらうと云ふのだつたら私も『物は相談だが』と出たくなる。

映畫に押されて、新派劇が見るも無殘に姿を消した。——とさう云つたら、兩氏は何う云ふ顏をするだらう。だが、よしんばどんな顏をされても、これは事實だから仕方がないのである。

なればこそ、あれだけ鳴らした伊井、河合ともあらう人達が、東京に、本城一つ持たないみじめさだ。帝劇へ久しぶりにかゝるのを新派劇のために祝ひたくても、本當は、一種悲痛な感にうたれるだけのものだ。

◇

正直に云ふと、帝劇にかけた脚本を見て、私は『これでは

矢張りいけない』とおもつた。小酒井不木博士の『龍門黨異聞』に平野止夫君の『戀の受難』故人澤田撫松君の『都島原』の三つだが、この狂言の立て方を見て、誰も不思議な顔がしないだらうか。

これが、毎月、どこかに本城を持つてゐる新派劇で、先月も、來月もやつて居る際だつたら文句を云はない。が、伊井氏にとつても、河合氏にとつても、大切な場合だ、六ケ敷く云ふと、新派劇が更生して、新らしい大衆の前に進出する悲壯な出陣だ、その場合の陣立てとしては、脚本の選擇があまりにぞろつぺであり過ぎる。

伊井、河合兩氏が、大衆の前に立つて、一つの宣言をするのと同じだと、それくらひに私は今度の機會を大切に見てゐた。それだのに、この立て方には失望した。もつと、兩君が全力を注いでかゝるべきもの、兩君の進むべき路と、更に大きく云つて、新派が生くべき世界を強く示したものを欲しかつたのである。

◇

伊井氏が、長く自重してゐるのに、同情と敬意を持つてゐた。身邊に、一つ一つ木の葉の落つる音を聞き乍ら、じつと眼を閉じて座つてゐるやうな氏の態度は、むしろ凄くさへあつた。で、一度清水一郎君を引張つて氏に逢ひにゆき、大いに意見を述べたいとさへ考へてゐた。卽ち、云つて見れば私は隱れた理解者のつもりだつたのだ。で、今日も、遠慮なく云ふことが、お世辭を使ふよりも好いと考へて、これを書いてる次第だが、伊井氏が捲土重來の勢ひで出て來たことを欣ぶと共に、折角やるなら、まう一つ踏ん張つて欲しいと云ひたいのである。

◇

人間は變なもので、自分の知らぬ世界にだけ興味を持つ癖がある。いま、劍劇が流行して、戀愛ものがそれほどでないのが、如實にその趣味性をあらはしたものだ。我々は、どんなにおもつても、劍を拔いて人を斬るわけにゆかない。その出來ないことを、芝居なり映畫なりで見る。すると、錯覺を起して、丁度自分がそれをやりつゝあるやうな快感を感じる戀愛ものだと、よし、それがどれほど作の價値として勝れたものであつても、あれなら自分にも經驗があるないにしても、經驗出來るかもしれないと云ふ觀念を持つて、興味を持たなくなる。――變な例だが、新派劇の見せてくれる人情、事件は、あまりにも我等の身邊雜事でありすぎると云ふことが、客が木戸を拂はない理由になるらしい。

それを、押し破るには、脚本の持つ情熱と、俳優の演出上に於ける情熱でぶつかるより外はないらしい。

◇

アマチュアにすぎない私などが、狂言の指定らしい言辭を弄するのは僭越だとおもふ。が、更生の路を行かうとする新派劇を、大衆のものであらしめるために役立つ脚本を考へて見ると、それを云はずには居られない氣がする。

眞山青果氏のものは、素晴らしい情熱をもつてゐるのではないだらうか『桃中軒雲右衛門』にしても『明君』にしても、實によい戲曲だ、殊に『桃中軒雲右衛門』などは、新劇の旗を揭げてゐる澤田正二郎氏にとつてよりも、新派劇の旗を揭げてゐる伊井、河合氏にとつて、もつと大切なものではなかつたであらうか。

山本有三氏の『西鄕と大久保』なども、よいとおもふ。あれ位なものをひつさげて起つてくれたら素晴らしからう。

かうは云ふが、私は、伊井、河合氏らに、所謂、新劇をすすめるのではない。大衆の中にあるべき新派劇と、かぎられた看客の理解の前に立つ新劇とでは、その目的とするところがおのづから違ふ、私としても、それくらゐなことは考慮に置いて物を云つたつもりである。

たゞ、一つの旗じるしを立てゝ、欲しいと云ふのである。旗じるしのない戰には、兵があつまらないにきまつてゐる。――折角のことだから、伊井、河合夫婦劇を、是非昔のとほりに、いや、それよりも、もつと盛んなものにしたいからさう思ふのである。

◇

河合氏が、尾上菊五郎の女房役をしたりして、苦しんで來てゐるのを知つてゐる。

が、舊劇だからこそ、女形の存在が許される、まう新派には、――なるべく本當のものを見せやうとする新劇だ――女形は存在すべき必要と理由がない。喜多村氏、河合氏などが居るからこそ、まだ女形が存在し得てゐるのだが、この邊で、河合氏はきつぱり『男』に戻れないかしら。

打開する力は、新らしい世界を生すに相違ないのを信じる。骨を折つて、苦しんで、それが時代の要求と全然反對な仕事であるのをおもふと涙がこぼれる。

◇

私はあんまり云ひたいことを云ひすぎた氣がする、しかし、それだけ新派劇のことを親身になつて考へてゐるのだとおもつて許してもらふより外はない。

彼等の求むる戯曲

鈴木善太郎

世界の演劇的中心地は何と云つても紐育であらう。なる程、優れた劇作家は歐羅巴から續々輩出する。然し歐羅巴は供給地であつて、その消化地は紐育である。あらゆる優れた戯曲と、俳優と、演出家は世界中から紐育に集つて來る。世界の演劇の市場は紐育である。

紐育の興行者等がいかなる戯曲を要求してゐるかを知る事は、何人に取つても興味のある事である。なぜならば、彼等が常に上演しつゝある戯曲は、勿論彼等の要求する條件にあてはまるものであらねばならぬ。そして彼等の戯曲に對する要求の聲は、取りも直さず演劇の本體を明らかにするものであると思はれるからである。

ラングナアはかう云つてゐる。

一　類型的でなく、特性的な登場人物を有する戯曲。
二　生活を書いた戯曲。
三　ある何かを考へさせ、同時に樂しませる戯曲。

類型的な登場人物程、觀客を退屈させるものはない。凡ての藝術の基調が個性の表現にあるやうに、戯曲も亦ある特性的な人物を要する。而かもそれは我々の生活を書いたものでなくてはならぬ。生活のない戯曲は、いかによく組立てられてあつても、何の價値もないものである。

戯曲は樂しませるものでなくてはならぬ、これは何人も異議のないものであらう。然し同時にまた何かを考へさせるものでなければならぬ。樂しませるだけで、考へさせることのない戯曲は、必竟無意義な遊戯に過ぎない。ラングナアの論點はこれである。

つぎにブロードハーストの言葉を紹介しよう。彼はかう云つてゐる。

一　唇に笑を、眼に涙を持ち來たすところの戯曲。
二　理想的な演出時間二時間半の條件にあてはまる戯曲
三　大戀愛事件を主題とした戯曲。

笑と涙を共に含むことが戯曲に取つて最も重要な條件である事は、今更こゝに説明するまでもない。觀衆は笑と涙を求める。而かも笑の後に涙あり、涙の後に笑ある時に、觀衆の心をしつかりと摑む事が出來る。氣分の變化は彼等を飽かす事がない。古來成功した戯曲は凡て笑と涙を巧みに織り交ぜたものである。

生活は益々多忙になつて來た。現代生活は速力そのものである。かくて映畫が生れ、また映畫に影響された場合の轉換の多い多幕物の演劇が流行して來た。而かも演出時間二時間半を超へる事は、紐育の生活には許されない事である。戀は人生のハートである、從つて戯曲のハートである。舞臺上の戀愛事件に決して失敗のない事は明らかである。

セルウインは又、かう云つてゐる。

一　日常の事件を單純に取扱つた戯曲。
二　舞臺上の効果を無理に出さうとしない戯曲。
三　獨創的な巧妨な、且つ自然な戯曲。

單純化は近代藝術の眞髓である。戯曲の中で徒らに複雜な筋を賣ることは、戯曲の主題に對する注意力と臨味を散漫にする。單純な主題の戯曲のみが、眞に觀衆の胸に觸れる事が出來る。同時にまた作者は自分が知つてゐる儘の生活を書くべきである。歴史や小説で讀んだ生活を書く時に、その戯曲は眞に人に迫る力を薄弱にする。

戯曲は作られたものであつても、作り物らしく思はせてはならぬ。舞臺効果を無理に出さうとして、徒らに技巧を用ゐたものは、戯曲の第一條件を缺くものである。獨創的で巧妙で、自然な戯曲は、藝術的に價値があると共に、いかなる俗衆をも感動させる事が出來る。これがセルウインの主張である。

ついでに、紐育の一興行者ゴルヅンが、若い戯曲家のためにと云つて、戯曲作法を説いてゐる言葉を紹介しよう。曰く、——

一　劇場に行け。
二　金がないなら大入場で澤山だ、兎に角劇場に行け。
三　辛抱が出來るだけ惡い芝居を見よ——かうして他人の過ちに供つて學ぶところあれ。
四　劇場を愛せよ。
五　出來るだけ多くの戯曲を讀め。
六　長篇戯曲を書く前に、短い場面の物を書いて實習せよ。

ゴルヅンのこの説には多少の異論はあり得ても、戯曲の本質に觸れてゐる點で、これまた何人に取つても興味のある暗示である。

イワク氣焔

中村魁童といふ、チッポケな歌舞伎役者、魁車のお弟子さんで子供〳〵してゐるが、仲々お口は達者なものである。

「隱れたる天才を何故先輩は認めてくれないだらう、幕内には天才を見る眼がないのか」

天才とはお自分の事らしい、爾來、これはクワイ氣焔といふ。

苦悶する澤田

額田六福

澤田君と私とを、單に作家と俳優と云ふ關係以上に考へて呉れるらしい人々は、よく私にかう云ふ。

『とてもすばらしい人氣ですな。』

と。そして、その後ではきつとかう云ふ。『それが何時まで續くでせう。』

と。それを言葉を代へて云ふと『今が人氣の最頂上だ。』と云ふ事であり、更に『もうこれからは下り坂だ。』と云ふ事にもなる。

勿論、さう云つたからとて、その人の心に毫末も呪詛の影がさしてゐるのではない。流行語で云へば、愛すればこそかく案じても呉れるのである。それは判つてゐる。しかし、判つてゐてもさう云はれると私は默つてゐられない氣がする。そこで、私は、

『大丈夫、彼は不斷に迷つてゐます。』

と、氣を負つて答へるのが常になつてゐる。

實際に、澤田君の今日は劇壇には不思議な存在である。あの貧弱な（ある人々には失禮かも知れぬが）一座を率ゐて、この不景氣のドン底で、梅幸、幸四郎氏の巨頭を網羅しても尙多くの空席を殘す帝劇で、たとひ安値にせよ、連日爪も立たぬ大入を占め、そこを本城とする菊五郎君さへ、支へ兼ねて投出した市村座で平氣で二ヶ月も連續して打ち越す。全く一種の驚異である奇蹟である。

こゝに於てか、その人氣は底力のある、健實なものでない如くに見えて來る。見物は一種の魔力にかゝつてゐるのではあるまいかと考へる。さて、その魔法が神の呪文で解けた時を思ふ樣になつて來るのは自然の成行である。彼を愛する人が彼の前途を憂ゐるのは、實にこゝに胚胎してゐる。

彼の天分には、一種の魔力的の人格的魅力があるのは事實だ。それが彼の人氣の半を助けてゐる事も事實だ。その點で彼は有り難い惠まれたる天才である。けれども彼は、決して自己の天分にのみ依賴して晏如としてゐるのではない。天分に比敵する丈けの藝の魅力を持たなければならぬ。それが兩兩兼ね備つた時、彼は眞の完全な藝術家となり得る。彼はそれをよく知つてゐる。そこで、血の出る樣な慘憺たる努力が積まれてある。彼の稽古を一目見た者は、この論が無稽でない、彼に阿諛するものでない事を直ぐに知るだらうと思ふ。

彼はよく『最後の五分間』と云ふ。ナポレオンもさう云つたそれは戰爭である彼の場合は次興行の脚本の選定の時である東京では、開演前十日までに脚本の檢閲を受けなければならない事になつてゐる。その最後の十日の最後の五分まで、彼は何を上演するか、迷つて迷つて迷ひ拔くのである。甲乙丙丁戊……と候補脚本を机上に並べて、取捨に苦むのである。傍で見てゐても氣の毒な程である。時には、自働車に乘つて私達の宅へ駈けつけてその三日前になつて何幕かの脚本を書けと云つて來る事すらある。とても出來るわけのものではない。馬鹿でない彼がそれが判らない譯はない。しかし出來ない——と知つてゐても、彼の心持から云へば賴んでみなければゐられないのだ。彼の心はそれ程に眞實を求めてゐるのだ。私は、それを無理とも無法とも思つた事はない。

さう云うと、彼は一向に無定見で、其日暮の樣にも考へられる。しかし、今時の樣に激しい思想の混亂期には民衆と一致して歩まうとする者は、不斷にうごき、不斷に迷はざるを得ないのが本當だと思ふ。藤井眞澄君の所謂藝術的手淫をやつて、一人ですきな作を書いて、一人ですきなものをやつて居ればともかくもだ。私達はいつも何十何百萬の人を對照としてゐる。

この間市村座へ行つた。旅行したり俗用があつたりして、珍らしく良く逢はなかつた後だ。これから芝居について話し合つた。彼は云ふ。

『迷ふね。もう荒神山ぢやあ絕對に駄目だ。何の反響もなくなつた。』と云つて西鄕と大久保でも困る。と云つて、桃中軒雲右衛門でもない樣な氣がする。強いて云へば。いつかの戀愛病患者だね。あゝした調子の脚本ぢやないかと思ふんだが——近い中に君の宅へそれを話しに行かうと思つてゐたんだ。』と、

彼を愛して呉れる兄弟達よ。どうか安心して下さい。彼はかうした不斷に迷つてゐます。迷はなくなつた新派は井上君一人を殘して滅亡した。しかし、迷つてゐる彼の前途には、無限の發展、無限の榮光が豫期され、約束されるから。（終）

桃中軒雲右衛門

久松喜世子の妻

浪花座から浪花座まで

十菱愛彦

1

私が澤田正二郎君を始めて觀たのは、今から十年程前中學生時代のことである。當時彼は藝術座の女王松井須磨子と衝突して、關西で旗上げしたばかりである。劇場は京都の明治座で、演物は當時の座付作者行友李風氏『月形半平太』だつた。私は未だに四條橋畔の鮮やかな印象を忘れることが出來ない。

兎に角『月形半平太』は異常な人氣を捲き起し、今日の聲價を彼に與へた出世作の一つになつてゐる。『月形半平太』はその後活動と實演とで二度も觀てゐるが、未だに幾遍でも觀たく感じてゐる。――後年『大菩薩峠』の机龍之助で、違つた月形半平太を發見したが、あの四條橋畔の亂闘と、古寺の最後の場面とは、淺薄な芝居ファンたる名稱を敢て辭しないだけの魅力を私に持つてゐる。

2

幾年か過ぎた。

阪都浪花座の座長部屋である。彼は既に新國劇の座長となり、先生となつてゐる。そして對座してゐるのは、白面の中學生から新進の劇作家となつたばかりの私である。初對面ながら私の感慨は無量だつた。

『折角ながら滿員で、補助椅子まで出してゐる始末ですから』

彼はさう云ひながら大鏡の前に双肌脱ぎとなつて、しきりと刷毛を動かしてゐる。眼のあたり見る澤田正二郎は役者ばなれがしてゐて、それに何處か人なつこい所がある。役者と云へば紅白粉の女蕩しとでも考へられるが、彼は決してさうではない。軈て書生がお茶を運んで呉れる。

『これが自分の興行でしたら、何とか無理しても座席をおとりするのですが、先程も寫眞をとりに見えた新演藝の方をお斷りしたやうな譯なんです』

私は年少からの最氣役者たる彼のために、その大入と盛況とを祝つた。

『では、又どうぞ』

私は滿足してお互に旗先の浪花座の樂屋から辭し去つた。

3

大正十四年二月十九日、邦樂座の新國劇で招待された。演物は全部新作物ばかりで藤井眞澄氏『孤獨の底の日蓮』菊池寛氏『時の氏神』岡榮一郎氏『槍持定助』中村吉藏氏『無籍者』川村花菱氏『遊蕩兒助六』の五篇だつた。

初日の招彼日のこととて、私のすぐ前の席には中村吉藏氏、その左手に菊池寛氏、その他廊下で逢つた人々には、秋田雨雀、藤井眞澄、金子洋文、關口次郎、鈴木善太郎氏などだつた。がこの芝居は演物のせいか、日頃の澤田正二郎が光つてゐないやうに感じた。辛うじて『時の氏神』で彼のつくりが作者に似てゐたのや、『槍持定助』で旗本の彼が可笑しかつたのやらで、總じていつものやうな藝が見られなかつたのは殘念だつた。只『遊蕩兒助六』の助六で彼が嶄新の型を見せたのが痛快だつただけ。

4

昨年の正月二日、私はやはり邦樂座で『白野辨十郎』を見たのが、最近の印象として殘つてゐる。『白野辨十郎』は充分原作を生かしてゐるし、又『月形半平太』『大菩薩峠』の澤田正二郎以外の彼を出してゐる。恐らく彼の藝風はこの二つの直線上に進行して行くのかも知れない。

今度彼が大阪浪花座で眞山青果氏の『桃中軒雲右衛門』を上演する由だが、私は最近劇作から遠ざかつてゐて、彼の芝居を見る機會のないのを殘念に思つてゐる。以上スナップ式に時々の澤田正二郎君の印象を書きとり、そして彼の爲にこの一文を擱へることにする。（昭和二年五月十九日夜）

喜劇『うぬぼれ』一まく

人　野澤英一（新派俳優）
　　梅島昇（同）
　　その他二三の新派俳優、バーの客、藝者二三人
時―晩春の或夜更け
所―みなみの或酒場

（野澤が二三の友達の俳優連と卓子を圍み珈琲をすゝり乍らキャメロンを振つてゐる、そこへ或客や藝者二三人と共に梅島ドヤ〳〵と入つて來る洋酒の盃をあげてメートルをあげる）

梅島　（フト野澤のゐるのに氣付き）ヨウ君、久し振りだね、滿洲はどうだつた。

野澤　（ヒョイと見て）いやア駄目だつたよ、戰爭でね。

梅島　（野澤の卓子に寄つて來る）戰爭と云へば君は何か支那時局に就て某新聞に原稿を送つたさうだね、あんな硬い記事だと沒だよ。

野澤　放つといてくれ（少しムッとする）

梅島　オイ役者は役者らしいことを書き給へよ、大體役者が支那問題なんて生意氣だ、何だね、役者ッて結局好い芝居をする者が勝だね、例へば河合君だつて井上君だつて伊井君だつて、俺だつてね（と人差指を自分の鼻先へつきつける）生は其方だ！　これなと喰へッ！（急に立上る、梅島の横ッ面をなぐる）

野澤　（梅島バッタリ倒れる、俳優連は野澤を止める）

藝者　（一同）キャッ！　――幕――

道頓堀の灯に微笑む追憶

澤田正二郎

美しい店飾り、立ち並ぶ劇場の旗小旗、雜鬧の街に溶け込むレストランとの音樂、眞晝のやうに輝く灯――いつ來ても懷しい道頓堀である。

わけて私ども、新國劇の昔を顧みると、この街こそ、忘れがたい發祥の地である。東京の旗擧げ公演に散々の憂き目を見、食ふや食はずの籠城の果て、やつと嚙りついた京都南座の短期興行も相變らぬ大不漁、手も足も出なくなつた私達が、これを生死の關ヶ原に立て籠つたのはこの道頓堀辨天座であつた。

その當時の私どもは今思ふても慘めな姿であつた。恰度歐州大戰亂の餘波で、黃金の波が、この極東の島國にも未曾有の景氣で押しよせてきた時分、わけて商工業の中心地である大阪の景氣は紙幣の雨も降りさうな勢ひ、店員は儲けの餘德に潤ひ、サラリーマンは空前のボーナヌに微笑み人は皆富と太平の謳歌に醉ふてゐた、何の醉興ぞ、私ども一行だけは、朝夕その日の糧にも逐はれながら、朝十時から夜十一近くまで、休む間もなく稼ぎ通したのである。

其の時である。私は先づ、舞臺に立つて劍を振つた。この危險な成金時代、人は僥倖の夢のみを追うて、世は擧げて浮華の幻に漂ふ危い時世、これを觀た私の仕事は、飜つて民衆に眞劍の生活を慫慂することであつた。先づ我等を見よ、二六時中、汗にまみれ、脂によごれ、脛を剝ぎ、手を傷けて懸命の大立廻り。その懸命の努力の姿を觀衆席へ投げつけることである。二には、白刃の下、生死の境、夢も虛榮も僞りもない生命愛の刹那、その三昧の心境を藝術化によつて世人の心に植へつけることである。この逆に時世を刺戟する理想、この反動的効果を、私はひそかに信じて邁進した。

だが、幸運は容易に萠を現さない。毎日々々、座員は着のみ着のまゝで安下宿の南京米に餓えて慰し、樂屋の晝飯も素うどんが頂上の生活である。

終演後、人目を裝ふ人力車には乘つても、二三丁先の横町の暗にかゝると早速車を降り、角の一膳飯屋に飛びこんで外國米の盛飯とみそ汁で舌鼓をうつのであつた。夜の空を仰ぐと、あか〳〵と輝く茶屋の二階の灯影を洩れる嬌聲絃歌、羨みはしないが、若い胸に泌む寂さは制へても消えやうがない。天下茶屋の宿に歸る途々、瀟洒な郊外の住宅に、靑簾などした座敷から懷しく洩れる蓄音機の音、樂しさうな團欒のさまをかいま見ては、萍のやうなはかない己れの身に比べて、思はぬ愚痴に心が曇る弱い心をしかりながら、宿に歸つても樂しみもなく、冷たい蒲團にくるまると、舞臺の疲れで、前後もなく眠りに落ちるのが一日の極樂であるが、眼がさめると、もう九時、疲れに痛む身の節節をさすりながら、もう劇場へ急かねばならない。――

澤田正二郎の桃中軒雲右衛門

×

それから幾月、かうした苦闘の生活は、漸く小さい萠を現はした。そして拙い者共の舞臺は次第と大阪の觀衆に迎られ始めた私どもの懸命の力演と、劍の宣傳は、意想外の魅力をもつて觀客の魂を刺戟した。やがて、私どもの木戸口にも觀客の波が押し寄せてきた。かうして私ども新國劇は世に育つを得たのである。

×

それからもう十年。――今思へば、若い者の他愛もない苦勞話だが、生れ出るものゝ惱みは命懸けである。

×

艶めかしく輝く道頓堀の灯に、その頃の追憶を懷しむ心も、またその頃の苦闘の賜物である。

『桃中軒雲右衛門』私見

津村京村

劇作家としての眞山青果氏には、殆ど無條件に敬服して了つてゐる私だから、今更、その作品の批評めいた事を麗々しく述べ立てられたわけのものではないのだが、然し又、それ程に敬服してゐる私である爲めに　却つて何か言つて見たい心の動く事も許さるべきでは無いかと思ふ。

『桃中軒雲右衛門』も、勿論私が感心して見た芝居の一つである事は言ふまでもない。一體著名な實在の人間を作の題材として取扱ふといふ事は、それが如何にドラマチカルな物語を有して居るにしても、作する者に取つては可なり困難な仕事に違ひない。と言ふのが、例へばその人物の實傳といふものが嚴存する以上、それよりも餘りに惡く書きすぎてもいかず、同時によく書きすぎもしていけない。よく書きすぎていけないといふ事はない筈の樣ではあるが、然し、一方見物する人々の頭に事實といふものが記憶されてゐる爲めにそれ以上よく書けば、當然それがいゝ加減な嘘になる。あんな偉い人物ではなかつた――とか、あんな聖人ではなかつた――とか、さういふ否定が見物の頭の中に起つて來る。これが餘つ程その作品の力と興味を傷ける。惡く書きすぎていけない理由は別にこゝで言ふ必要も無いだらう。

『桃中軒雲右衛門』なぞも、この意味で、可なり書きにくい材料である。殊に私の知つてゐる範圍では、それ程戯曲的事件も無かつた樣に思はれてゐる。それが一とたび眞山氏の筆になつたものを見ると、實に立派な『戯曲(ドラマ)』となつて我れ我れの前に現はれてゐる。勿論外見的事件よりも、心の事件に依つてその劇的効果は高められてゐるのであるが、兎に角觀てゐて面白い。而も、心の事件を描いた作品の陷り易い忘屈さを出さないで、よく藝術的價値を保つてゐる。詰り大衆劇的條件を備へつゝ、尙充分藝術的價値を失はない作品――とでもいふべきものであらう。その意味に於ては、眞山氏の最も代表的な傑作とされてゐる『玄朴と長英』や『平將門』などよりも、より理想的なものであるかも知れない。

唯一つ私の氣附いた事は、この作の主人公である浪花節談りたる雲右衛門が、常に餘りに深く、餘りに深刻な、心の惱みを持ち過ぎてゐる人物に書かれてゐる嫌ひがありはしないかと思ふ事である。言ひ換へれば少し仰々しい感がしはしまいかと思ふのだ。尤もこの事は、必ずしもこの『桃中軒雲右衛門』ばかりに對して起つた疑議ではない眞山氏の作品全體が、殆ど一貫して私に氣附しめた唯一の疑議である。例へば『平將門』でも、或ひは『玄朴と長英』更に又『明君行狀記』『富岡先生』等、すべて、その主人公なる者の舞臺上に爲す一言一句、又一擧手一投足に、常に物々しい陰影を感ぜしめてゐる。尤もこれあるが爲めに、所謂眞山氏の戯曲がその演出に際して、大なる効果を納めてゐるのかも知れないが、然しそれが單に見物の心を釣る道具でしか無い場合は、必ずしも上々な作劇術とは言はれない。殊に浪花節語である『雲右衛門』にして、これが餘りに目立ち過ぎる事は、ともすると心ある見物に、いさゝか滑稽な氣持をさへ起させる結果になりはしまいかと思はれるのである。

更に私は、この一點が、わが敬愛する眞山青果氏の作劇上一つの大きなマンネリズムを造り出すであらう事を、秘かに危惧せずには居られないのである。

然し、さうした一點の疑議や、二三の小さな缺點はあるにしても、尙この『桃中軒雲右衛門』は、立派な藝術的大衆劇として、大きな存在價値がある。私は先達て市村座に澤田正二郎君が演出したこの芝居を見て、確かにさう思つたのである。聞く所によると、澤田君自身が、この材料を引ッさげて眞山氏にその劇化を依賴したものであるさうだが、澤田君も又賢明なる大衆の心理洞察者であると言はねばならない。それは勿論、藝術的効果から言つても。更に又興行的効果から言つても。――そして此賢明さが澤田君から失はれない限り『新國劇』の全盛は、まだ〳〵續いて行く事だらう。

浪花座の六月・新國劇役割一覽

桃中軒雲右衛門、國定忠次(澤田)倉田楚水、河田屋惣次(中井)支配人礫野一石、日光圓藏(野村)三味線彈松月(根岸)幇間甚宇、清水の嚴鐵(鬼頭)代議士今井章三、若者傳吉(南)新聞社長石田賢造、高山の定八(鳥居)弟子桃雲、藤藏子分三太(河井)伴泉太郎(丸茂)馬吉(小川)弟子雲太(竹田)稻田巳之吉、足利權三(菊岡)事務員秋葉、老爺吉右衛門(佐藤)書生塚本(戸石)弟子瀧右衛門、石井(吾妻)靜岡座主諸井、三ッ木の文藏(赤井)書生右田(島田)板割淺太郎(鈴木)事務員留岡東助、虎平(石山)茨木縣有志、石井杏次郎、兼松(正木)遣手おくら(玉澤)お酌(寺倉、松方)小間使お米(永島)平玉千鳥後におさだ(双葉)藝者利根次、娘およし(春野)藝者お力、女髮結おきん(山路)女房おつま、藤藏女房おれん(久松)

戯曲『桃中軒雲右衛門』評

安間確郎

傷ついた器。雲右衛門の生涯は、寔に、傷ついた陶器のそれであつた。侵した背徳行爲の爲に、藝道の中心地であり、自分の故郷でもある東京から、そして社會全般から蹴落されて、八年、漸く其の藝を磨き、過去の自分に對する非難の社會に、雄々しくも藝の偉大さを以て報ひようとして、再び東上して來たのであつたが、畢に、自分自らの中に纏る苦惱をどう消す事も出來ない。しかも、事成り、名上がつて、やつと、己れの社會的存在を凝視められるやうになつた頃には、最早、藝の衰退を意識せずには居られなかつた。

作者の意圖は此處にある。雲右衛門に藉りて、人生の苦惱寂寞、むしろ、虚無を語つて居のである。

さて、作者は、雲右衛門が九州に於ける八年間の精進から愈々、勇を鼓して東京に向つて來、汽車が次第に關東に近附くに隨つて追憶と共にうづき出した古疵の胸の傷みに堪へかねて、突然、靜岡に下車して姿を隱してしまつた——其處から筆を起こして居る。

一幕二幕は、其の悶絶の態と、それを克服して、東上を決するまでの心的過程、及び外的——過去と現在の環境を語る周圍の有樣を描いて居る。

舞臺技巧——人物の出し入れなどに就いては、私は語る前に、先づ頭を下けなければならない。作者の老腕には、それほどにも完璧な注意と好妙さがあるから。

第一幕に於ける、雲右衛門失踪による、頭取以下の焦慮と困惑の描出のうまさはどうだ。が、それ以上、第二幕は、讀

者をして、獰然と　雲右衛門の心境に重苦しく魅さしめ　巧みさがあるではないか。人は、虚名や矯榮を忘れて、赤裸の貧しい自分を振返つた時、初めて、泌々と過ぎ去つた往時の人々が懷かしまれるのである。雲右衛門が、其の昔、僅かに好意を享けた壽司屋の娘を呼びにやる氣持。兄との流しの述懷。それから『親父の體は傷だらけだぞ。お前の親父は傷だらけに生きて來たのだぞ。虚名や評判に惑はされて、おれを買被つてはならないぞ』と、久し振りに逢つた可愛い、息子に、心で泣き乍ら言ふ最後など、到底涙なしに讀まれない。度を得たセンチメンタリズムと言へる。

少しゝか出て居ないが、二幕目の倉田は特によく描けて居ると思ふ。

第三幕は、一年半後の東京の住居に於ける雲右衛門の焦慮と絶望に近い悲境をものして居る。藝の爲には『人を師匠も忘れて、總ゆるものを犧牲にして悔まない』(其の實は、强いて悔むまいとして來たのであるが)彼が、其の尊い自分の藝の次第に衰へて來たのを感ずる傷ましい氣持ちの現はれを舞臺に上せて居るのである。

◇

私は、以上、讃ふべき處を讃へて來たのであるが、此の戯曲が完全な、作者のものとして上々のものであると言ふには聊か不滿がある。少しく、それを述べて見よう。

先づ、一幕二幕に於いて、作者は何故に、今少し、過去の『疵』を明らかに、讀者(觀客)に語つて呉れないのか、と言ふ事である。

雲右衛門と言ふ人物が、かつて成した背徳行爲を、知つて居るからこそ、私達には、これでもいゝやうなものの、雲右衛門に就いて全く白紙である人々には、この戯曲だけでは其の行爲の眞相が摑めまい。友人倉田をして『あんた方は今八年ぶりに東京に、自分の罪悲の墳墓を見詰めに歸る人だぞ』『僕は雲右衛門君が藝術家だから、道德的罪悲を見遁されるものとは思はない』と言はし、官吏の留岡をして『貴樣は何だ白晝公然と東京の町を歩ける體か。不德漢め』『師匠に叛いた背德者、忘恩者め』と罵らして居るだけでは、はつきりとそれが說明されない。

此の背德行爲こそ、本戯曲の生命である處の、主人公雲右衛門の懊惱を生む原因であるのに、それが聊か、きつぱりと呑み込めない爲、惜むらくんば、これだけ描き盡されて居る雲右衛門の悲境が、胸先まで黑々と押し寄せて來乍ら、肺腑を侵さずに、脇下を通り拔けてしまひさうである。——雲右

衞門に就いて白紙である人々には。）

次は、三幕目に於けるお妻の心である。弟子のお力は『だつて先生のは……余んまりですもの』『そりや女ですもの……誰だつて……』『今日の新聞など見ると、誰だつて腹が立ちます』と言ひ、お妻自身も『では、取止めた話で、お迎への來るまでは歸りませんよ』と言つて居るのを想像すれば多分、お妻は、雲右衞門の浮氣(?)に不滿——嫉妬を懷いて居るやうであるのに、自分の病氣の重い事を言つて『あたしやね、あたしやね、いつまでも生きてゐられる體ぢやないよ』『そのあたしが、今のお前さんの意氣地のない體たらくを見て……行くところに行けるかよ　お前さんは、女でも——女房でも、藝のためにはみな食つて來た人ぢやないか。何だい、それに今頃……女房の三味に躓づいて、總身に汗を流すやうな男になつたのかい。これだけ言や澤山だらう。御免よ』と、斯うも、生一本に言つてしまつて居るのは、どうもちぐはぐである。作者に、餘りに、お妻の心の整理（表出的整理）がなさ過ぎはしなかつたか。だから、幕の終りに、夫と等しく苦しんで來たであらうお妻に對して、讀者はどう言ふ態度をとつていゝか判らない。際つて、追ひ掛けて行つてお妻に對して、讀者はどう言ふ態度をとつていゝか判らない隨つて、追ひ掛けて行つて、お妻を引きすえやうとする肝心の雲右衞門の心持ちに對しても、私達は、曖昧な、前幕からの隋性でする涙をしか、心に酌む事が出來ない。——物足りない感じである。（但し、これは、上演の場合には、俳優によつて、いく分は補はれるであらうが）病氣の上に、酒も飲んでは居るのであるが、それにしても、一幕二幕のお妻と、三幕の彼の女との間に、肯定し難いギャップを感ずるのも、何等かの説明——表出不足を語るものではなからうか。

◇

雲右衞門が實在の人物であり、まだ、其の面影さへ、人々の腦裡にある今日である爲、事實に側さなければならぬと言ふ、藝術創作上最も苦しい拘束の中に居て、しかも、これだけに描き出した作者に對して、私は餘りに無慙な評言を敗てしたやうである。だが、再讀、三思の上である。無禮の點は、ひたむきなる私の若さにあるものとして、お許しを願ひ度い。

——二七・五・二〇——

眞山青果氏の『桃中軒雲右衞門』その他

綿貫六助

一

クラク五月號所載　眞山氏作、三幕戲曲、『桃中軒雲右衞門』は、雲右衞門が生前、總髮、美髯、二ッ巴の五つ紋に、揮身の氣魂で、ほとばしらした豪壯な音聲に絡む哀感が、脈脈として流れ廻つてゐる。その藝術的な芳香に於て、雲右衞門は卽作者自身である。その面白さと藝術的價値を考へる前に、私の雲右衞門に對する想ひ出を、鳥渡、書いて見よう。

二

明治四十年春、仙臺榴ケ岡櫻花滿開の頃の事である。さう云へば、この戲曲も、同年春の大飛躍當時の雲に筆を起してゐる。

その前年、私は同中隊の赤城千代司君—當時中尉、現に佐官で東京あたりにうろ附いてゐる筈—と二人で兵隊を連れて仙臺から二里東の蒲生と云ふ漁村の方へ行軍したとき、ある腰掛茶屋の主人榮五郎—若い妾に店商ひをさせ、氣さくで魁偉な親爺—と不圖知己になり、若い妾との間の三角關係も幾分か匂つて、その親爺と非常に深い仲になつたものだ。私は嚴肅な軍隊に勤務する身でありながら、榮五郎と彼の妾との夢ばかりみて、土曜から日曜に掛けて、いつも、俥で徒步で宙を駈ける如く、蒲生の漁村に往復し、浸たつてゐた。大正十二年に出した短篇集の中の『小松林』はこのゴルキー作マルワの如き妾がゐた漁村から生れ出でたものだ。

荒磯海に戀心私は、想ひ出すと今でも身內が、たまらないほどな憧憬と回顧を喚起すのである。

日曜に遇ふだけでは、その間が待ち遠でまち遠しく寂しく物が手につかない。で、私は下宿の二階北山正念寺――に榮五郎を時々呼び寄せることにした。あるときは、二人で三晩で二斗の酒―桑折から取寄せた―をあらかた干したこともある。

榮五郎の炭の空俵幾つかに、まだピク〳〵する雜魚を容れたのを背負つてくる姿や、二人で飲み明す眞猫や、青葉城天主臺から仙臺を見おろすやうな事も度重なればのきがくる。そこで、大に趣向を換えて、ひとつ面白い事をやらうと云ふことになつた。勿論、二人は遊廓にも飽々してゐたのであるから。

その趣向が行なはれたのが、今云ふ四十年の櫻花の眞つ盛りで、仙臺の森林街（フォレスティー）は滿開の櫻花に埋まつてゐた。

私は洋風なカツラに附髯でシルクハット、橋本洋品店のサザナミローブをだらりと着て、小意氣な哲人（フィロソファー）となり、榮五郎は背廣に山高で、哲學者の保護者（ペトロン）と云つた格で、藝妓四人に女將女中等を擁し、東一番丁から、市街を東に縱貫して、釋迦堂の櫻觀と出掛けたのだ。

午後二時頃、人の出盛り、日曜、私共は早朝からグタ〳〵に醉つてゐた。女中さん達にまで單衣物などを買つてやつたりしたのだつた。

市とは云つても地方である。セマイ、私共の行列は道々大喝采を博した。と同時に、誰だ〳〵？と、みな眼を注いだ。

保護者榮五郎は俥の上で踊つてゐるし、私は、豪然として櫻花に陶醉してゐる群集を睥睨してゐた。

櫻花かけに盛りあがり渦卷き溢れてゐる群集のなかを俥夫の掛聲勇ましく、縱橫に乘り廻してから、さて、一番にぎやからしい料理屋に繰込みとなつた話が大部逃れたやうだが、その隣室が、桃中軒の豪遊眞ツサイ中だつたのだ。

豪傑ウワ塗りで寂しがりやの『雲』は、櫻に面する二階から、お菓子のやうなものを幾人かに投げさせて、海波の如く卷き返す群集をさびし氣に凝つと眺めてゐた。

苦勞の仕方から云つても、人間としても、士官學校出の一中尉などが『雲』の出鱈目な豪勢振の前には、月にスツポンも唯ならずだつた。

顏を知られてゐる衞戍地内で、かう云ふ不良性を發揮した大膽さ莫迦氣さ、したが、その地が、眞山氏の鄕里の方の仙臺である。豪遊を競爭したのが、桃中軒だ。そして、あの戲曲にある春四月だ。妙な因緣なものだ。

三

雲右衞門は上州ださうである。生れ落ちるとから苦勞し拔いた。初めて私が雲右衞門を聽いたのは、東京の大きな劇場である。九州地方の師團あたりから贈られた金ピカの幕を張つて、疵だらけな靈魂を、惜氣もなく、壯嚴な聲と、哀感を唆るリズムに、ホトバしらせた。

武士道鼓吹と云つた俗的淺薄な看板をかけて、あの勢力で荒れ狂つたのであるが、そんな事は今、また、彼の獨特他の追從を容さぬ藝境は、永く抹殺することはできない。

のみならず、今度の眞山氏の藝術に因つて、雲右衞門のあの耳に訴へる刹那の藝術が劇化されたと觀ることができる。否、青山氏の藝術的手腕が『雲』のあの刹那の豪壯、寂寥、悲哀、意力の滲む妙調を、巧に展開させて、立派な劇としたのである。

で、この劇には、かなりに色彩濃厚な詩（ポエム）があり、大きな象徵的魅力がある

讀んで面白く、舞臺に掛けて成功するのは當然な事である

四

私は、最初、浪花節を卑下してゐたが、雲右衞門を聽いてから、私自身の狹い考を恥ぢた。よく理解しないと卑下したり、排斥したりするものだが、藝術家には、これは最禁物だと思ふ。

他言に亘るが、プロにもブルにも、かうした狹隘な視野しかもつてゐないものがあるとすれば、藝術家の第一資格に於て恥づべき事ではあるまいか。

私は、この戲曲を讀んでゐるうちに、泉鏡花氏の『ラントー場の天使』を想出した。双方から藝術家の氣魄を感じさせられて、卒然襟を正したからだ。双方共、回顧的な哀感を蹂躙してゐる。双方共、酒にかくれて、靜に全身の血で泣いてゐる。

鏡花氏のは、舊戀を藝の意氣で抑えつける、傳法的な美があつて、幻想が巧に絡んでゐる。

青果氏のは、手疵を靈魂に負ひつゝ苦鬪八年、度び、その當時の富士を車窓に望む、と云ふ偉きな哀感を、聖淨なところまで引きあげてゐるが、肉身の累を絡めて、ガツシリと現實（リアル）の上に突ツ立つてゐる。

先日、川崎長大郎氏が時事紙上で要求してゐた、象徵的―東洋的、そして、靈の高調は、この戲曲で幾分充たされるであらう。

五

俗吏などをにぎやかに出して、主人公に、藝術的な濃厚味を與へたのも佳い。さうして、最後には、藝と云ふものゝ奥底まで踏込んで、大きな皮肉（ユーモア）を藝術にたつさはるものに與へてゐる。

『平將門』を陽とすれば、『雲右衞門』は陰である。同じく青果氏の特性が一脈通つてゐながら、前者は破裂し、後者は抑止した。

何れも成功である。さて、何が氏をかく成功させるのか。抑へるにしても、爆發するにしても、氏の熱情が、その成功をかち得たものであらう。

冷嚴が人間を動かすのは、熱意が何處かに對照を爲してゐるときに限る。

人間の血はあたゝかなものである。

河合武雄の印象

いつであつたか、ある宴遊會の泥醉の藝妓をやつたときの巧妙さを憶えてゐる。私は、あの年配藝妓がヘゞレケに醉つて、『ヤッテクレー』と卷舌半混りでこなした科白を、眞似してみて微笑しずにはゐられない。

その後、別な藝妓役を四五度觀た。藝妓は河合のお手のものであらう。あの、鼻に掛つた聲が、白で浮いた傳法肌を引き立てる。世話女房の時よりぐとつ結構で印象に殘る。

明るいうちに、美しい悲哀の漾ふのが、河合の藝境だと想ふ。

だから、熊五郎の女房お春は、出世してからの後半がぐッと引立つたし、藝妓小萬は初めが殊によかつた。

何派が如何だ、と云つた、至極、概念的な粗雜極まることとよく謂ふやうだが、私しは、その人、その藝、自體だと思ふ。

温かな血の通つてゐる人間でさへ、佳いものになれば冷血的な作物にも相當感服するものである。

何派であらうと、伊井河合位な藝になればもう、どう云ふ境地をも拓いてゆけると思ふ。

文樂座所感

故越路太夫は、その前、東京できいたが、大阪文樂座ではあの日露出征の往復、負傷後送、及び再出征のみぎり、幾度か、私は、文樂へ駈けつけた。

多情な私が、その方に夢中になつて、滯在中惡所通ひをしなかつたのも、藝が人間を淨化した一例とも見られる。

越路太夫が暮れに東京に來ると、私は、逃さずきゝに行つた。

あの高調で幅がありながら、非常に澁い巧味のある天下一品は、私をどれほど陶醉境に彷徨させたか知れない。

ある暮れに、どうしても、私は、越路に面會したくなつた紹介を求めるッテはなかつた。私は、酒の威勢で樂屋で會はうと思つた。で幾夜か坪で醉つてはやめ醉つては止めした揚句、たうとう、ある晩のハネと同時に醉歩蹣跚として、舞臺から樂屋へ入らうとした。が、男衆に喰ひとめられてしまつた。それでも、常子太夫が出てきて、泊つてゐる龍名館を敎へ、そこで面會の出來るやうに話してくれた。

私は、旅館で、越路（貴田常次郎氏）に會つて、ゆつくりと義太夫の話をきいた。

〈現れ出でたる武智光秀〉で、大歌舞伎座一ぱいになつたあの力みかたが、旅館で會つてみると、萎びたやうなお爺さんで、大きく重ねた座布團の上に、チョコンと坐り、恰度、

島崎藤村氏の容子そのまゝの、至極謙遜な商人風であつた。

かう云ふ人が、シンウチで、文樂の人形芝居をやつたのであるから、隨分よかつた。

十年ほど前に、米國で盛にやつてゐた、ヂリーペリーのマリオネットなどからみると、日本の文樂人形芝居は、遙かに同じく象徴的であるにしても、現實味豐富なもので、たしかに立派な藝術である。

まだよく憶えてゐるのは、津太夫の澁味、源太夫の力、大隅太夫の張り　などで、何れも、その特色を鮮やかにもつてゐる尊い藝術境であつた。それに、文五郎、榮三などの腕ぞろいで、何とも云はれずよかつた。

私は、文樂では、その當時、一層、藝と云ふものゝ味を感じさせられたものだ。と云ふのが、あの人形で、あの人形に人間の靈を吹き込んで活躍させ、忽ちに、人をその藝術境に息も吐かせず曳き込むところが、大したものだと思ふ。

私は幼少の頃、母から、よく文樂の話をきいた。太夫と三味線と人形使ひの腹帶が、あるカンヂンな刹那に、みな一度期に切れてしまつたと云ふのであつた。

今考へてみると、なるほどさうだらうと思ふ。魂を容れて死物を活かして躍らせるのであるから、その位な力は底に入つてゐたにちがひない。

末法の世は、藝がすたれて、議論や喧嘩が御多分になるのか、さうだとすれば慨かはしい事だ。

そのなかに、文樂がその境地を發揮してゆくのは、とりもなほさず是非藝の權威であらう。

ヂリペリーのマリオネットに就ては、後に、少し書かうかとも思ふ。

今度は、思ひ出すまゝ散漫に書きつけた。あまり固苦しい論ばかりでもと思つて――完――

惡の華　吉井勇著

そのなかのいづれを君は選らむ舞臺のうへの五板羽子板
たてまつる夢のなかなる夢ひとつ勸進帳と名づけるかな
肌を脫ぎ腕の刺青見するとき附の拍子木高く鳴るとき
松王の眉かたかたとうごくとき人形使ひもともに泣くらむ
曾根崎の廓の夜の星まつりやうやく更けて幕となりぬる

歌舞伎の世界を愛する人のために編まれた歌集である。優しい詩情をもつて舞臺にみいる人の幻想を美しく色彩つてゐる。愛誦してみたい歌が數百首も納められた匣畫である。裝禎美麗

定價一圓八十錢（東京京橋區木挽町三ノ二〇　歌舞座出版部發行）

澤田に就いての感想

林　鷗南

澤田の現在歩んでゐる方向は兎に角として、俳優としての素質に於ては、彼は寧ろ惠まれてゐるものの一人であると思ひます。識者の間には定說となつて居るやうでありますが、彼の素質が最も正しく、自由に、且つ藝術的に發揮された最高頂は、例の島村抱月氏の藝術座の私演でやつた『闇の力』の主人公ニキタであつたことは確かです。私は（譯者であつた關係上）其時色々相談にも預かり、其の稽古にも、夜おそくまで立ちあひゝしたが、彼と須磨子との藝道に對する熱心には全く感心を禁じ得なかつた程です。徹宵涙の出るやうな稽古を可なり長くつゞけました。從つて其の出來ばえは、公平に云つて、素晴らしいものでした。若しあの劇が公開を認められ、藝術座があの方向に猛進したならば、抱月氏の爲にも須磨子の爲にも、更に澤田の爲にも、ずつと違つた道が開けた事と思はれて、殘念でなりません。その後澤田は獨立して、思ふまゝに活躍して今日に至つてゐますが、惜しい事にはあれ程いゝ素質を持ち乍ら、彼の藝を本當に正しく好い方向に導いてゆく、いゝ指導者が無い爲に、獨りよがりや、穿き違ひが可なり多く、如何にも目にあまる事がよくあります。彼が雲右衛門といふものに興味をもつてゐる點もうなづかれます。それに、どうも舞臺を獨りで背負つて了はうといふ厄介な癖があります。併し、若し彼が、いゝ指導者を得て、いゝ脚本を捕へ、本當に藝術本位の劇に立ち戻つて精進したならば、まだ〳〵其の方面に於て可なりな成功が期待されないことはありません。これ迄にも大なる穿き違ひや失敗と共に、又他の追從をゆるさないやうな當り藝も可なり多く持つて居ります。すべてを燒き盡すやうなその燃えるが如き覇氣が、彼の爲には利にも弊にもなつてゐます要は、その力をじつと内に收めて藝を内面的に深く掘り下げてゆく事です

兎に角、演劇を民衆化した彼の力は大したものですそれは認めなくてはなりません。それに、人間として、生一本な、隨分好い所をもつてゐます。私はその點で、彼が好きであり、彼れの歩みつゝある道に對しては、いつも興味を持つて居るのです。

澤田の努力

清水三重三

門閥と情弊を打破して、獨立獨歩、自力を以て正々堂々現在の地歩を築き上げた不斷の努力は、私等も大いに學ぶべき事が多いと思ふ。

震災直後の東京市内で、ワイシャツにヘルメット帽で、白布に『新國劇』の文字を筆書した旗を肩にした澤田氏、燒跡のトタン屋臺に、二三の團員とともにするとんを喰べて居た正二郎氏の姿が、いつも私の目先にチラついて居る私自身も其時は同じく旗を立てて家族を探し歩るいた時だつた。

×

私は澤田氏とは交遊がないから、内部のことは知らないが、外部から見て居て、同氏の一言一行は、いつも私の心の良き刺戟となつて居る。

固陋な劇界の先人達へ不正な媚を呈す事なく、大衆を味方として、大衆の味方となつて、堂々の陣を張り通した氏の意氣に感ずるとともに、氏でなければ行り通せなかつた事ではあらうが、それをまた行り通させた劇界を羨やましく思ふ。

×

轉じて、私等の美術界（殊に彫刻界）はを見るときは……悲しいかな、心暗となる。

今後の澤田氏には、ます〳〵劇界の弊風を改革して愈々大民衆の劇界として頂き度い事を希望とする。

×

澤田氏の藝術に就いてはあらためて機を見て言はして頂く事にするが、且つ有樂座の美術劇場以來、氏の劇は好き見て居る。

姥谷生

先月のある晩、宗右衛門町の或る酒亭に井上正夫氏より招かれて私は親しく歡談する好機を得ました。そして少しも御洒のいけない井上氏と私等の話がいつか新劇の不振について多く語られて行つたのも無理からぬことです。

今、こゝに私は井上氏より「教えられた言葉」の記憶を追補して眞面目な「漫語」としてみたく思ひます。

井上氏は語る

まづ井上氏は美味しい御馳走へ箸をつける前に

『丁度、私の芝居はこの美味しい御馳走を食べたことのない人に食べさせてゐるやうなものだ。その人は美味しいとは思つてくれない却つて食痛させてゐるやうなものだ』

と語られました。

さうです。「その美味しい御馳走」は愚かな大衆にとつて、演劇が藝術としてもたなければならない「文學」に他ならないので、彼等にとつて「文學」は美味しい御馳走ではないのです。さうした立派な膳立は「時たまの御馳走」であつていゝのです。彼等は「遠慮のいらない食卓」を好みます。

つねに衆愚は「良い芝居」がわからなく「面白くない」のです。そして「面白い」ことには「悪い芝居」がわかりやすく悦ばれるのです。

その「良い」とか「悪い」とかいふのは「批評する」ことの出來る偉い人達の言葉なのです。そして「面白い」とか「面白くない」といふのは、美味しい御馳走よりもどぶ酒で「醉ふ」人の言葉といつて好いのです。

『私の芝居を見てゐると、肩が凝るやうに思はれるのだ。何か息苦しく壓倒されるやうな感じを受けるらしい。』

たしかに井上氏が自分の科白を顧慮されてゐるやうに、あの懸命な科白には息もつまりさうな壓迫と肩でも凝りさうな緊張を感じます。角力を見てゐるやうな「面白さ」ではないのです。ある嚴粛といつた感じにちかい或物に打たれるのです。これが「眞實のものだ」と眞正面からぶつ突けられるやうな感じをうけます。

それに就てビヨルソンだつたと思ひますが「女性は眞理に耐え切れないものだ」といふ言葉があります。これは女性の無知を比喩したのですが、一般觀衆を愚かな無自覺なる者として「觀衆は眞實に耐えられないのだ」と言へます。

井上氏の舞臺からはこの眞實なるものが悲壯に、ある時は息苦しく觀衆にぶつかけます。だから彼等には「面白い」と思はれないのです。それは「平將門」のやうに「良い芝居」でも面白くなく「悪い芝居」のやうに思ふのです。

悲劇に於ける淨化作用が觀衆にとつて「甘く泣かされてみたい」ものであるとしたら、井上氏の科白はその餘裕を與へない或物がある。のだと私は思ひます。わるくすると井上氏が觀衆によつて慰められてみたいといふやうな主客轉倒の觀があります。

それほど、井上氏は凡てに眞劍な人なのです。

『ある俳優は自分ひとりを生かすために芝居をしてゐる。しかし私は自分自身のみを飾り生かすために芝居をしたくない。私は恥じることのない立派な演劇の中に私を見出せば滿足である。』

井上氏は俳優が藝術家として持たなければならない矜持と演技の獨自性を知つてゐられます。氏は妥協することが出來ないのです。つねに戰つてゐます。その歩む途は荊の王道なのです。懐疑、懐惱

焦慮の中に氏はいつも苦しみながらも、不斷の精進と努力をもつて力のつゞく限り戰つてゐます。

『今、私は苦しんでゐる。しかし私はその苦しみの中から眞實のものが生まれると確信してゐるのだ私は苦しむことはいゝことだと思つてゐる。』

デコーゼといふ人は「各劇場を亡ぼせ」と言ひました。今、私は「各俳優は赤裸になれ」と叫びたいのです。その時から「明日の演劇」が眞實に甦生するのだと信じます

とにかく井上氏は眞面白な俳優だと私は思ひました。藝術的良心のない俳優といふよりも、廣く劇界にあつて珍らしく眞劍な熱のある人だと思ひました。

きつと、井上氏は今日に亡びても明日にはきつと救はれる俳優だと私は思つてゐます。

井上氏よ！ゲエテも言ひましたね『努力する者は救はれる』と。

亡びゆく役者

それから四五日ほどして、井上氏は堂ビルの清交社の席上で『私は亡びゆく役者である』と冒頭して一場の講演を試みたと大毎紙上で私は讀みました。そして當日の聽衆を感泣させて『あれは役者ぢやねえ』と言はしめたさうです。

井上氏は澤田正二郎氏の今日と自分を比較し、謙遜に自己の微力を嘆いたさうですが、私は亡びゆく役者だとは考へられません。

こゝに不遜にも私が兩氏の演劇に就て批評することは何うかと思はれますが、額田六福氏の「苦悶する澤田」を讀んでも首肯することが出來ます。澤田氏は「今日の演劇」に生きる人であつて、井上氏は「明日の演劇」戰つてゐる人だと思ひます。

こんど特に澤田氏より本誌のために寄せられた「道頓堀の灯に微笑む」の一文は「今日の演劇」の勝利にあげられた凱歌に他ならないのです。先月の井上氏の「東京土産平將門」は「明日の演劇」のための宣言だと言へます。

「今日」にのみ生きる者には「明日」といふ理想がない、澤田氏は「明日」となつた「今の日演劇」に苦悶してゐるのです。井上氏は今日に不遇であつても「明日の演劇」の理想のために戰つてゐるのです

井上氏は自分を朝汐に、澤田氏を大錦になぞらへて、その昔の角界と劇界の一敗地にまみれた姿を想像しました。

それに就て、過日、鈴木善太郎氏より惠與に預つた近著『愛の劇場』の中に「二つの性格」と題して、こんな意味のことを書かれてありました。

澤田氏はドン・キホーテ型であつて、井上氏はハムレット型の人である。日蓮は力の人である。しかし親鸞は尚一層奥床しい。

こゝで演劇の本質と使命の上から己れが優れてゐるのかといふことになります。

言ふまでもなく今日にのみ耽溺してはいけないのです。また明日の理想のみに坐折しては駄目だと思ひます。

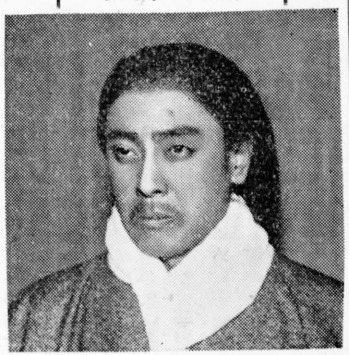
新國劇は「悪い芝居」でも「面白く」觀せてくれます。井上一座は「良い芝居」をするが「面白くない」と觀衆は言ひます。

それで今日は明日のための「今日」であり、明日は今日のための「明日」であればいゝのです。勿論大衆の自覺を俟つは言ふまでもありませんが、「良い芝居」を「面白い」と觀せる爲には俳優や演劇當事者がせなければならない務めだと思います。この兩者の特殊と普遍とが論理的に辨證されることによつて、良い芝居が面白く、製産的に大劇場の成立がなされて演劇が發展するものと信じます。

最後に「亡びゆく役者」はせなければならない努力をはらはない者のみが亡びて行くのです。そして自滅して行くのです。

澤田正二郎に對する
印象・感想・希望

順序不同



澤田正二郎の『桃中軒雲右衛門』

藤井眞澄

彼れの藝の中にはまだ發顯すべき多くのものが伏在して居ると思ふ。また彼れは舞臺監督としても新しい大衆劇の建設に向つて振ふべき多くの力を有つて居ると思ふ。それにつけても彼れの劇團にはもつと異つた多くの演技者を入れなくてはなるまい。

矢野橋村

役者としての家筋の通つた役者の所謂御家藝から受ける感じとは違つた、澤田氏其人の天然の持ち味に一種の力を感じさす人だと思ふて見て居ります。それが澤田氏に對する印象であり感想であります別に希望としては考へて居りませんが、澤田氏其人の將來に於ける希望は澤田氏自身に持つて居られる事だと思ふて居りますから只私は見物の一人として只漫然と面白い芝居を見せて戴きたい。面白いと云ふだけでは變な言葉でありますが。

山崎紫紅

澤田が始めて新國劇を組織して一座を率ゐて東京へ來たとき、その明治座の興行はかたなしの不成蹟であつた。松竹の大谷氏は眉を顰めてゐたが私は二の替りに足がふえたのを見て、來年は必ずよいと豫言した。而してそれが適中したのを見て心ひそかに會心の笑を洩らした、今まで澤田の芝居を見るとその事が思ひ出されてならぬ。

水田水圃

御恥しい事ですが私は未だ澤田正二郎氏の藝術に接した事が無いので、氏の藝術を評する資格がありません。他日その資格が出來上つてから御返事する事に致します。

長谷川伸

澤田正二郎氏の舞臺をみてゐると思ひもかけない事を思出す。たとへば、それは名もない——といつては失禮だが、とにかく、餘り知られない——俳優が、いゝしどころをもつ役を振られてゐる事、これです。澤田の芝居はこゝから發してゐるのだと思ふ、何も彼も。澤田の扮裝をうまいとは思はない。尠くとも幸四郎井上、山本嘉一、それ以上だとは思はないであるのにガラリと變はつて見らるのが偉だ。澤田の芝居はこゝに强味をもつてゐるのだと思ふ。一座全體としても同樣である。

澤田が「面白くて藝術」の芝居に進み進む事を信じて疑はない。「藝術だが退屈」な芝居には進まぬ事をも信じる。

織田一磨

澤正の藝は——藝術なんぞと硬い言葉はやめた方がいゝ——生きてゐますね。言葉の端々にも生きてゐるといふ感じが强く思はれます。私はこの生きてゐる藝が一番好きです。立派な藝をもつてゐても死んでゐては何にもなりません。澤正は粗野かも知れません。洗練されてゐないかも知れませんが、切れば血の出るような生きた藝を見せて呉れます。此點私は彼を好んでゐます。

水守龜之助

澤田君は小生年來のヒイキ役者の一人に御座候。一度位は盃を交したことのある仲ですが、舞臺の上の痛快さは勿論、唯會つてゐても爽快な感じがいたし候。彼が劍劇のみの俳優でなく立派な藝術品を月々のやうに舞臺上に製作し居る事は吾が事々しくいふ迄もなき事と存じ候。彼未だ年若く精力絶倫なり。團十郎のやうな名優になつてほしきものに候。

宮地嘉六

澤田君の舞臺はあまり澤山は見てゐません。二ッ三ッ見てゐるきりです。柄はどこか延若に似てゐると最初からさう思ひました。器用で何でもやつてのけるその舞臺度胸はえらいと思ふ。手薄と云ふ感じはするがひとりであれだけの演技を自得した點は凡才でない證據である。右單なるお答へまで。

村松梢風

四月市村座の「桃中軒雲右衛門」を見た感想を「騷人」六月號に書きましたから、改めて申しませんが、とにかく近來見た中で久し振りの面白い劇でした。先日も御地の酒井榮藏氏に其の話を致した處酒井氏が市村座の狂言を見遁して殘念だと云はれましたが、今度御地浪花座で上演されるとのことで喜ばれる人が多いでせう

河野通勢

澤田正二郎氏は延若に似た所があります仲々藝は達者だと思ひます。持に劍劇はやはり一番面白く見られます、斯ふ云ふ方では、何等かの型を後世にも殘こし得る人だと思ひます。それから何處迄も自分の仕事をやり拔いて行く事に感心します。民衆の興味を一身に集めて、あれだけの仕事をして行く人は當世では實に唯一の人だと思ひます。藝の熱心なのを買ひます、あれが失はれない限切り澤正の生命は續くものと思はれます。

千葉龜雄

長—うまい、明るい華やかだ、力がある熱がある。ぐんぐん外から押しつけて來る力がある、澤田が井上に勝る點。澤田に菊五郎を連想せしめる。(或る點まで)菊には、もつと複雜性があるから。

短—役によつては明る過ぎる。單調であり、神經質と憂鬱性が乏しい。内からしみ出る悲劇的性格が薄い。

澤田が井上におとる點。井上に吉右衛門を連想せしめる點。

麻生久

澤田君の芝居を私は五六年前に一度淺草で見ました。その時には澤田君が勞働者になつた時でした。併しその時には何となく役者らしい勞働者でした。脚本の筋も餘りよくなかつたやうでした。それから最近になつて又一度澤田君を見ました舊劇ものでしたが、今度は、餘り役者らしくない澤田君でした。私は澤田君の芝居がだん〳〵眞ものになつて來たのを感じて見ほれました。も一といきすれば、そしてもつと人間をほんとに感得すれば澤田君の藝は獨歩となると思ひます。同君の自重を祈ります。

黑田重太郎

佛蘭西の美術批評家が屢々使ふ言葉にエスプリモンダンと云ふのがあります。「世俗に通ずる精神」と云ふのか、「世人をして感ぜしめる精神」と云ふのか、一寸適當な譯語が見當りませんが、兎に角チシアン、リュバンスやワトオなぞは、專門の藝術家をして感ぜしめる絶倫の技倆を具へてゐると共に、一面このエスプリモンダンがあるために專門家以外の所謂大衆にも受入れられる素質があるのです。澤田氏の藝術にもこのエスプリモンダンを充分認める事が出來ます。俳優としてこれを具へてゐる事は、その藝術本來の約束上極めて喜ぶ可き事であり、そしてこれが澤田氏今日の成功の大きな理由を成してゐると思ひます。私は同氏の劇壇に於けるデビュー時代を見て失敬してこれはいゝ役者だなと思ひましたが、いま考へるとこのエスプリモンダンに私も恐らく打たれたものと見へます。

高畠素之

舞臺の澤田君は新國劇以前から好きでした。地震以後二三度お目にかゝつて益々好きになりました。明るい人です。男性的な、荒けづりのやうでゐて、而もドコトなく一沫のデリカシーを持つた、英雄肌ではあるが近代味を湛はせた人、舞臺をヌキにして考へても。私の最も好きな性格の持主です。物事の急所をつかむに妙を得た機轉的聰明さの生きてゐるところも大いに宜しい。苦しい體驗も十分に有つてゐる人だから、成功しても良い氣になるやうな人でない。血の出るやうな努力精進は、最近の雲右衛門にもにぢみ出てゐる。國定忠次なども見るたんびにサビが出て來るところは なれた物でも決して良い加減にやつてのけない證據だあのやうな大世帶の一座を抱へて、切り廻しがなか〳〵尋常でないとは思ふが、

世帶のために藝を荒ませるやうな俗人でない。彼れがこのやうに藝道の精神を忘らぬ限りは、彼れの貫錄と光明は太陽の如く不動であると信じます。

小酒井不木

澤田氏の藝はかけちがつて一度も拜見したことがありませんが、色々の記事を通じて、私はこの熱を愛するものであると同時に、その熱によつて新らしい道をきり開いて行かれることを信じ且つ希望します。

小島德彌

藝術座時代の澤田氏は一度位觀たことがあるが、はつきり印象に殘つてゐない。その後、京都の花柳界で澤正の關西に於ける素晴しい人氣を知つて驚いたが、やがて、その人氣は東都に移つて、忽ち天下の澤正になつた。澤正が名を得たのは劍を振廻はした爲めであるやうに思はれてゐるが、私などは、所謂新派と新劇との中間に立つて、この兩者をうまく擅梅して行つた爲めであるやうに思ふ。それに、上演脚本を選定するに、その眼のつけどころが宜かつた。隱退との噂も聞くが、もつと〳〵舞臺に立つて貰ひたい。人々は未だ澤正に飽きてゐない。

田中善之助

芝居はかなり好きな方の私ですが實の處澤田正二郎は妙な廻り合せになつて未だ一度も觀て居ないのです是れは吾れ乍ら不思議です。先月も春陽會の爲め東上中の列車で青果氏の雲右衛門を讀むで是非澤田一派の上演を見度く思つて居ましたが多忙の爲めまた見る事が出來ませんでした。從て同優に對し御期待に添ふ樣な御返事が出來ず、甚だ遺憾に思つて居ります。今度浪花座上演には是非拜見に出るつもりです。

川村花菱

澤田君は大好きな友達です。私は君の初臺舞——早稻田大學の餘興で、桐一葉をやつた時、女形の着つけの下へ石川伊豆守の鎧を着て男女二役を大隈邸でやつた時から、藝術座時代にも立派な座長格の人だと信じて居ました。君に對しての希望はありません。あの人の生み出すものを、私は只よろこんで見て居度いと思ひます。

井手蕉雨

澤正全盛の噂を聞くこと久しけれど自分としては曾て松井須磨子のサロメにヨカナアンを演じた澤田氏を帝劇に見た以來は名古屋の末廣座で大ほさつ峠の机某に扮したのを一度見た丈けだから其後のことは知らない、但し後日クラク誌上で眞山氏の「桃中軒雲右衛門」を讀み之れを澤田氏が演ずると聞いて定めし新味ある演出をするだらうと思つた、得意に乘じて得意がらずどこまでも研究的態度を持して漸進を期して貰ひ度いと思ふ。

小林愛雄

私は久しく澤正さんの技藝を見ませんから現時の彼がいかに進展してゐるかを知りません。が數年前に見た時の彼は、聲と動とに獨特のものがある。と思ひました。透明な音調と生々の動作とは彼をし

て今日あちしめた大きな基礎であつたらうと思ひます。

甲賀三郎

澤田正二郎の印象、感想と希望

私が初めて澤田正二郎氏の演技に接したのは、確か藝術座の二回興行モンナ、ヴンナ上演の時だと思ひますが、古い事なので同氏の配役がプリンチバルレだつたか、それともギドー(?)だつたか忘れて終ひましたが、兎に角うまいと云ふ印象を受けた事だけは覺えてゐます。澤田氏は間もなく藝術座を脱退して、一座を引連れて新國劇を銘打つて地方巡業に出てそれ〻非常な成功を收めた事を聞き、蔭ながら喜んでゐますが、つい見物する機會がなく、漸く大正七八年頃和歌山市でその機會を得ましたが、その時の出物は恐ろしく大時代のもので、ピストルを射つたり、短刀を閃めかして斬込んだり、藝者が活躍したり、新派と少しも選ぶ所がなかつたので、落膽して終ひ、新國劇は再び見ぬ事にしました。所が最近と云つても大分になりますが、關口次郎氏作の生活の河を見て、作も傑れてゐるのでせうが、澤田氏の演出にすつかり感心して好きになりました。あの男性的な顔と莊重なセリフですつかり大衆を魅了して居られるやうですから、今後は大衆に深みのある作品を馴染せるやうに努力して頂きたいと思ひます。

畑耕一

澤田氏は第二の川上音次郎のやうな人かと思はれます。時代を賢明に見やうとしてゐます。しかし川上よりも策士氣分がすくなくて、俳優氣分の旺溢してゐることは頼もしい點です。

佐々木信綱

一座によい人を養生して、よりよきものを見せてほしいと思ひます。

仲木貞一

意志の非常に强い人物で、非常に聰明な男と思ふ。

會つてゐると非常に明るく、引つけられる所あり。これ見物をその氣持ちに包むなり。

餘りに利巧過ぎぬやうにありたき事を望む。

福田正夫

颯爽たる澤田氏を想像しますと、たしかに愉快です。が此がその大當りだけでなしに、より充實した新しい劇への躍進を望みたく思ひます。氏の才能の廣く大きいところに、潑溂たる新精神への發出を求めたく思ふのです。

坪内士行

とても痛快な印象をえます、それだけにもしや悲痛な最後をとげやしないか、とさへ案じられます、將來マネーヂメント專門になつてくれたらと思ひます。

間宮茂輔

素の澤正に逢つた事はないが、舞臺では屢々見て、割合に好い印象を受けて居ると云つて、澤正式の立廻りに就てではなく、新しい芝居—「戀愛病患者」とか「白野辨十郎」とか、さう云ふ多少人生に對する解釋の在る芝居を澤正は一種の頭の

よさで生かしてゐる。その點、好き印象を受けてゐる。しかし、彼には所謂澤正式の臭みが在つて、その臭みが果して彼の獨自性から來てゐるか否かと云ふ疑ひを抱かせる。現在では、その澤正式臭みが一般に受けてゐるからよいが、受けなくなつた場合にも、その臭みを失はないか否か。仁左衞門の臭みは澤田の臭みとは違ふと思ふ。そして現在では私は仁左衞門の臭みの方が本物だと思ふ。希望としては澤正が、自分本位の脚本ばかり演じないでも少し、他の世界に踏込むことだ。

高原慶三

なかゝんばなかせて見せうほとぎす……澤田正二郎に對する感じはこれです。藝術家で事業家を兼ねる態度に多少の反感をもちながらも彼の芝居を見てゐるといつとなく反感をぬりつぶして、その努力に自ら頭が下ります、一金、二押、三顏といふことがありますが、澤田は一押二押、三押、四押、五押……限りがありません……で見物を說得する人です。

武川太郎

一、印象。相貌に九代目團十郎の俤あり名人顏なり。藝風にもさうした一國なところありて大いによし。

一、感想。差當つてなし。

一、希望。歌舞伎劇を全然新しく、もつと表現派劇のよき演出のところを取入れて、いゝ意味の賑かさを以て演ずることなりこれが何よりの希望。

山上貞一

この俳優ほど私の眼の前をさても鮮かによりよく通り過ぎつゝある人はない。まだ松竹に所屬してゐた頃、私は優の口から文字通りの千兩役者にいま始めてなつたと聞いたことを覺えてゐる。それから數年しかならないのに此の成功を見やうとは全く優の努力の賜だ。勿論今まで二回興行であつたのを浪花座で一回にして「井伊大老の死」を上演した頃から、ひいき眼なしに優の前途は明るかつた。藝の人の中で私の理解力が最も透徹し得る人として私は優が好きだ。されば優のために本誌上「桃中軒雲右衞門」の筋を書くことを潔しとした。

佐々木千之

私はあまりたくさん見てゐませんので何とも申されませんが、大衆俳優といふ意味では一方の雄であらうかと思ひます。たゞもう少し貫ろくがほしいです。しかしこの人はなか〳〵才人です。小說も書くし漫畫も書くそれが長所でもあり短所でもあらうかと存じます。しかし、國定忠次は何としてもこの人のものでせう。

高木善治

(一)喧嘩早やい人だと聞いてゐるが、俳優らしくなくて愉快なんだ。學生氣分が殘つてゐる所なんかうれしい、そして甘い父である所が好きだ「パチパチ小僧」なんか確にうれしい本だつた。

(二)熱の俳優だ。器用な人だ。芝居は飛びつく程上手だと思つた事がないが、その頭の良さマネーヂヤ式の頭の良さには感心させられる、とにかく澤田と

云ふ人は熱で一生過ごし人らしい。

小田切史

澤田正二郎氏を思ふ時、妙に私は菊池寛氏と横山大觀氏を連想する。共に藝術の奴隷で滿足する人でなく藝術を願使（語弊があるかも知れぬが）する側の人である。假にも陰れて他の犧牲となる方でなく、現はれて自らの名を爲す方である。藝術家であると同時に政治家にも適するであらう人物である。

で、今私の澤田氏に對して氣がつくことは、行くところ可ならざるなき現在の氏の勢運に乘じて、やうやく民衆の心に冷淡になりつゝあるといふことである。自らの行くところ必ず民衆の從ふ所であるといふ自信に依つて、民衆の心を振り向くことなくまつしぐらに馳驅する氏の背後で、一息民衆の立ち止る時、そこに氏の危機があるやうな氣がする。一二年後に來る氏の惱みを、賢明な氏が今から、惱んでゐるであらうことを希ふものである。

國技史郎

澤田氏と逢はざるも久しい哉である。多少の私的交渉があつたが。

印象を左に——。

（一）劇界での志士であり革命兒である。（二）一方觀客と融和して極はめて親炙的に振る舞ふが一方析伏的態度を執る。（三）觀客の好尙に先驅けする。但し一歩で無くて半歩である。（四）ワイルドの「サロメ」のヨカナアンなどを演れば、名調子で滿場を陶醉させる。（五）駄々も云ふやうだが物解りも早い。（六）文壇と不斷に握手して、利用もし利用もされてゐるやうだ。（七）劍劇物が本領で無くとも嫌いで無いことは確である。その氣概や嗜好から察して。（八）藝人的の性格が三分、學生的の性格が三分、後の四分は何んだらうか？（九）脚本の選擇には苦心する。並々ならぬ苦心をする。歌舞伎の人や新派の人が、苦心する苦心とは違ふ意味で。（十）何んな藝術でも唯一の意味に於て、キワ物で無ければならないのである。卽ち端的に現代人の心へ、觸れるもので無ければならないのである。さういふものをキャッチした人が、現在にも將來にも成功する。氏はまさしくキワ物師である。

長田幹彦

澤田君の「桃中軒雲右衛門」は二度觀にいきました。芝山内家の場にはすつかり感心してしまいました。中井君と格闘したあとでほつと息を入れながら長火鉢の前で湯呑を取上げるあのあたりは「雲右衛門」が髣髴として現はれてゐました。あの脚本は澤田君が眞山先生に材料を提供して書いて貰つたものだといふことを聞きましたが、澤田君の行き方には徹頭徹尾共鳴させられます。歩き方がいかにもどつしりして來たのが、何よりも嬉しいことです。狙ふ的が外れなくなつたからでせう。

鍋井克之

澤田君の芝居はいつも見ておりますが、舞臺以外の君とはもう十年ほども會つた

ことがありません、島村抱月、松井須磨子の藝術座があつた頃、そこから離れて新劇研究の苦難を君がなめてゐた頃に、宇野浩二、秋田雨雀、楠山正雄、永瀬義郎の諸君等と共に私もよく澤田君と面接してゐました。その頃からこだわりのない、平明な、そしてどこか人を引きつけるところのある。親愛の感じのする人でした、君には影と云ふものがなくて、見たまゝのすつきりした。人でこんな人こそ親しくつきあひの出來る人でせうが、私とは仕事の上にあまり連絡がないので近年はたゞ君の舞臺のみを見せてもらうのを樂しみにしてゐるわけです、私の希望としては國定忠次のやうなのもよろしいが、何かいゝ飜譯劇も見たく思ひますいつもの澤田君一人のピカ一芝居でなく脚本によつては井上正夫とか、河合武雄とかそれぐ〜他の大頭の人と組合つて變つた芝居でも見せてほしく思ひます。

石割松太郎

澤田といふ人は、目先の見える立派な仕事師だとのみ、私は思つてゐたのでしたが、白野辨十郎を見て私は感心した。とにかく「時代の人心」を捉へることの出來る人だと思つた、この一點が今日の成功を得せしめた彼の唯一の力である。

伊島理吉

兎角當世の一傑物たるを失ひません。一座の搖ぎなき統轄、時勢の推移、人心の歸趨の鮮かな洞察、こう言つた政策的方面では五郎氏と共に常に敬服してゐます此點露のダンチエンコの仕事を思ひ浮べて、近代劇場理論に一要素追加を强要するに非ずやの感があります。技藥方面ではその派出な力で押して行く藝風は、陰の力で行く井上正夫氏の藝と對比して大變面白く思ひます。明敏な政策的手腕と力の藝、この兩者が澤田氏をして將來あらしむる所以でせう。

江口渙

私に與へられた澤田君の印象の中で一番强く殘つてゐるものは何と云つても最初に同君を見た時、江戸川緣の江戸川倶樂部で藝術座の旗擧興業「モンナ、ヴンナ」の稽古をやつてた時でした。松井須磨子を向ふに廻して同じ臺詞を印度も繰り返しては稽古を仕直してゐたその熱心さに私は打たれました。藝に對するあの熱心さが、そして持前の熱情が澤田君をして遂に今日あらしめたものだと思ひます。

並山拜石

澤田正二郎氏の印象は、彼の技藝の領域が如何に變化して行つたにしても、最初の印象—文藝協會時代のそれと現今のとは少しもへだたりがありません。どう云ふ譯でせうか彼が一本立ちになつてからも、否なつたがために、ある不純な對大衆的考察から「劇」に對する藝術的觀念を使ひわけて居るところに不服があります所謂大衆ものと純藝術的のものと兩刀を使つてゐるところが不服です。併しそれが、彼の純藝術家でなく事業家である所以でせう。また成功した所以でせう。

富田泰彦

「何んでもやつて見せる！」と云つたアン

ビシヨナルな舞臺度胸のある處は澤田正二郎君の生命です。「白野辨十郎」を見出し、「富岡先生」や「桃中軒雲右衛門」を創作したのもそれです。――しかし時には「假名手本忠臣藏」となり「藤十郎の戀」に脫線しますが、それで猶「澤田の藝」としての閃影を認めしめようと云ふ强氣的な彼の企圖だけは、いつも觀客の滿足を買つてゐる所以です。兎に角觀客心理を摑むに聰明な澤田君は藝術價値と興行價値と均等的な狂言の選擇には敬服いたします。

小寺融吉

私は澤田の芝居は、稀により見ませんが出し物の撰擇には、每興行を、興味深く期待して、いつもその賢さに驚いてゐます。澤田の今日ある所以は出し物が常に清新で、從つて常に停滯ないことにあります。此の一座が無人であるに拘らず、人氣を落さずにやつてゆけるところは、他の俳優達の深く學ぶべきことです、それは卽ち舞臺が清新の氣に溢れてゐるからであり、その原因は絕えず新作を演ずればこそです。但し若し此の一座が名舞臺監督を得るならば、此のやゝもすれば粗雜・未完成のまゝの「清新」が、現在以上に藝術的になりませう。もうその日が來なければならなくなつてゐるやうに思はれます。

高安六郎

近頃はあまり見ないので確かな事は云へませんがこの人の藝は割にわかり易いやうで小氣味のよい痛快振は何となしに先代左團次を憶はしめる樣です。

大森梵

理屈は抜きにして、きびゝしたやりくちが、うれしい。以上は、いつも氏から受けてゐる印象。

藝に精進してゐる人へ、藝の精進を云々する必要はないと思ふ。以上は氏への感想。

最後の御質問である「希望」に就いて、私はこれを私自身に逆用して、取つて以つて、是れを氏への贈りものにしたい。私が、私への希望は、苦鬪の人である澤田正二郎氏へ、更に猶一段の奮起を與へ得る、傑れたものを作らなければならない。

村島歸之

君は俳優としてだけではなく、劇團經營者としても、又人間としても傑出してゐると思ふ。劍劇流行の魁をし、而も劍劇が鼻につき出した頃には旣に局面を轉換して他へ行つてゐなど、心憎い程の鮮かさである、今から十數年前「ヴエニスの商人」の鎗持を勤めた頃の君、否それよりも以前(明治四十四年頃か)大隈伯爵邸で催された早大豫科大會の餘興に、當時早大豫科生であつた君が「桐一葉」の片桐且元奧方と、もう一役を勤めたのを見て爾來引續き今日まで絕えず君の演出に接して居る自分としては、君の足跡と日本の新劇の步みとが全く一致してゐるやうにさへ思はれる。

最後に、同君とその劇團の爲に望んで止まぬ事は、同君を輔けて、相當賣物になる男女優數人が與へられたならば――と云ふ一點である。

百田宗治

澤田正二郎といふと、すぐに河內屋を思ひ出します、どちらもあまり好きでありません。澤田の芝居殆んど見てゐません古い藝術座時代のプリンチバルレ(だつたか、モンナヴンナに出る)と勸進帳を見た切りです。見ず嫌ひなのかもしれません。

中原實

Schauspieler Sawada
Kräftig-Mensch, fähig,
Recht-liebend.
Leidengenosse,
Typisch Ja. an.r.

中西伊之助

澤田氏の芝居は藝術座時代から見てゐます、があの昔の純な藝術が大衆化した後に、小生は氏のためにどう云つていゝかわかりません、澤田君よ、もうそのくらゐにして、一つこれから藝術座時代の君になつてくれませんか、僕は君にその良心の殘つてゐるこゝをよく知つてゐる。君が新國劇の旗上げをした時に、ナケナシの財布をハタいて見に行つたほど、僕は昔の君のファンだつたのだ。

酒井眞人

常盤座で須磨子の「サロメ」を見た時の、ヨカナンに扮した澤田のメイク、アツプを今でもハツキリ覺えてゐます。何んにも知らない私に「熱のある役者だな」と思はせたのです。私はフツト、ライトの眞ん前に頭だけつん出して、幕が下りると下からくゞつて幕の中に入つて了ひ好奇の目を見張つて一部始終を見屆けたのでした去年だつたか友人に連れられて帝劇の樂屋に行き出を待つてゐる道化師の澤田を穴のあく程觀察しました。どことなく腹の大きさうな、併しどことなく薄氣味の惡い――鳥渡近づき難い親分だと思ひました。

土屋充

澤田君を思ふ。

まづ何より同窓の一人として君の成功と壽ぎ、自重を祈りたい。私など忠實な觀客ではないまでも、君を初舞臺から見てをると云ふ思ひ出に微笑まれる。明治が大正になるかならぬか頃のこと、君は早稻田の英文科の一年か二年にをり、私は一級さきにゐて、君の舞臺稽古の噂などを聞いて喜んだものだ。確か文藝協會の最後の公演に出られたことゝ思ふが、土肥、東儀の兩先輩も今は故人妓王妓女の淸盛やモンナ、ヴンナ劇、復活や生ける屍など須磨子相手の藝術協會での努力もその須磨子が島村先生の後を追うひしまつた。

新劇運動の功勞者である君はまた劍劇の創始者でもある。机龍之介を偲ぶとき、君が各幕に出ての奮鬪も、あのヒドイ近眼だのにと感心させられる。

坪內先生の養成された人達も多かつただらうに、そして所謂新派凋落の時にあた

つて唯一人大元氣でしかも不斷の精進ををしまぬ君のあることは劇界の爲にどんなにか心づよい事であらう。神樣、親分大統領と大向から聲のかゝる一方、一幕でも藝術的なものをと努力して君は、いつまでも劍劇でもなく性格的ものに向ひつゝあるのではあるまいか。さはれ、君のうへに大きな期待を世の多くが持つてをられる事とおもふ。

前田河廣一郎

病氣旅行中につき最近の希望、感想、印象等に申されませんが――私は澤田君を才人だと思つて居ります。或る意味での藝界に於けるダマゴーギシュな、煽動家的なこの人の精一杯に手を擴ろげるとき一番力强いものを內から絞り出さうとするとき、自然と彼れの弱點も暴露しはしないでせうか。

中村岳陵

梨園現下の新人として問はるれば、私は御問合せの澤田氏と、井上氏とを推すに躊躇しない。澤田氏か隱忍自重、刻苦多年劇壇に新演出を試み、遂に澤正張りなる語を生ぜしめ（これは良否今俄に判じ難いが）着々新境地開拓、斯界に嶄然頭角を現し、確たる地位を得た事は、寧ろ當然の結果で、その叡智と不斷の努力の賜と讃辭を呈する次第である。

同氏の印象と云ふ御尋だが、自分は制作の都合で遂見る機會の比較的尠い爲、六ケ敷い事は云へないが、一言にして云へば「好きな役者」であると云ふ辭が一番適してゐるやうである。

希望は所謂劇壇既成大家の如く氣力乏しく、深き理解と推究なくして、只藝の力のみに賴つて萎縮して了まはないで欲しい。猶不斷の努力と、橫溢する熱のある藝を望んでやまない。

大關柊郎

澤田氏は我が劇界のアントワンヌ、ラインハルト、コポーにも比較すべき天人物だと思ふ。氏はタレントある俳優であると同時に識見の優れた尊敬すべき演出家である。過去、現在よりも氏の將來に希望をつなぐ一人である。だから私は氏は築地小劇場の土方興志氏と共に近き將來に於て我が劇壇の爲めに必ず意義ある仕事を成しとげる事と期待してゐる。

家門櫻谿

「嬰兒殺し」の老巡査などは、澤田君の印象を最も深く殘すものである。白く塗る役は此の優の本領かも知らぬが、時折には意義ある大老けの人物にも扮して、藝術の多技をます〳〵發揮するがよい。

白石實三

脚本が全盛なわりに、上演されないのが遺憾です。澤田氏あたりが手をつけられたら、面白くなるでせう。澤田氏の人氣を以てして、價値ある藝術的作品を普及していたゞきたい。

中山重孝

私は澤田正二郎が辨天座に奮勵努力の時代を最も尊く涙ぐましくも感じて居ます柳の枝に蛙の飛びつかうとするマークがいかにも澤田の奮闘振を語つてゐる似つかはしいものだと思ひました、その頃角

座に山崎長之輔卽ち山長が常べつたり連鎖劇を演じてゐましたので、西の山長に對して澤正といふニックネームを呈しました。それが一般的になつた事はそれほど澤田の存在を認められた心强いものがあるのでした。

澤田は力と熱の人です。その力と熱との原動力に辨天座の庄野主任と座附の作家行友李風氏のあつた事を忘れてはならぬと思ひます。東上後の事は知りません。

井上康文

澤田正二郎氏の舞臺は、久松町で、「屋上の狂人」「嬰兒殺し」を見たのが初めで近くは帝劇で「井伊大老の死」を見たのが終りです。ひところ菊五郎の踊りにこつてから、あまり外のものを見る間がありませんでした。然し私は澤田氏の健闘を何よりも好ましく思つてゐます。そして澤田氏は「荒神山」などの大衆うけの見せ場をゐらふよりやはり實實な深刻な一幕物をやつた方がほんとの味の出せる人だと思ひます。「桃中軒」は脚本で讀んで面白いと思ひましたが、まだ舞臺を見てゐないで殘念です。

相田隆太郎

第一に氣魂があるのがいゝと思ひます。そして、頭もよく、時の流れを見る機敏さもある――大菩薩峠の机龍之助には原作にある樣な東洋的ニヒリズムの氣持はなかつたにしても颯爽たるところがありました。

時代の流れといふものはそれ程深いものでなく、案外輕く淺い樣なところがあります、彼はそれをちやんと知つてゐるやうです。

だが俳優としての彼の本當の苦しみはこれからではないでせうか、次の峠をいかに越すか、それによつて澤田正二郎氏の本當の天分が決定されるでせう。彼は意氣でゆくべき人です。然し彼自身それを知りつゝ、柄にしつくりしない「藤十郎の戀」をも努力してみるのは偉いと思ひます。

樋口一葉

俳優として、また興行者として共に澤田氏は努力の人である。恐らく氏の今日の成功は單なる俳優としてばかりでなく經營者、興行者としての立場がかくなさしめたものと思はれる、澤田氏の演劇は興行價値がある。今度出す「雲右衛門」等もそうだらうと思はれる、それはつまり俳優としてゞなく興行者としての經營的手腕があるからである、然し今後は藝導にのみ進んでもらひたいと切望する。俳優や文士の金儲けは餘りよい感じよくないから。―

佐藤惣之助

劍劇なるものを遂に見ず從つて澤正を見ず、古く須摩子時代に翻譯劇を見し心地すれどあきらかには記憶致さず候

お容赦被下可く候

鈴木彦次郎

ネフリウドウ（むろん昔の）澤田、新國劇旗上當時の澤田、最初東上、國定忠次の澤田、父るの澤田、月形半平太の澤田、白野辨十郎大詰の澤田、富岡先生の澤田

相馬大作の澤田そして桃中軒雲右衞門であり、藤十郎であり、更に辨慶である澤田――僕はその時々の印象を浮べながら澤田といふ人を井上と對蹠的に考えてをります。澤田の意氣颯爽と井上の熱とは全く別ものです、熱の質量と意氣の質量が各々はつきり違ひます。廣い人、ひきづつてゆく人、深い人、ひきつけてゆく人、僕はこんな意味で此の二人の將來がどんなに展開するかを期待してをります

津村京村

その印象――と言へば、落着いて居る樣で、同時に氣短かさうな動作とセリフ！田舍くさい樣で、而も江戸ッ子風な男ぶり！希望――と言へば、變に新しがらず、本格的な新劇をやつて行く事に意を置いて欲しい事。

齋藤米太郎

いつか、文房具店でみたパステル見本は二百四十六色あつた。だがそのどの色も私にとつては、黑一色に及ばなかつた。それは黑一色の持つ力だつた。――澤田正二郎は正に黑の俳優である。その動きは如何にも深く、其聲は如何にも濃い。――のみならず、黑が屢々、視覺以上の色を其中に秘してゐるやうに、彼も彼自身の中に俳優以上の力を埋めてゐる。其腕は「その一黨」を率ゐて來た、其才は「パチ〳〵小僧」を書きあげてみせた。――それから彼が「澤正」として大衆の中に躍りこめたのは、彼に所謂「柳に蛙」の蛙以上の努力を誓ふ自信を持ち得たことにあつたに違ひない。彼は其力に於て、もつと學ばれていゝ俳優である。それにしても、かなり長い間、彼を見て來た世の俳優達は鈍感な小野道風である。

青野季吉

小生は澤田の芝居を餘り見て居りませんしたがつて纏つた考へもありませんが、彼がずいぶん思ひ切つた下等なものをやつて、民衆の中へ下向して行つた一種の勇氣と見識には敬服してゐます。これからの彼がその引つけた民衆を引張つて、どこまで上向して來るか、それが見ものだと思ひます。小生はひそかに彼に注目してゐる一人です。

野島辰次

嘗て日比谷公園で「勸進帳」を觀たことがありますが、いゝ度胸ですな。この優たしかに度胸でぐんぐん伸して行つたやうなところがあります。それに時勢の推移も民衆の好尙もちやんと看破するだけの頭のよさもあります。パラパラと十人も一緒に倒れるあの劍劇ものなどは鮮かでもあらうが、少々馬鹿馬鹿しいぢやありませんか。多分もういい加減で切り上げてはゐるんでせうけど近頃あまり澤正劇を觀てゐないので、まとまつたことが何も云へません。御大の外がダタ落ちといふ座組も、もう少し何とかならないものでせうか。

安間確郎

澤田正二郎氏に就いては、私は殆んど語るべき資格を持つて居りません。中村吉藏氏、金子洋文氏、菊池寛氏などの、私の好きな戯曲を上演して呉れて居るのですが、どう言ふ譯か、足が同氏の劇團の方へ進まないので、今迄に只一回觀たきりです。其の時(四五年前)所謂チャンバラを演つたので、それが、私に兎角、何となく、「澤正劇」を好まない――さう言ふ印象を與へたのかも知れません。が、これから、うんと觀ようと思つて居ますチャンバラ丈け除けば、同氏の演る出し物は、いゝものばかりです。

伊吹武彦

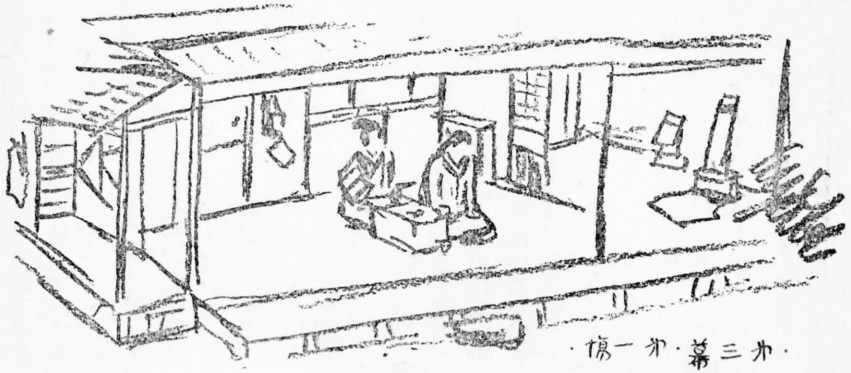
好き嫌ひ程妙なものはありません。食物でいふと、私は牛肉なら日に三度でも敢て辭しないくせに、鷄肉は香を嗅ぐのも嫌な位です。澤田氏は、思ひ切つていふと私にはこの鷄肉です。（尤もたべず嫌ひではなく五六度はたべましたが）もつと辛棒して食つたらいゝ味が出てくるのかもしれませんが、今のところ先づ鷄肉です。何故さうかと聞き直られると困りますが、強ひていへば、この勇壯な鷄肉の下にちよい〳〵見えるものがあるからです――一度着物の裾の蹴出しのやうなものが。妄言多謝。

江馬修

澤田君、今度君について何か書くやうに云つてきました。かうした場合、僕には或る特別な、親しみ深い感情が湧き起つてくると云つても、君は疑はないでせうむしろ當然だと思ふでせう。もし十五六年前、あの本鄕の新坂上に隣り合はせて住んでゐた頃のことを君が思ひ出すならば。こんな譯で、僕は君が初めてアルトハイデルベルヒに出演して以來、君の仕事をずつと或る關心をもつて眺めてきました。そして云ひたこともかなりあるやうに思ふが、今は紙が足りない。唯「闇の力」で見た時の君が一番僕にはなつかしかつたとだけ云はせて貰ふ。心から君の精進と努力と幸運とをお祈りする。

京極利行

賢い澤田君のことだから、きつと又切り拔けるだらふと、失望せずにその時を俟つ氣持の方が僕は多量に持てはするが、どうも澤田君、と云つて語弊があれば、澤田君中心とする新國劇は、最近スラムプに陷りかけては居ないだらふか（もつとも澤田君が大阪は旅芝居意識―出し物の點で―なのだから、眞價標準は東京公演をのみ通じてのことに、との意見だつたら大阪以外での澤田君を見ぬ僕に發言權絶對無ではあります）澤田君は近年、東京で興行意識方面からも幾分上乘と折紙つけられた、云はゞ新國劇特賣品範圍に入つた狂言ばかり大阪に持つて來る傾向がある。これでは、なんだか自家特製品賣出し巡業のかたちで自分等特賣品を通じてばかりでなく一般賣品をも通じて、その店の眞價の知りたいものには、なんとしても物足りなさの限りである。



芝居物語

眞山青果氏作

桃中軒雲右衛門

五幕

山上貞一

大塚克三画

1

頃は明治四十四年四月、東海道線靜岡の驛頭では今しも乘込んだ桃中軒雲右衛門の一行で大混雜である。驛前の旅館長生館の店頭には二つ巴の紋章のある大トランク、さては行李明荷、旅行袋に小旗その中を二つ巴の半纏を着た若者、黑木綿に二つ巴の五つ紋付を着た弟子達がなんとなく物々しげに立居してゐる。それもその筈だ。彼等桃中軒雲右衛門の一行は決して靜岡へ乘込んで來たのではなくいまや故鄕へ錦で東京本鄕座へ初乘込みの途中。しかもこの靜岡で御大雲右衛門が何と思つたのか、突如と降りてふいと姿を隱したといふのだ。事務員秋葉林太郎は長距離電話に喰付いて此の不仕末を苛立しげに誰かに訴へてゐる。弟子の瀧右衛門、桃雲、雲太などは心配げに時計を眺めて、行衛不明になつてもう二時間も經つといふ雲右衛門のことを案じてゐる。明日の大事な乘込を控えて、どういふ氣でこうした事をしたのか、死ぬか生きるかの關ヶ原だとは座員達の誰しも思つてゐることだ。瀧右衛門は書生の塚本に聞いた濱松で電報を打たせられたのは何處の誰にだ。國府津の瀨崎泉太郎にだその泉太郎とは卽ち雲右衛門の長男である。急に國府津下車をやめる靜岡で降りると電文にあつたといふ。瀧右衛門は驚いた。大阪を立つ時から今日は國府津泊りと決つてゐた。されば新聞社の人達や出迎人は皆國府津で待つてゐる。今夜は

泉太郎の住む酒勾の別莊で勢揃ひして明日は勢よく東京本鄕座に初乘込みをする筈だ。その乘込には馬車が十三臺、春の家の組見申込が五百以上、その上に新橋から……。東京よりの吉報を聞く每に座員達は歡喜よりも不安が昂じてゆく。そこへ神田亭の息子稻田己之吉が歸つて來た。雲右衛門の行衛は依然として解らない。名古屋あたりから雲右衛門は豪勢に鬱ぎ込んでゐたと瀧右衛門は今更にいふ濱名湖あたりで、あ、富士が見えると獨り語をいつて窓の方へ座り直した雲右衛門の妙に寂しそうな姿を己之吉は思ひ起した。大體に寂しげな顏を近頃になつてよくする雲右衛門、御祖師樣ではないが追はれても〳〵鎌倉の土で彼は八年の間九州から東京を睨め通して來た。八年前に妻と二人で橫濱の停車場からシヨンボリ旅に出た時、相互に擦り減つた駒下駄が身に滲みて悲しく眼についた。座員達は今更に運だと驚いた。力だと叫んだ。そこがそれ男の意地だとも力んだ。

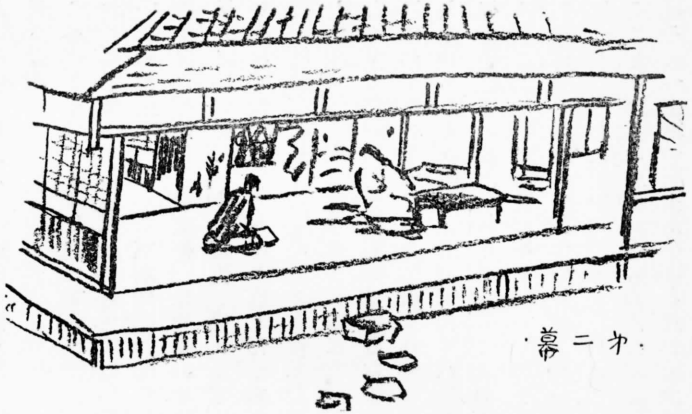
そこへ土地の座主が金主を連れて土產物を携つて尋ねて來た。そして雲右衛門の妻女にでもい、挨拶をしたいと奥へ通つた。ふら〳〵とほろ醉ひ加減で歸つて來たのは三味線引の松月である。彼はもと雲右衛門の舊師匠で春日井某と言つた六十近い酒に弱い好人物だ。その老人の口から雲右衛門が土地一番の料亭浮月で藝妓や太鼓持を集めて大騷ぎをしてゐるといふ事を座員達は聞いてあきれ返つた松月は軍資金の調達に歸つて來たのである。座員達は松月を責めた。明日の東京乘込は日本國中に雲右衛門の價値の定まる大事な日だ。何故に諫めて連れて歸つてくれないと。一體どうする料簡だ。途中國府津には十何年ぶりで逢ふ長男の泉太郎を始め出迎の人々が東京から來てゐる。

『それが急に、伜の顏が見たくないと言ひ出したんだ』

松月にはその心持がよく解つた。寫眞を取寄せたり手紙を催促したりして憧れてゐた泉太郎に急に逢ひたくない。十二階の天邊に登つて見れば一思ひに飛び下りたくなるのも人情、危がつて柱にしがみつくのも人情、一概にとかくは言はれない。

奥から雲右衛門の妻おつまが先刻の客人を送つて出て來た。三十一二の下ぶくれの上品な顏容にしては服裝が艶めかしい、穩かな聲の持ち主である。松月はおつまに國府津に下りるのは厭だと雲右衛門の言を取次いだ。

『お爺さん、あたしどもは八年振りに二人で、汽車の窓から富士山を見たんですよ』



第二幕

と唇を噛みしめておつまは言つた。泣いていゝのか笑つていゝのか、重苦しい心になつた。松月はおつまから手提げを受取つてとぼ〳〵と出て行つた。もうすつかり夕暮である。

其處へ倉田楚人は宿屋の番頭に小鞄を持たせて遽しく這入つて來た。洋裝の新聞記者で極度の近眼である。表口より大聲で吐鳴つてこの番狂はせを責めつけたおつまに向つても、大阪以來の友人として職業をはなれて明日の乘込に景氣づけるべくわざ〳〵社を休んで沼津まで出張して來た。それにこの仕末とはと憤慨した。倉田は雲右衛門の舊友であると共に彼の天才藝術に渴仰してゐた。燃ゆるやうな功名兒野心家の雲右衛門が八年間九州を放浪して密かに藝術を練磨したのはたゞ帝都の藝術界を征服しやう。第一人者になり覇者として世に立つ熱烈な名譽慾に驅られてゐたばかりである。それが突然、今日になつて姿を暗ますとは。おつまは倉田の言葉をさえぎつた。姿を暗ましたのではない。國府津で降りるのが苦しかつたのだ。そこには八年前に旅に出る時人に賴んで殘して來た長男がゐる。それはおつまと一緒になる前に或る女に生れた子供である。その子泉太郎の監督を倉田は賴れてゐた。小田原の中學に通はせて學資の取次までしてゐた。雲右衛門はその少年の成長を悅んでゐた。今度の東上にも第一の悅びにしてゐる筈の彼が……。おつまには夫の考へてゐることが判然と解らなかつた。然しまた誰よりも解つてゐるやうにも思はれた。此頃になつて泉太郎から來た手紙を讀むのが苦しけな夫の心。倉田は吐鳴つた。

『あんたも弱虫だ。何故さう卑却に苦勞を避けるんだ。卑却だ。君等は臆病者だ』

倉田は更に急所に責め入つた。明日の東京入りが恐ろしくなつたのは泉太郎のためでない。棄てゝ遁げた子供の外に、東京を恐怖する重大な道德的煩悶が心中にある筈だと喝破した。おつまは思はず兩手で顏を掩ふた東京に自分の罪惡の墳墓を見詰めに歸る人の上には、昔の一家門弟が非難し攻擊せうと手ぐすねを引いてゐる。その荊棘の地に入るには雲右衛門にしてもおつまにしてもあまりに卑却な態度だ。藝術家だから道德的罪惡は見遁されるとは言へない。藝術家も人だ。罪は罪だ。然し雲右衛門はその罪のために自身の藝術を完成した。その罪に救はれたのだ。罪を悔ゆるとか、苦しむとかよりも自分を完成した點に雲右衛門の偉大さはある。

おつまはヒステリックに叫んだ。

『そんなむづかしい事は、わたしには解りません』

倉田は雲右衛門の擁護者だ。彼の非難者とは戰ふ者だ。彼の周圍に立つ人は其自信と勇氣を持つて雲右衛門の身を護らなければならぬ。まして妻のおつまがその弱さでは、と言葉するどく責めた。

『二人の間のことは他人の言葉は聞きません。誰の力も、誰方の力も借りません。あの人を慰め、あの人を見詰めるのは私より外にありません。二人の間だ。二人の間の事だ』

とおつまは卓に凭れて泣き伏した。

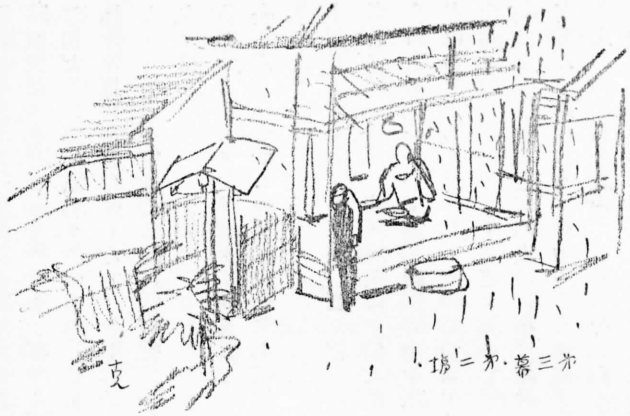
2

その日の夜となつた。靜岡市の割烹店浮月亭の廣間では藝者、半玉の笑聲が賑かに聞えてゐた。桃中軒雲右衛門は袴の紐もとけてズル〳〵と引擦りつゝ女達を追ふて廊下を出て來る。七段目の由良之助である。三十七八歳彼一流の結髮をして二つ巴の紋付袴でしたゝるか醉うてゐる。靜岡縣の事務官留岡東助は桃中軒の樣子を廊下から見てゐる。雲右衛門はこの藝妓末社の人達にも自分の名聲の信疑を訊ねては苦んでゐる。そこへ留岡は這入つて來た。福岡縣に任官中に熱烈な雲右衛門の讀美者になつた者だ　恰度今日警察縣廳師團の主腦部の宴會があるから紹介したいと言つて去る。雲右衛門は幇間の甚孝を捕へてくどくも自分を知つてゐるかと尋ねる。いま日本に知らない者もない桃中軒の大師匠と言ふのを打消して、その昔鍛治町のケチな寄席榮喜亭の黴臭い樂屋で小繁といつて轉つてゐたのはおれだと言つてほつと心を安めた。

思出せばその榮喜亭の二三軒先きの稻荷鮓やの娘のお夏さん、その人にも禮を言ひたと言ひ出した。泣くやうな美しい話をしてやらうと、五人兄弟で九つの年に親父に別れてからの苦勞話をコップ酒を呷りつゝ雲右衛門は快濶に語つた。洲崎の遊廓がまだ根津にある頃、兄の繁造と一緒に毎晩米の代を稿ぎに流しに行つたこと、兄は小供の時から病身で咽喉が弱かつた、紫のハンケチを頸に卷いて三味線を抱いて兩袖を搔き合せたみじめな姿……語りながら雲右衛門はすつかり感傷的な氣持になつてゐた。そこへ松月老人が手提鞄を持込んだ。雲右衛門に代つて松月が貧乏物語を續けた。幟蒲團にくるまりながらもう一度旅廻りがして見たい桃中軒は急に周圍がうるさくなつた。なにが桃中軒は急に周圍がうるさくなつた。なにが桃中軒だ。何が雲右衛門だ。

『おらァ昔、貧乏してゐた時の方がどの位、懐しいか知れやしねえ』

雲右衛門はごろりと寢轉んだ。先刻の留岡事務官は土地の新聞社長や紡績社長を連れてどや〳〵と這入つて來た。雲右



衛門、知事公が待つてゐられるんだ。師團長も一席聞きたいと言ふんだと留岡は吐鳴つた。雲右衛門は少しもそれを取合はないで天井を仰ぎつゝ松月のお上さんに可愛がれてゐた昔のことを懐しげに語つた。書の惣菜が竹輪一本、一本八厘だうまかつたと笑つた。留岡は閣下等の前で歌つてくれと言つた。田舍縣知事が何んだ。おれも天下の雲右衛門だ。知事でも師團長でも藝の前には頭を下げさして見せると雲右衛門は空ぶいた。留岡はかつとなつて躍り入らうとするのを石田と西川が止めた。いづれも木戸錢を取る藝人の增長慢さを罵倒して去つた。泉水に落る水聲が聲えるほど靜かになつた。雲右衛門は寢入つた。おれは生きてゐて好かつたと松月老人は今更に感謝した。そこへお妻が遣つて來た。搔卷をそうと良人にかけると雲右衛門は眼を開いて妻を見た。おれは何んだか、この世に休らひの寢床がなくなつたやうな氣がしてならない。夫婦は溜息をついた。三度留岡事務官は暴れて來た人間の見識には本質が件ふ、貴樣は白晝公然東京の町を歩ける體か。不德漢め。師匠に叛いた背德者、忘恩者、制裁はあるぞと罵倒して去つた人達つて倉田楚水が急しく入つて來た。おれの拳骨がポケットに入つてゐるうちは好いが明日をどうすると迫つた。おれも雲右衛門だ。傷だらけのまゝに生きやうと決心した。明日の一番で靜岡を立つそれでいゝ、それだけでいゝ。倉田と雲右衛門は涙ぐみつゝ手を握りあつた。倉田は長男の泉太郎を連れて來た。逢つてくれといふ。雲右衛門は傷だらけの姿を自分の子だけには見せたくないといつたが、はては呼んでくれと言ふ。十六歳の美少年、中學生らしき和裝で雲右衛門の實子瀨崎泉太郎が入つて來た。自分の子が八年間自分の顏を覺えてゐてくれた喜びに雲右衛門はコップに酒を注がした。爺さん伴に聞せたくなつた。引いてくれ松月はおい來たと三味線を取上げた。

『卯月も去りて五月雨の、昨日今日も搔き曇り、降りみ降らずみ定めなき、頃は節句を明日にした五月四日の入相時

……』

泉太郎！と父は子を呼んだ。親父の體は傷だらけだ。虛名や評判に惑はされておれを買被つてはならない。と聲めつゝも『しやあ〳〵と降る雨の中、笠もかむらず頭から……』と唄ひつゞけた。泉太郎！兩び呼び止めて、おれの親父は上州結城在で吉川繁吉と言ふ旅廻りの不見目な祭文語りだ。雲右衛門はその伴だぞ。お前の親父は傷だらけの男だ。

『周圍はしん〳〵寂莫として、松も柏も生ひ茂り風さへ通さぬ泉岳寺の墓地、折から聞ゆる梟の聲、今うち鳴らす鐘の音は、ありや本堂の勤めの鉦……』

語りつゞけるは雲右衛門が得意の村上喜劍の一幕だ。彼は悽愴にして悲痛の加はる自分の聲に感動してその聲は涙ぐんで聞えるのを並ぶゐる人達は膝を正して聞き入つた。

3

一年半は過ぎた。明治四十一年の秋だ新橋の待合竹の家なる雲右衛門の居間には中央に彼自身の肖像畫が掲げてある。中二階は目下工事中で鐵鎚の音、鉋の音など聞える。雲右衛門は温袍姿で十種ほどの新聞を前に煙草をくゆらしてゐる。傍に支配人の磯野一石が郵便物を見てゐる。關西婦人會から擔ぎに來た書面の事や芝公園の地面を五萬圓で買ふ話、神田亭のこと、二人の話は進んで妻のおつまのことに及んだ。夫が女の一人や二人をつくつたといふて不貞腐れる女ではないが、おつまがこの月になつて急に席を休んだことは寂しいことだ。病氣だから仕方がないと諦め、誰の三味線にだつて歌つてみせると言ふものゝ雲右衛門の苦惱だつた。都新聞には深川に千鳥といふ妓の出來たことが載つてゐる雲右衛門はまた自分の藝を疑ひ出してゐた。おつまが自分の藝に愛憎をつかしたのではないかとも思つた。雲右衛門は聲の艶を失ふまいと若い女と親んだ。藝は生物だ。聲を人に借りて來て歌つてゐるのではないとも言つた。雲右衛門がゐなくなると泉太郎が這入つて來た。憂鬱な顏色をしてものに怖るゝ風が見える。泉太郎は母の病氣を案じた。磯野は泉太郎の憂鬱さを心配した少し勇氣を出して學生らしく活潑にしてくれと言ふ。泉太郎は夜の目も寢ないで、母のこと父のことを考へるといふ。坊ちやん、あんたは學生だ。學校のこと、遊ぶことの外は、餘りいろ

いろのことは考へないがいゝですよと磯野は忠言した。自由、強情、我儘、みな雲右衛門の藝術をつく糧だ、決して天才藝術家に道德倫理の完成を求めるものではないとも言つた。磯野の去つた後で泉太郎は都新聞に出てゐる父の艶種記事を見てはつと驚いた。そして恐る〳〵讀んでゐると書生の塚本と右田とは座敷を掃除に出て來た。そして端なくも新聞を取合ふ内、前後を忘れて取組み合ふ。雲右衛門が浴場から出て來る。泉太郎は口惜しげに泣くのを父は怒つた。馬鹿者泣くな柔弱者、人間が泣くのは訴へる事だ。他人に憐みを求めるのだ。爭ふべき權利を自分から棄てるやうなものだ　男の氣概を失つて世間や外聞を恐れてものを包み隱そうとするからいけない。善惡とも大手を振つて世間のやつ等に素ッ裸なところを見せてやれと敎へた。そして福岡の玄洋社に男の氣慨を養ふべく行けと言つた。泉太郎は涙含みつゝ母のことを言ほうとした。雲右衛門は屹つとなつた。そこへ女雲右衛門と名乘る門弟お力が這入つて來た。男裝して男髷を結び袴を着けてゐるお力はおつまを連れて歸つて來た。どうか穩かに語をしてくれと賴んだ深川の妓千鳥のことを新聞で見ると誰だつて腹が立つ。赤十字社の講演の時、わざと二度まで三味線の調子をはづして大勢の中で雲右衛門を躓かせたのはおつまの知つての仕事と聞いて桃中軒は愕然と驚いた。お力、正直に言つてくれ。おれの藝は何處か狂つてゐる處はないか。お力はそれに答へないで、奥樣の腹が立つてゐるのは藝でないと言切つた。雲右衛門は普請場、お力は勝手の方へと去つた後へ、磯野が代議士今井章三、地方有志者谷村某、石井某を案内して、書生の塚本、右田も附添つて出て來る。客人達は口々に武士道皷吹の桃中軒の威勢の素晴しさを激稱した。雲右衛門は悠然と這入つて來た。今井等は青英資金募集のため三日間の寄附興行を申込んだ。突然妻のおつまが瓦斯燈口の襖を開けて顏を出した。足もとがよろめくほど醉つてゐる。二時からの紅葉館の御前講演に三味線を引くことを忘れて失つてゐた。藥に飽き飽するとと言つた。今井等の歸つた後で雲右衛門はお前はおれの三味線が引かれないのかとなじつた。あたしも體がこんなですから、誠に憶劫になつて、それに彈いてゐて泣けないと言つた。

『お前さんは昔、わたしの三味線の出來の惡い日には打つたり蹴つたりした人だよ。あたしは素よりお前さんに可愛がられたのではない。お前さんは自分の藝の肥しにわたしの三味線を食つたのだ。お前さんは自分の藝のためには人も師匠も忘れて、總ゆるものを犧牲にして悔まない、强いこゝろの人だつたのだよ。二人で頸にハンケチを卷いて、九州三界を彷徨ひ歩いた昔をお忘れか　形は二人、夫婦でも、藝の上ではいつも敵、相互に負けまい凌がれまいと互に、張り合つて來た眞劍さは何うなつたのだい』

聞いて雲右衛門も暗然となつた。たゞ今に見ろ、今に見ろと東京を睨めて人知

れず齒を喰ひしばつた頃の緊張した氣分人氣が盛つて落ちる藝ならお前もそれまでの人だ。おつまにはつきりと言はれると、衰へ初めた藝に反して却つて來た人氣が恐しく思はれて背中を寒くした。おつまはいつまでも生きてゐられる身體でない自分をよく知つてゐた。女房の三味に躓づいて總身に汗を流すやうな男になつた雲右衛門の三味線を彈いても、もう涙がこぼれない。泣けるやうにさへ歌つて下さりや、何日でも引きますよとおつまは立ち去つた。雲右衛門は蹉跎して追かけ引戻そうとした處へ泉太郎が走り寄つて父の前へ座つた。

『お父樣、どうか千鳥をこの家へ入れることは斷然よして下さい』

子の淸き聲を押しのけて父は千鳥、千鳥と若き女の名を呼んだ。父の身體は傷だらけだ、決して完全を求めてはいけないと知り乍ら、舊い疵は仕方がない新しく傷つく父を見るに忍びない子。然し雲右衛門は藝のために千鳥を欲した。千鳥からあの若さと無邪氣さを求めて藝のために肥しにしたいと希望した。深川の半玉千鳥は這入つて來た泉太郎は猛然と飛び掛つて千鳥を突倒した。子は千鳥に歸れと呼ぶ親は千鳥を呼ぶ。親子はつひに組合つた。あまりのことに磯野は驚いて走り寄り泉太郎さんを打つなら磯野が相手だと雲右衛門の腕をつかんだ。雲右衛門は泉太郎を確と膝下に組敷いて、

『おれは只一人の浪花節語りであればいいのだ。おれはたゞおれの藝をたのんで生きればいゝのだ。道德者にも德行者にもなりたくない。たゞ完成なる一人の祭文語りであればいゝのだ』

それだのに一人の子は父を完全な人間とする　父も泣く、子も泣く。磯野は泉太郎を寄宿舍へ入れて勉强させやうと言つた。雲右衛門は兩手がわが肩を抱きしめてわが身をふり捨てるやうに打振つて

『おらァ何も要らねえ。たゞ藝人でありてえ、たゞ藝人でありせえすりやいゝのだ』

と叫ぶなりべた〳〵と頽れるやうに座つて泣いた。

4

明治四十三年の春、その日は淡雪が降つてゐる。芝公園内に新築した雲右衛門の居宅だ。茶の間には火鉢、茶棚、緣起棚。中の間には簞笥、神棚、衣桁。その衣桁にはなまめかしい長襦袢が掛つてゐる。大入袋、宣傳ビラ、羽子板、人形が飾つてあらうといふ、どうしても藝者の屋形だ千鳥が本名のお貞で主婦振りを發揮してゐる家である。その日は大掃除の日で、近所ではまだ疊を叩く竹の音が聞えてゐる。書生の右田、塚本、それに弟子の桃雲は掃除を終つた道具を片づけてゐる。お貞は湯上りの姿を小間使のお米に傳はせて鏡臺に對つてゐる。女弟子のお力が紺飛白の筒袖姿で茶の間に座つてゐる。正妻に味方するもの、新婦お貞に近づくもの、弟子の書生の中にもそれぞれ相反目してゐるので家庭内が和熟してゐない。妻のおつまは病院に入院してゐる。その病院への心づけが行屆かないと言ふのでお力はお貞やお米に對つて大

久保彦左衛門をきめ込んでゐるのであるそれに此頃になつて毎日の、東京新聞が雲右衛門を攻撃してゐるのもお貞が惡いのだ。恩義ある妻を捨てゝ、瀕死の病人を見殺しにするの、殘忍、冷酷、無情、お力は體を顫はして立腹してゐる。お貞は決して雲右衛門とおつまの仲をさえぎつてゐるのでもなかつたが、雲右衛門はおつまの顏を見るのが苦しいといつて、病院の門まで行つては氣がおくれて馬車を返した。自分の不人情に氣が咎めるからだとは一概に言へない惱みが胸中深くあつた。處が世間から不道德の何のと攻擊されてゐる反對に、この頃急に舞臺が冴え返つて來た。雲右衛門の藝が蘇生したのと驚いてゐる。雲右衛門にば不思議な力があつて、世間に非難や攻擊される時にはいつも藝が冴え返つて恐ろしいほど光りが出ると桃雲は松月老人の言を引張つて來て舌を捲いた。藝はそれでも、それでは人間がすむまいとお力は心配した。桃雲は泉太郎のことを言ひ加へた時たま寄宿舍から歸つて來つて來てはお貞を睨め廻してお小遣ひを持ち出す不良少年だと言ふ。鼻綱の取りやうが惡いと小牛でも暴れるといふからとお力が皮肉を言へば、あたしと言ふ餘計者が入つてゐるから、それで家が揉めるのだとお貞は答へた犬の啼き聲が近づいて雲右衛門が角袖を着て外より歸つて來た。お力を見て早速と聲を掛けた。お力も今日は少しお話しがあつて參つたといふのを手で制して今日は謝まる少し胸に持つことがあると斷つたが、今日にも萬一のことがあつたら後悔なさいますよと言はれて、雲右衛門も思はず足を踏み入れて、

『そんなに惡いのか』

と聞いた。昨夜院長からの電話で今朝から弟子どもや心ある者はみな集つて雲右衛門の來るのを待つて居るとお力は言つた。お妻はおれを怨んでゐるだらう。二十日前に尋ねて行つた時もあいつの顏が見られなかつた。それに幽靈を見た、おつまの顏をあり〳〵と見た。おつまも死ぬ時は矢張り只の女だ。根本骨の髓まで藝の人だと思つてゐた女が、只の女とは寂しい藝に生きた人として永くおれの心に生かしておきたい。雲右衛門は酒を呼んだ。門弟の瀧右衛門が病院から歸つて來た。お力を見て廊下口からお貞を呼んだ。おつまが半狂亂の體であるといふおつまはお貞から屆けられた蒲團を見るなり雲右衛門に逢ふのだと暴れ出した流れに御所車、山櫻の染模樣には異存がないが、櫻に下つてゐる短册に

さなぎだに重きが上の小夜ころも

わがこまならでつまなかさねぞ

と書いてあるのを讀んで、雲右衛門に咀はれた、祈り殺されると騷ぎ出したのである。お力はそれを聞いて、はつと胸を突かれた。どうかしてその事だけは雲右衛門の耳に入れたくないと思つた。師匠をこれ以上に苦しめたくないとお力は、病院へ行つておつまを宥めて來ると立上つた。

『お力、賴むぞ。その舊い疵痕はおつまひとりが苦しむのではない。二人の疵だ。おれも一生その傷口を抱き締めてゐる。おつまにもその傷口をしつかり

と抱いて靜かに眠るやうに……』

雲右衛門の聲は沈んでゐた。苦しげに立去る彼の後をお貞が、貴方と追うて去つた。お力が泣きじやくつてゐると三味線引の松月が這入つて來た。泉太郎が學校で友達と大喧嘩をして、今退校になるところだ。それは短刀を拔いて學校の運動場で、學友十幾人を相手に大立廻りをやつた爲めだと言ふ。あの涙もろい內氣な兒の心に、この荒々しい血が潛んでゐるとは人間の恐ろしいところだと松月は歎息して去つた。支配人の磯野は心配げにやつて來た。雲右衛門に逢つて弟子の松のことに就て詫びやうとすると、桃中軒はそれをこばんだ。自分の節廻しを眞似、自分の假色をつかふのが弟子か、みな振りきつて一人になりたい。そこへお貞が床屋が來たと言つて報せた。磯野はお暇しやうと立上つて、あなたはつくづくこの世に苦しむために生れて來たやうな人だ。その苦しみが藝だ。その後姿に手を合せたくなるよと頭を下げて笑ひながら去つた。お顏をとお貞にうながされても雲右衛門は動かない。電燈が點いた松月老人が障子を音もなく開けて、むつつりと座る　雲右衛門は彈かれた如く驚いた。

『駄目か。やつぱり短刀を拔いて暴れたのに相違ないか』

父は更に子の行衛を尋ねた。學校で校長に說諭されて相手方の學友達に一々謝りに廻つてゐると聞いては父としての彼の自我がじつとしてゐない。朱總の十手を取出して歸つてみる、撲ち殺してくれると怒りに顫えた。そこへ電話がけたましく掛つて來た病院へ行つた。お力からの報告である。松月が立つて聞くと雲右衛門の病妻に對する心持をお力の口から聞いた。おつまは悅んだ初めて迷ひが覺めて藝の人で死ぬ。たゞの女と言はれたくない。藝の人になつて靜かに死にますと言つてくれと、松月老人はこの年になつてそれを聞かうとは思はなかつたと泣いた。その最中に物を投げる音、罵る聲が聞えて、雲右衛門と倉田楚水とが必死に取組あつて奧の間から轉つて出た。女や弟子達はうろ〳〵とするのみで手の出しやうがない。二人は罵倒をし盡しへとへとに疲れるまでつかみあつてゐたが松月老人等が無理に引放した。泉太郎についての爭ひである。雲右衛門の倅なら血へどを吐くまでも素手で喧嘩をしないのか。短刀を出すのは自分が弱いからだと父は子を憎んだ。唯一人の父、その父が世間から攻擊され非難されるのを夜の眼も眠らずに小さい心を苦しめる子の心、それが倉田にはいぢらしかつた。少年は學校で每日窮屈な修身倫理を敎へられてゐる。敎師に敎へられた倫理觀をもつて父の所行を見た時は、お貞を目の敵とし弟子共と喧嘩するのもみな父の侮りを禦ぎたい爲だ。短刀を懷に人に不良らしく見られるのも一身をもつて父の名譽を守らうとしてゐる、子なればこそ……と楚水は說いた。雲右衛門は餘計なお世話だとうそぶいた。寄宿舍の晩餐後生徒が十二三人廊下に出て月を眺めながら話し合つてゐる處へ泉太郎が出てゆくと生徒達は眼と眼で囁きあつて口を閉ぢた。そし

て輕蔑した目附で泉太郎を見てゐたがその中の一人が突然月を指差して雪々と叫んだ。すると一同がどつと笑つて雲々、あゝ雲が雲がと笑つた。泉太郎はかつとなつて短刀を拔いたのだ。極度の全盛者人氣者には世間は無意識の反感と嫉妬を持つ。そこへ毎日の攻擊の新聞記事、子の立場もよく察せよと倉田は涙を拂つた然し雲右衛門は伴に掩はれて生きたくない。校長に說諭されて友達に詫る位なら何故短刀を拔いたと責めた。九州の女洋社へ逐ひ出して失ふと言ふ雲右衛門の眼先へ倉田は朝鮮產の大虎の皮をどさりと投げ出した。伴の退校を許して貰ひたさにそつと校長に送り物をしたのだ。大きな口を利きながら見つともない眞似をするなと罵つてゐるがお持ち歸り下さいと言はれて悄然と泉太郎を連れて引退つた自分の姿を倉田は思ひ出した。

『親父の苦勞した九州に、至急泉太郎を追出してやつてくれ』

雲右衛門は悠然と去るのを倉田は三度呼んだ。電話の鈴がけたましく鳴る。

5

離屋である。雪のつもつた植木や老松が白く見える。日はとつぷりと暮れてゐる。泉太郎が悄然と腰を掛けてゐるのを松月老人が頻りに慰めてゐる。そこへ長髪を切つた入道姿の雲右衛門が這入つて來た。松月はお前さんの昔の師匠のおらアが賴むから子供に手荒なにとをしてくれるなと言ひおいて去つた。あとには親と子とが二人で始めてむきあつた。

『病院のお母さんも、どうやら駄目らしいぞ』

泉太郎は驚いた。電燈が點いて父の頭を見て子は再び驚いた。一生のお願ひだから父の弟子にしてくれ、二代目を繼いで桃中軒の家を守つて行きたいと、それにお父さんの健康も……と言はれて雲右衛門は　然として子の手頸を握つた。氣がついてゐたのか。だが二代目はいらない。後に殘そうと言ふのが藝人の氣の迷ひだ。一代に立ち一代に滅びる、そこに眞の藝がある。

『一人の藝術家がその藝を完成する迄には、その周圍に幾人の犧牲者をつくると思ふ。何人の魂を食つて來たのか知れない』

今日の病院のお母さんもその一人だ。幾人かの屍を踏み路えてやつとこの藝をつくつたやうなものだ。お前などは氣が弱い。と子を前に雲右衛門はかつて言つたことのない愚痴を竝べて凝つと降る雪を見つめた。

6

大正五年十一月七日の午後である。東京郊外雜司ヶ谷の粗末な新築家屋の八疊ほどの二階座敷で南より陽光をうけ目白臺若合の晩秋を展望し得る室の中央で雲右衛門は昏々として眠る。舞臺用の卓子友禪の樂屋蒲團、虎の毛皮など見れば彼の豪奢なりし過去が偲ばれる。省線電車の音は折々遠く聞え、懸巢の鳴音は靑空に澄みてひゞく。銀杏の黃葉が風もないのに落ちる。看護婦が瀨戸火鉢に凭れて婦人雜誌を讀んでゐる。雲右衛門は惡夢に魘はれたのか低く呻いて眠を覺した。窓をあけてくれ、空が見たいと望んだ。

お力の力八が病氣見舞に下まで來てゐた少し起してほしいと衰弱した軀を病床に抱きあげられて、

『あゝ、好い心持だ。人間はたゞ起きて座るといふことさえ有難いことだ。立つて、歩けるやうにさへなれば最う何も要らない』

九度二分の熱にさいなやまされつゝある人間の哀れな言葉。階下では甲府の聯隊から休暇を貰つた泉太郎が軍隊訛りで喋つてゐるのが聞えて來る。今の雲右衛門にはそれも微笑れるほど懷しい事であつた。泉太郎は昨晩も遲くまで大石東下りを稽古してゐたといふ。誰か呼んでくれと言ふので田內は階下に聲を掛けた。藝者の力八、それに泉太郎を育てた主婦のお時、門弟、學生などが梯子段を狼狽して掛け上つて來た。雲右衛門は人々の騷ぎを見て眼を瞑つて若々しげにまだ死なゝいよと言つた。力八はひとり居殘つた。雲右衛門かお時と一緒になつたのは二十年ほど前、女が神明に出てゐた頃だ暫くなかゞ途絕えてゐて、おつまと九州に落ちる時、泉太郎を賴んで行つたするとお時奧樣が第一號ですねと力八は笑つた。おつまも死んだ千鳥のお貞も死んだ廻り廻つて最初の女の厄介になる。可笑しいものだが、納るところに納つたとも言へる。然しもう一度日本一の歌舞伎座の舞臺に立つて東京中の人氣を唸らせて見たいと雲右衛門は願つた。そこへ濱松の興行者津坂某が手金を返してくれと言つて來た。泉太郎は自分が働いて父の借金の抵當にならうといふのを制して金を返してやれと言ひつゝ桃中軒はうと〳〵と睡つた。五百圓縞の財布から出して失つた後には五圓紙幣が十二三枚、それが今の桃中軒の全財產であつた。泉太郎は聯隊長が極端な雲右衛門贔屓なのでゆつくりと休暇を貰つて歸つて來てゐた。お前はお前の世を作つて行け、雲右衛門の子に生れたことがお前の不幸になつてはならないと父は敎へた。この頃段々聲が出るやうになつた。この咽喉さへ死なゝければいつでも一聲千兩だ。と雲右衛門は自ら慰めてもみた。田內が水藥をもつて上つて來た。脈を見る彼女の眼は不安そうにおのゝいた。雲右衛門はおとなしく眼を瞑つた。倉田楚水と磯野一石とが靜かに這入つて來て泉太郎と眼で囁き合つては顏色を曇らせた。間もなく桃中軒は眼を覺した。竹の家さん每度有難とうと磯野に對つてもその聲は優しかつた。

起してくれといふので磯野と看護婦が雲右衛門を抱き起した。無理をしてはとめるのも聞かないで泉太郎に辨慶衣川の段を語るから筆記をせよと言つた。これでも天下の雲右衛門だ驚くなと文句を考へながら微音にて歌ひ出した。

『加賀の國は能美の郡……しかも小松の片ほとり……

苦しげに啖入つた。どうだ一聲千兩だ何うだ。千兩千兩と呟きながら歌ひつゞけた。

『行者問答を致すといふ……辨慶安宅の法螺の吹きじまひ……』

階下より一人上り、二人あがりと上つて來た人達は、椽側に立竝んで悄然と聞いた。

（華）

喫煙室

高橋蓼雨

△でつぷりと太つて背丈けもあり、男がよくて温和しく、中等以上の教養もあつて非常に人好きのする禪優市川新舛、近來健康勝れず血壓百五十を算し、加之、女形ゆへ鉛毒さへ加はつて息切がする。

如何なる獨逸の名藥、支那の草木に親むでも今日の狀態を持續しては軈て冥途の蓮華座へ出勸せねばならぬと斯道の大家から途方もない宣告。

普通人なら氣絶せむ計りに驚く處、其處は禪の力で一切の執着を斷ちて去年五月辨天座の矢口の渡の娘お船をお名殘りとして血壓の下るまで暫時隱退。

先づ、愛妻は實家の水明館へ一時お預け門人と男衆へは莫大のお金を授けて解放。

家財家具文具馬具、マサカ)、額、軸、置物屏風、衝立、お茶の道具、箪笥長持布團蚊帳に下駄箱、十姉妹にセキセイインコ、釜の下の灰から狆まで叩き賣つてしこたま懐ろを温め、デバ――で嶄新輕便なる文化世帶道具を購ひ、奈良の都の片ほとりへ理想の家を構え、猿澤の池で瓢を弄つたり、春日社頭で鹿と戯れたり十年近い溜飲を一時にさげて有卦に入つた。

煩はしい都塵を避けて大金持つて清閑なる田園生活の樂み、それは如何なる言葉をもつてしても到底言ひ現はせるものでなく、心身次第に健康となつたのも皆醫學博士の賜、買へるものなら三笠山の鹿を丸煮きにして一匹送りたいとまで思つた。

然るに此度、相州、鎌倉、雪の下へ宏大なる家を構えて轉居した。

『好きな三笠山や大佛樣へ屁を嚙まして何んで雪の下へ移りましてん』

新舛、太い手で烏打帽子の上から頭を掻いて

『萬年暦で相性を調べたら鎌倉の方が私の星に合ひます』

あの爰な、嘘つきめが

△あの銀行も戸を閉めた、是れも休業、取附騒ぎの財界動亂の、それモラトリアムの臨時議會のと國を擧げて騒ぎ立つ。

是れも財界安定の一助にもなれかしと道頓堀中座は、まことに千古の龜鑑たる鹽原多助經濟鑑を上場して連日賣切り。

時も時、手堅いで有名な不動銀行が、あの大一座を五日間買ひ切つて大口の預金者へ芝居を觀せる。

鹽原多助に扮する中村鴈次郎の口上

『私等親子三人も以後は懸命に働きまして軈ては不動銀行の贊助員にもなります……』

桑財家揃ひの觀客喜ぶまいことか、急霰の拍手を送り。

『イヨ――、林日銀總裁ッ……』

△松本幸四郎の妻女の訃音が、曾我廼家の太夫元、京都の豐島の宅へ達す。

同氏電報を丁寧に展て遙に東に向ひ默禱。

但し、是れは自宅であつて、三條の橋の上ではなかつた。

△伊井蓉峰が、河合武雄、村田嘉久子、河村菊枝、外、無數の女優等と合同して中座へ出勤と聞き躍り上る程喜むで。

『恰で女護ケ嶋ですね、あゝ、女ひでりの國へ往き度い』は、ちよつと手荒い。

△常磐津文賀太夫の社中文左衞門、此程九州へ巡業についていて熊本で筍を食べ過ぎ顔一面に腫物が出來た、平凡な顔よりは少々凹凸のある方が却而愛があるとて彼の女との仲益々繁くなり、朝から喋々喃々の密き言に部屋入も氣遣はれる。

小倉勝山劇場の初日の中幕『釣女』の幕が明いて、右團次の太郎冠者が一本の釣棹を指し

『貴方樣は女好き故、二本ぼうにならぬ樣一本棒をお授け被成たので御座りませう』

の詞尻でフト瞳が文左衞門の方へ向いた、文左はてつきり己れを揶揄したものと誤解してプッとはづし

チリチッシャン、釣ろよ、釣ろよ、神の教の釣針を、おろしみめよき妻を釣ろよ

の常磐津がしどろもどろ

右團次と、臆病口にて出のキッカケを待つ醜女に扮ずる長三郎の二人カン〳〵になつて怒る、文左衞門、家鴨の火事見舞の樣に四ツ這で兩優の前へ底頭平身で事濟み。

宿へ歸つて額の瘤を手鏡にうつし

『熊本で食べた筍には女難の相でもあつたかな』

と、突き衿してチュッと鼠啼き。

△上野公園の西郷隆盛の銅像生寫しといふ頭取嵐岡六、五月一日仁左衞門一行に隨つて廣島へ往く、此人には大阪に關の地藏さんよろしき隱し女がある、妻女何子のお冠り極度に曲る。

『堰けば溢るゝ谷川の水』で、

今は旅行先迄追驅る始末

『蟻が穴を塞ぐは大雨』

『夕方に鳩が啼いたら晴天』

『早朝に猫の啼き聲は亭主の浮氣』

今、二階で三毛猫がニャン〳〵啼いたからには本職の易斷を煩はす迄もなく、夫岡六が彼の女と忍び逢うこと鏡にかけて見る如し。

と、廣島へ急行して旅館の布團へ藻繰込み岡六が歸るなりガバと刎ね起きて檻を放れた猛獸のやうに胸倉へ武者振ついた。

岡六心得たりと舞臺の上の殺陣よろしく、ひらりと身を交はして蹴倒し火箸握つて上段構への應戰支度。

軈て電光に透かして見ればチョイ〳〵御目にかゝつた樣な御婦人、よく〳〵見れば昨日大阪で別れて來たばかりの紛ふ方なき怖はい〳〵愛妻何子。

男は平蜘蛛の樣にへたばつて、『向後は人間は無論の事、犬、猫、蚤、南京虫に至るまで、女とか雌とか名のついたものには一切言葉も交はさぬ』

といふ條件つけてやつと家内を大阪へ歸したあとで、廣島中の金物屋といふ金物屋を片ッ端から搜し

『三毛猫に嵌める小形の口輪はおまへんか』

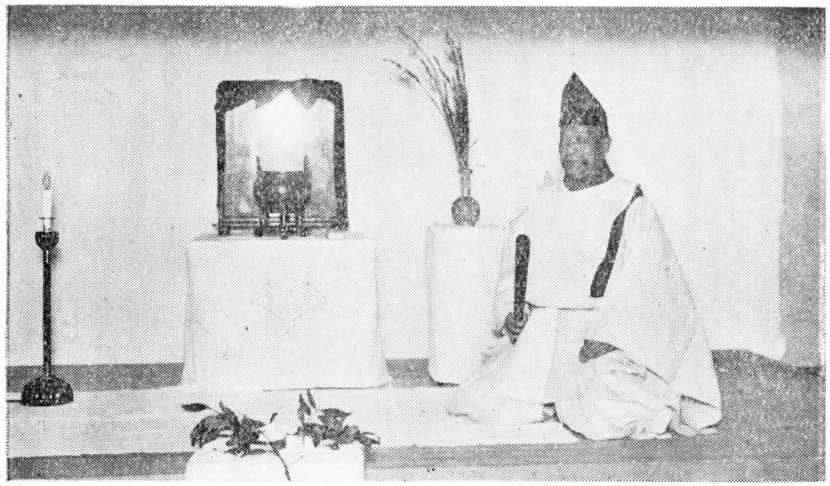
△曾我廼家八十郎(匿名)といふ醜男、舞臺へ出ても科白が言へずキョロンとして居る、何んでも堀江の或るお茶屋の美人の許へ魂を置き忘れて歸つたらしい。

是れから受取りに往かうといふ釉を確つかと捉らへた或る智惠者。

『それなら勿怪の適藥がおます』

『お醫者さんでも有馬の湯でも治らぬ病、矢張り魂を取かへしに……』

『廢めときなはれ、道修町で反魂香を買うたらすぐ戻ります』



衣冠束帶の食滿南北翁

第四回川柳座主催

故片岡愛之助句會

五月廿八日夜・於『北むら』樓上

下關で客死した片岡愛之助を舞臺の人女形としての愛之助以外に川柳家如柳として惜しむもののみが寄つて五月廿八日二七日の前夜ゆかりの多い同弟北村春歩氏の三階で追悼句會を永く共に川柳を語り句を作つた同志の川柳座主催で催した

正面舞臺眞白の裝飾の中にありし昔の愛之助を偲ぶべき寫眞には、淋しい黑色のリボンは結ばれて、洒落を好み、川柳を愛した如柳の靈を慰めるには餘り平常の句會には見られぬ一種の淋しさが漲つてゐる然し衣冠束帶の南北翁が誄を讀み偲んで。からは如柳のありし當時の句會の如く賑やかになつて地下の靈も微笑むだと思はれる盛會の句會となつた。席題兼題は左の如し（出席者口繪參照）

旅先　互選

旅先きで書く筈書けぬ續きもの　一白
旅先きでせんぐり買つた物を見る　同
旅先きで仕立てた柄をけなされる　同
旅先きをつい〳〵忘れわすれられ　天平
旅先きの毒がそろ〳〵痛がゆし　同
旅先きの日記は內で見せられず　斗紅
小爲替が屆かぬ內に次ぎ場所　桂壽
旅先きの地圖が殘つてゐる鞄　溪花坊
旅先きで一ト月早い夏を知り　同
旅先で敵同志が巡り合ひ　藻水
旅先きで嬲られてゐる若い人　同
旅先きでチト氣に入らぬ下駄を買ひ　種二
旅先きへ天下晴れての女なり　同
踏切は旅先といふ慌てやう　義矢滿
旅先きで人柄だけの金が切れ　同
刺青を見せて旅先面白し　文久
旅先へ來て舊名の人にされ　同
旅先で馴染む女に義理をもち　文錢
旅先の手帖へとめた國訛り　蝶二

旅先の忙しい中に連れが出來　波郎
旅先の賢い顏で文を書き　同
旅先の喧嘩に子分先きへ去に　木午
旅先の便り少々嘘を書き　同
旅先へとてもおぼつかない無心　蹄二
旅先へ電報爲替先きにつき　同
旅先の便り大いに涼しがり　銕也
旅先でおもろい役者死んで行き　繁二
旅先でちつとばかりの戀があり　同
旅先へ參らせ候のはかどらず　蚊象
定宿へ附箋の手紙先きに着き　同
旅先のことで女房もの言はず　南北
旅先と家とがカットパックなり　同
旅先で好みの煙草手に入らず　同
旅先でよく似た犬も走つてゐ　水府
旅先で昨日と同じ記事をみる　同

月末　互選

月末の帳場緊張して座り　溪花坊
月末へあまり信用され過ぎる　同
たゞ遊ぶやうに帳場のお客來る　蹄二
月末になつて旦那の有りがたみ　同
月末になると默つてゐる男　夢路
月末の算盤もてば腹が立ち　同
月末は捨て鉢らしい三味に聞き　同
月末をはつきりと知る足袋の穴　蝶二
月末といふにづしんと四斗俵　同
やけくそその欠伸月末迫るなり　義矢滿
月末の嘘は火鉢の灰に書き　同
歸つても出ても月末つきまとひ　蚊象
月末は常よりゐつらい食客　沙魚
月末の命百圓と少しゐり　文久
梳髮の女房に節季近くなり　波郎
月末に解決すべき腕を組み　文錢
女房が算盤の要る節季前　竹人
月末に富田屋の門通る也　漢水
月末になると女が惚れにくる　同
月末の氣分ランチで醉つてゐる　同
月末の三味線が鳴る小料理店　舟人
月末に一枚めくる雜費帳　三巴
月末といふも澁る氣のひとつなり　南北
月末をお茶屋ハツキリわけて置き　同
月末の高座は借の事をいひ　水府
月末の三等局をくぐりぬけ　同
月末にカンシヤクの立つオートバイ　斗紅
月末に見馴れぬ人が逢ひにくる　同
月末に女房の知らぬ金を持ち　木午
一と先づは五日拂で息をつき　同
月末を出合ひがしらに思ひ出し　天平
月末が來ると器用に手を合せ　同
交番の中に月末らしい顏　同

兼題　遺品　水府選

愛弟子の遺品になつた牡丹ぼけ　魁童
遺品分あと一枚のあてはづれ　扇
座頭はかたみの悋引き合はせ　同
遺品分け少し妾に不息あり　成太郎
借り下駄を遺品になつて思ひ出し　種二
棹を持つ指に遺品が光るなり　利男
氣に入らぬ遺品行李へ忘れられ　燈雨
遺品だと刀の目貫拔いて呉れ　波郎
遺品虫喰ふて代々長壽なり　文錢
振袖の遺品噂の中へ出し　三巴
生前の儘の書齋へ一七日　蝶二
或日フト遺品へ母のお念佛　竹人
縫ひさしの袷の主は墓の下　夢路
天王寺遺品の柄で老けて來る　當百
手から手へ遺品の文字は跳められ　舟人
遺物分け時間キツチリ皆樹ひ　同
燈明をともし遺品は箱のまゝ　同
肌に抱く遺品嬉しい型をする　文久
かたみまで妾宅らしく殘される　蹄二
御無心が遺品となつた涙なり　同
二タ昔たつて遺品に艷か出來　同
遺品にも多趣味であつた事が知れ　溪花坊
女形だつた遺品の派手ないろ　同
愛着の遺品の時計動いてる　藻水
遺品分け時計あんまり大きすぎ　同
氣味惡ふ遺品箪笥の底にあり　木午
姉ちやんの遺品だつせといゝ小唄　同
水引をすつぱり拔けた遺品わけ　同
遺物分ちつぽい犬が貰はれる　繁二
子のやうにしてゐた遺品二三點　同
まだ生きてゐさうに遺品据えてある　天平
裏表て別に間にあふ遺物分け　同
くど〳〵と手紙が添ふて遺品くる　南州
手を通すばかりのもある遺品分　同
遺品分け座敷か少し明るすぎ　一白
（人）
他人から遺品の値打きかされる　同
（地）
親類を遺品と共に惡くいひ　竹人
（天）
遺品まで洒落者だけに喜ばせ　波郎
蹄二

○鹽原多助劇、評

私の見たのは八日目である。

この鹽原多助なる狂言は鳳治郎の出世狂言とはいへ此の度の劇は實に大成功である。鳳治郎の多助やその他の各役について云ふより狂言全體として大成功を收め得たと云はねばならぬ。私はこの大成功については次の三大原因があると思ふ。

第一原因。各俳優がうまく適當に配役されたことである。例へば福助の丹三郎、莚女のお龜、卯三郎の太左衛門、魁車の久八その他すべてが適材適所に配されてあるこれがこの劇を大成功に導いた最大原因である。

第二原因。脚本が仲々よく出來てゐることで序幕の第五場鹽原内の場第二幕目、居酒屋の場、第三幕目、第四幕目の第三場、戸田家侍長屋の場、第四場鹽原角右衛門玄關の場、第五幕目の第三場多助内裏口の場等はこの脚本全場の中でもよい場である。

第三原因。チョボがよかつたことである。私は最近、京都にて有名な東京歌舞伎の一座の狂言を見たがチョボがまづいが爲めどれ程俳優がその演出に損をしてゐるかを感じた。大阪の清元、常盤津など東京の名人に及ばぬと同樣、義太夫は大阪でなければ駄目だといふことをつく〴〵思つた。

以上の三原因がこの度の「鹽原多助」を成功さした原因でないかと思ふ。然しこれは私のドグマ故當つてゐないかも知れぬ。

さて各役を評すると

雁次郎の多助。終始一貫して寫實的演出である。第二幕目の鹽原内の場は實に鳳らしい演出振りである。第三幕目の青と別れの場は最も深刻にやらねばならぬ場面であると私は思ふ。この場では觀客はすべて片唾ず飲み涙をぬぐつて見てゐたに拘らず私には期待したほどの感じは起つて來なかつた。これは私が余りに大きすぎる期待を持つてゐたが爲めかも知れないけれど、もし私以外のすべての觀客には涙の出る程深刻に感じたとすれば、私はこの功の一半をチョボに負はさねばならぬと思ふ。この時のチョボは非常によかつた樣に思つた。私は鳳治郎の最も成功した場面は第四幕目の第四場據原角右衛門玄關の場と同第五場炭問屋の場であると云ひ度い。

魁車のお は魁車としては上出來と云へないが第五幕目の樽屋久八に至つては一點の難も云へない樣に思ふ。

莚女の龜、は特筆すべきである

これは福助のお清、魁車の久八と共にこの劇中の三福對とも云ふべき名品である。

卯三郎は太左衛門と杢右衛門とをやつてゐるが太左衛門の役は卯三郎にピッタリ適した役丈けに難はない。

延若の小平は第一幕目の第一場に於ては、餘りよいとも思へながつたが第四幕目の炭問屋の場ではよい。この人の柄が大きいのでこの役には柄の上で適せぬのではないかと思はれる。

福助はこれも原丹三郎とお清との二役をやつてゐるが共によい。然しお清とりわけてよい。

吉三郎、右團治なども仲々活躍してゐる。

唯氣の毒なのは雀右衛門である舞臺上の雀右衛門を見て、私は往時の舞臺を想ひ起して、そゞろに淋しさを感ぜざるを得なかつた。

私は此の度、中座を見て鳳治郎一座がよい俳優を多く有してゐることについて東京の各劇團其の他大阪の他の一座に對して一段と勝れてゐることを思つた。が一方考へ直して見ていくらか淋しい感がした、それはこの鳳治郎一座の各

俳優の年齢を考へて見ると、鳳治郎、卯三郎の萬延元年生れを筆頭に多くは明治十年以前の生れである、唯、右團治、長三郎、扇雀、成太郎、などは明治十年以後の生れであるが右團治、長三郎の他は未だ若年であるもし此の十年或は十五年後になつたならばこの一座は如何になるか？東京には、左團次、松蔦、秀調、猿之助、勘彌、三升、三津五郎、彦三郎、菊五郎友右衛門、時蔵、吉右衛門、其の他五十才以下中年の俳優が實に多い、然るに大阪には唯數名に過ぎない。實に後繼者が少い。何と憂ふべき狀態ではなからうか？鳳治郎一座の俳優諸君もより一層後進のことについて考ふべきではなからうか　（京都、本陣良平）

○歌舞伎のために

菊池寛、小山内薫氏等は、歌舞伎劇は、すでに、亡びたとか、早や、三、四年の壽命だと、云つて居られる。

果して、歌舞伎は、滅亡？

淺い經驗の余が、見て、歌舞伎は、目下の所、滅亡を、余儀なくされは、しないだらう？特に、關西の其れは、關東の其れよりも早くと、云ふ、悲感論を、提出せねば、ならない。舊きは、亡び、新らしきが、起る。之れが、進化の法則？

泰西の、名戯曲 SOPHOCLDS は、一九二七年の今日でも、其の上演は、多大の喝采を、博するさうな。余は、其のドラマは、知らないが、其の壽命は、可成、永く存するらしい？

數百年の、傳統に、依り、洗練に、洗練を重ねられた、我が、歌舞伎劇の各々は、目もさめるばかりの、繪畫的の、美的情緒を、殘して行つた。

歌舞伎劇の持つ大きな、ドラマチカル——文明開化赫躍として、輝く、昭和新時代、戯曲家と稱する人、雨後の筍より猶ほ、繁しと雖も、余は敢へて云ふ、誰か又、其れを、よくする。人ありやなしや。

斯く、世界無二の、我が歌舞伎界は、因襲の暗雲に塞されて、今や其の進退は極つて、西すべき？東すべき？教へる人も迷ひ、教へられる人も、迷つて居る。團十郎坂田藤十郎、大近松、大出雲、大南北、大默阿彌等は、地下で泣いて居るであらう。

その原因は多い。余が、此の問題を研究するには、余り多く、才智の缺乏が、感ぜられる。文明は我が歌舞伎劇を、退けて行く、即ち、大きな時代と云ふ、急流に依る物で有る。尚、一言すると、大衆、特に若き大衆の心が、歌舞伎劇から放れて行く。歌舞伎劇の持つ數多い約束事を、知らない爲めに、面白味、藝術味を減殺して行つた事に依る。日本人殊に、關西人は、劇藝術を遊戯視化すぎた事も、大に、原因して居るらしい？

無限の大衆を、味方にして居る映畫、次に劍劇、これらは、どれだけ、歌舞伎劇の消長に影響したか、其の量の大なるには、驚く。

余等の如き、センチメンタルナ若人でも、歌舞伎劇の約束を考究して、其の場に臨むと、其の妙味は無限に涌く。武者小路實篤氏の云はれる如く、藝術の價値は、多數決に依る物ではなく、好む迄は多くの時日を要しても一度之れを好むと、其の好みの度合は、他の好みを壓する所に、藝術味否價値は有ると云ふ事を、しみ〴〵と、感じた。

竹内勝太郎氏は、本誌で、歌舞伎は其の古曲化する事で、存續すると、意見を述べられて居るのは痛快の極りだ。（三重縣加藤弘一）

募集

讀者倶樂部を設置しました。劇評や感想を募ります。十五字詰二十行以内、締切毎月二十日。「讀者倶樂部と朱書を希ひます。

小道具 小切

貸衣裳

松竹衣裳部

本店 大阪市南區久左衛門町八番地
電話 南一一八八番
東京支店 東京市淺草區並木町十五番地
電話 淺草五五九九番

素人演藝會 春秋溫習會
宴會の催物 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘ず御利用下さい
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

編輯後記

姥谷生

◇本誌は只『幕間のお娛しみ』としてジャーナリズムに墮してもいけないが、また餘りに『保存に價する』研究的なものであつてもいけない。凡て製產的に進展させて行くためにはこの二つをかねたものでなければならない。これが眞に『充實した內容』だと思ふ。さうした意味でこの月などは見て面白く、良い雜誌になつたのを悅んでゐる。せめて毎月この位の充實した內容をもちたいものだと希つてゐる。

◇歌舞伎、新派、新劇と喧しく論議されてその興進衰退も劇しい中に『文樂』のみは劇界の一隅にあつて、つねに世間から閑却されがちである。こんど特に本誌が文樂のために幾頁か割愛したのは無意義でないと思ふ。高安月郊氏の『人形淨瑠璃の危機』や木谷蓬吟氏の『朝顏の話』など並山秤石、高谷伸の諸氏を始め、當地劇評家の高原慶三、富田泰彥京極利行諸氏の感想や考證は好讀物たるを失なはない。

◇その月の芝居の上演に際して、俳優や作家から抱負や感想、また作品に就て何か書いて貰へることは、觀衆と積極的になるために好いことだと思ふ。伊井蓉峰、河合武雄兩優の『御挨拶』代りの『新派に對する感想』や楠田敏郎氏の一文は現下の問題として考究すべきものである。こんど小酒井博士から『龍門黨異聞』に就て一文をよせられたのはうれしかつた。突然平野止夫氏の『戀の受難』が當地では上演禁止となつたので筆者に對してお氣の毒でたまらない。作品の受難となつたわけである。美味しい實をとられた『柿の種』だけでは貰つた者が却つて迷惑である。名古屋や東京で上演されたものが當地で許可されるのが當然であると思ふ。この不規則な『脚本と檢閲』は何とかして欲しいものである。いつまでも月に吠ゆる犬であつては情ない。

◇澤田正二郎氏の『道頓堀の灯に微笑む追憶』は今日ある新國劇一黨の凱歌に他ならないが、額田六福氏の『苦悶する澤田』と對照して興味深いものである。鈴木善太郎氏の『彼等の求める戲曲』は必讀の上一考を煩はしたい。錦貫六助、津村京村、安間確郎の諸氏に『桃中軒雲右衛門』の戲曲評をやつて貰つた。林久男、十菱愛彥、淸水三重三の諸氏から回答として興味深い澤田の印象や感想を頂いたので特に掲載させて貰ふことにした。

◇川柳座のことで食滿南北翁や日比老人にお世話になつた。それから今度鳥江銕也君が手傳つてくれたので大分助かつた。擱筆するに及んで先輩諸氏讀者諸賢の御健康を祈る。

昭和二年六月一日發行
雜誌 月刊 『道頓堀』 六月號 第十輯

□誌代は前金でお拂ひを願ひます。
□郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
□御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵料四錢)

昭和二年五月廿七日印刷
昭和二年六月一日發行
編輯者 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹合名社 姥谷久一
發行者 大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五番地 鳥江銕也
印刷者 大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五番地 松本米藏
印刷所 桃谷印刷株式會社 電話南 三〇六二番 三七二二番
發行所 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹合名社 電話南 一二四〇番 六六六五番

昭和二年五月三十日印刷
昭和二年六月一日發行

若く明るい顔になる
レート白粉

東京 平尾賛平商店 大阪

金參拾錢（郵稅四錢）